

又清壽の二年間。

ついにスミダギに終えた私たちは

何色の法衣加具を

着て見えていたのか？

(表紙揮毫：富増力章氏)

目 次

	ページ
お世話になったみなさんからのメッセージ	3
2期生講義状況	9
一年目を振り返って	10
二年目を振り返って	14
グループ研究の報告	
・ くいいじ	21
・ ふれあいビレッジ夢番地	39
・ 敬天愛人	59
・ ネットワーク夢創	81
個人のページ	
～それぞれのおもい～	101



2期生の皆さん、卒塾おめでとう。

2年間、いろいろと苦労したことと思います。1期生の人たちの積み上げた経験はあるとはいえ、人生いつも新しいことにぶつかるものです。それはたしかに筋としては前にもあったことかもしれないが、具体的には前にはなかった新しい事態です。

僕は大学教師として1959年から2001年まで42年間過ごしました。国立、県立のちがいはあれ、大学という中で出会ったことは、ある意味では同じでしたが、出会った学生はみなさまざまでした。そしてその度ごとに事態は異なっていました。文部省の縛りという大きな制約はいつも変わりませんが、それも徐々にとはいいながら少しは変わりました。

学生も最初の農工大生のむちゃくちゃ貧乏な状態から、かつての日本の経済高揚のおかげで、全く変わっていきました。「今年は生協のテレビが売れたそうだ」「へえー、学生も金持ちになってきたんだなあ」などという会話を教師仲間でしたことも、今はなつかしく思い出されます。

その後、大学の問題はちがった方向へ進んでいきました。これからも世の中はどんどん変わっていくでしょう。

それにどう対応し、どう乗り越えて新しいものを開いていくか、それがわれわれの毎日の苦勞でもあり、大げさにいえば楽しみであり生きがいでもあるのだと、ほくは思っています。

おうみ未来塾塾長

日高 敏隆



コミュニティでビジネスを



おうみ未来塾運営委員会委員長・滋賀大学教授 北村裕明

おうみ未来塾は、地域プロデューサーの養成をめざした学校です。地域プロデューサーとは、地域の問題を発見し、解決のための方策を考え、そのための運動や事業を起こすことができる人であると、私たちは定義しました。とりわけ、実際に事業を起こし

創り出す能力の開発に力点をおく必要があると考えています。

ではなぜ、コミュニティでビジネスを起こそうという意思と能力を持った人物＝地域プロデューサーが、今日必要とされるのでしょうか。

明治以降日本社会は、欧米社会にキャッチアップすることをめざしてきました。その際、処方箋の多くは、すでに欧米社会の中にあり、そこから学びとることが重要でした。しかし、1980年代以降、日本社会は、フロントランナーとして、自ら問題を発見し、解決の方策を考え、実践することが強く求められるようになったのです。中央政府で政策を考え、それをマニュアル化して地域で実践させるという手法では、もはや十分な効果はあげられなくなってきました。地域社会で様々な実践が行われ、その中で優れたものを支援し、全国に広げてゆくという手法が大切となってきました。また、行政がもっぱら地域の問題を考えて処方箋を書き実践するという手法も、効果を失いつつあります。市民と、事業者と、行政とのパートナーシップが必要とされるようになったのです。そして、市民や事業者が自発的に地域の問題に取り組み、行政が多様な地域の活動を支援することが求められるようになったのです。そこで必要とされるのが、地域プロデューサーの資質を持った人物なのです。

地域プロデューサーという言葉は、今日必ずしも市民権を持っているわけではありません。また、未来塾のカリキュラムがそうした資質の養成に十分に対応しているわけではなく、大いに改良の余地のあることも十分認識しています。しかし、コミュニティでビジネスを起こす意思と能力のある人物養成が、日本社会の構造的な改革に必要不可欠であることも確かなことです。未来塾の卒塾にむけて、皆さんがグループ研究に込めた思いと努力に敬意を表したいと思いますし、それがコミュニティでビジネスを起こすきっかけとなることを、心から期待するものです。



2期生に期待するメッセージ

おうみ未来塾運営委員・法政大学教授 岡崎昌之

2年間にわたる未来塾としての活動、ご苦労様でした。メールで皆様の活躍の一端を垣間見させていただいていました。随分とさまざまな活動を展開されたり、議論を闘わせておられる様子が見て取れました。そうした経緯を経て、2期生として、また各グループとして結束が固まり、強固な人的ネットワーク形成が築かれたものと思われまます。まちづくりのプロデューサーにはこうした人的ネットワークが不可欠です。何か手におえない問題が起ったとき、新たな課題に挑戦するとき、最も頼りになるのは、このネットワークです。しかし今回2年間の月日をかけて形成されたネットワークも、活動を停止するとただのネットです。ネットが機能して、働いて（ワーク）初めて“ネットワーク”となるのではないのでしょうか。そのためには皆さん一人一人が、積極的にこのネットに働きかけることが必要です。いつまでもおうみ未来塾2期生のネットワークが機能しますように！



これからの地域づくり

おうみ未来塾運営委員・NPO政策研究所理事長

木原勝彬

私は、いま、地域づくりの質が問い直されていると思っている。つまり、「持続可能社会」・「分権社会」・「市民社会」という3つの社会の実現を踏まえた地域づくりの推進が期待されていると考えている。

「持続可能社会」とは、環境・経済・社会というの3つの要素の相互依存性に配慮した社会・経済運営を実現する社会である。そのためにも、自然生態系に配慮し、地球に負荷を与えない健全な環境のもとで、働き続けられ、かつ安心・安全・安定した豊かなくらしを、世代を越えて連綿と実現し続けることができる「持続可能な地域づくり」が求められる。

「分権社会」の実現とは、住民自治の確立である。それは、日常生活の身の回りで発生する問題は、まずは個人や家庭が解決し、個人や家庭で解決が不可能な問題はコミュニティで解決し、コミュニティで解決が困難な問題は市町村が解決するという補完性の原理に根ざした「住民自治システムの確立」にある。

「市民社会」の実現とは、地域民主主義の確立である。そのためにも市民・NPOの政策形成力の強化、及び市民・NPO・行政・議会が参画する「政策協議の場（公論の場）づくり」などの取り組みが期待される。

つまり、「持続可能な地域づくり」・「住民自治システムの確立」・「政策協議（公論の場づくり）」という3つの取り組みを統合化した地域づくりが、これからの地域づくりの姿ではないだろうか。



2期生に対するメッセージ

おうみ未来塾運営委員・パートナーシップサポートセンター
事務局長 岸田眞代

おうみ未来塾2期生 ご卒塾おめでとうございます。

「未来」の「地域プロデューサー」をめざして活動した2
年間は、みなさんの人生や生活にとってどんな意味をもたら
してくれたのでしょうか。

講義だけでなく、自ら地域に出向き、多くの人から情報を収集し、時には議論をたたか
わせあって、それぞれのグループ研究をまとめあげてきたのだと思います。

私が係らせていただいたのは、そのほんの何十分の1かにすぎませんが、同じ一市民
として、場所こそ違え地域づくり社会づくりに関わっている仲間として、熱い想いや志を
共有できればと心から願いながらであったのはいうまでもありません。

(コマーシャルを少々借りれば、)まさに「汗や涙を流した分だけ強くなれる」のです。
「地域プロデューサー」の名が、ほんものになるかどうかはこれからです。ともに汗を流
し、涙を分かち合って、「地域」の「未来」をつくっていきましょう。



2期生に対するメッセージ

おうみ未来塾運営委員会委員・滋賀県環境生活協同組合
理事長 藤井絢子

おうみ未来塾2期生の皆さま、もう二年経ったのですね。
でもこの二年間にそれぞれのグループが、グループ内議論は
もとより、地域に入りこみ新たな出会いをつくりながらテー
マの深めをしていったことと推察します。

「もう二年」と「でもこの二年」を感じながら当初のテーマ設定への問いかえしを繰り返
しつつ、一つの形をつくっていったのでしょうか。このプロセスこそが重要で、更にこの二
年が次のステップへのスタートと意識し、いよいよ実現すべく地域プロデューサーとして
行動の時ですね。

私の友人の一人「構想日本」代表加藤秀樹さんは、真に地域を動かすには強いイニシア
ティブを発揮できる人材が必要だと語られ、現場のリーダーをイニシアティブと呼んでい
ます。共通する資質として、強烈な問題意識、関係者に納得してもらえる理念、周囲の人々
を巻き込む力、そして、それをひとつの仕組みとして汗をかいてまとめ上げていく力、を
あげています。

2期生の皆さまが、このようなイニシアティブたることを期待します。

～事務局からのメッセージ～

二期生の皆さん、2年間の頑張りに敬意を表します。卒業と同時に地域プロデューサーとしてスタートされるに当たり心からお祝い申し上げます。

さて、社会構造や環境等に質的变化が起きている中で21世紀を迎えた今、全く新しいルールによるシステムの構築が求められています。このような状況の中で今後地域づくりなどの様々な分野において多様な課題を解決していくためには、より人間らしい生き方・考え方の上に立つことが大切であり、そのベースの1つは「万物との共生」だと考えます。人間の命や暮らしは、全ての生き物と同じく自然の恵みによって支えられているからです。古くは經典の『往生要集』に「共生極楽」という言葉があり「共生＝共に生きる」という精神は仏教の真髄と言われています。また先のソルトトレイク冬季五輪の開会式に参加した増田明美さんは、人間と環境との「共生」の大切さを表していると伝えています。

この「共生」を胸に塾での貴重な経験とネットワークを活かし、自らの地域で楽しくご活躍されますことを祈っています。

常務理事（兼）事務局長 多田 功 一

淡海ネットワークセンターも5年間の過ぎました。この間、情報提供・交流事業などの事業に取り組んできましたが、中でも「おうみ未来塾」はユニークな事業であったと思います。塾生の自主的な取り組みを尊重しながらのプログラムづくり。言葉はカッコいいけど、実際どの程度の満足度があったか、事務局として反省すべき点は多かったと思います。センター事業にも、引き続きサポーターして関わっていただけたらと願っています。

阿部圭宏（市民熱人）

食い意地・食い維持・「くいいじ」のみなさん

1年間のグループ研究楽しかったですね。

昨年の5月は「食べることから始めよう」でどんな研究になるのか？食べるだけで終わりそう？少々（大変）不安でしたが、何度も集まって、食べて、吞んで、喋っていく中で動き（味噌汁を通じたまちづくり）が見えてきました。思いを出し合っるとにかくやってみる。やっていく中で課題も見えてくる。やっていることが楽しい。まず自分が楽しくなければ、他の人が楽しいわけがない。この1年で志賀町に撒いた種が、花を咲かせ実をつけて食べられるようになることを楽しみにしています。

あまかわたかお

2期生の皆さん、2年間お疲れさまでした。頼りない担当ですいませんでした。センターに来ていきなり担当した未来塾。個性の強い人が多く、最初からとまどいの連続でした。皆さんは卒業されますが、これで終わりではなく、これからのご活躍に期待しています。

川勝 六四

未来塾2期生の皆さま

2年間お疲れさまでした。おうみ未来塾生として地域や世代をこえてそれぞれの研究に取り組んでおられた姿は、時には頼もしく、時には大変やなあ、そして時には羨ましく感じておりました。この2年間、皆さんにとってどのような時間、機会、経験でしたか。皆さんの探していた答えは見つかりましたか。この卒業から、今度は皆さん一人一人の未来塾が始まります。でも時々顔を見せてくださいね。さらなるご活躍を期待しております。

福田千佳子

未来塾2期生講義状況

		内容
2000年	6月11日	開講式、日高塾長講話、オリエンテーション
	7月22日	ワークショップ「お互いを知るために」
	7月29日	インターネット講座(希望者のみ)
	8月19日	講義:テーマ「循環型社会への挑戦～菜の花エコプロジェクト」 講師木原勝彬氏、藤井絢子氏
	9月23日	講義:テーマ「地域づくりとサステナビリティ」 北村裕明氏、阿部美智子氏
	10月15日	講義:テーマ「まちづくりのあたらしい潮流」 岡崎昌之氏、奥村清和氏
	11月25日	講義:テーマ「市民のエンパワメント」 萩原なつこ氏
	12月9日	塾生会「塾生が語る」各自自己紹介、思いを語る
2001年	1月14日	ワークショップ「テーマだし」(株)コマニーCD研究所 毎田雄一氏
	2月3日	ワークショップ「グループ分け」(株)コマニーCD研究所毎田雄一氏
	3月17日	塾生会「グループ分け」
	6月9日	グループ目標発表会
	8月25日	プレゼンテーション技法 岸田真代氏
	9月30日	中間発表会
	12月8日	報告書の作成技法 藤原孝子氏
2002年	3月16日	研究成果発表会
県内研修 2000年	10月7日	彦根・夢京橋キャッスルロード 戸所岩雄氏
	10月22日	長浜・黒壁 笹原司朗氏
	11月3日	山東町・わーくわく310 宮部道雄氏ほか
	11月4日	高月町・雨森地区 平井茂彦氏
2001年	3月24日	信楽町・信楽のまちづくり 二期生富増力章氏
	5月26日	高島町宿泊研修(グループによる話し合い)

一年目を振り返って

2期生開講式／ピアザ淡海

2000年6月11日

県内各地で地域活動中やこれから行動しようとする老若男女27名が、これからの2年間、そのノウハウを研修するべく、一堂に会す。知事さんからの歓迎の言葉、日高塾長からの激励の講話を聞きながら、新鮮な感動を覚えた。がんばるぞ！

ワークショップ「塾生を知るために」／ピアザ淡海

2000年7月22日

このグループの人たちに出会ったとき、なんと**ばらばら**なのだろうと感じた。けれどグループの命名や目的を話して一つにまとめていく中で、ばらばらの人を少しずつ知りながら、まとまってきた。それぞれの役割を見極めながら動け、チームワークを実感した。とても楽しかった。

(s. k)



講義「循環型社会への挑戦」権並 清氏／愛東マーガレットステーション

2000年8月19日

初めての愛東町での現地研修。下水道は100% 菜の花プロジェクトを立ち上げ、これからのような花を咲かせるか？ マーガレットステーションは近く赤字解消。やった！

講義「私が動けばまちが変わる」阿部美智子氏

／ピアザ淡海

2000年9月23日

キーワード：フットワークの軽さ

多くの塾生が「まず動いて見よう」「とにかく動いて見よう」と感じたようだ。

講義「地域づくりとサスタナビリティ」北村裕明氏

／ピアザ淡海

Sustainability=持続的発展。つまり「孫、子の代も安心して生活を続けられるか？」という視点が大切ということ。そのために必要なことは、人づくり、システムづくり。



講義「夢京橋キャッスルロード」戸所岩雄氏／彦根

2000年10月7日

A 彦根が成功した要因としては様々にあげられるが、もちろん地域の人の大変な葛藤と努力があったからだと思われる。しかし、彦根には国宝の彦根城があり、もともと城下町として行政、文化、商業の中心地であったという基盤があった。それではそれが無い地域ではどのようなまちづくりを行っていけばよいのか。人を引きつけるものをどう発見し、活かしていくのか。それがこれからの未来塾で私が考えていきたい課題である。

B 今回の研修を通して、街づくりには住民参加が不可欠であり、地域住民が積極的に街づくりに参加できるような仕組みづくりが必要であることを学んだ。

C 「夢京橋」には、人のない卓越した志を具現化した夢の空間であるために人が集うのではないかと感じられた。 [参加した仲間の感想から]

講義「街づくりの新しい潮流」 岡崎昌之氏／愛東町

2000年10月15日

街づくりを「外から見ること」つまり客観的な目、外からの目による発見の大切さ。

講義「愛東町のまちづくり」 奥村清和氏

「地域を愛する心+創意・工夫」によって、愛東町のまちづくりが進められたのだなあと感じた。



講義「黒壁」 笹原司朗氏／長浜

2000年10月22日

笹原社長の強力なリーダーシップのもとに空き店舗の借り上げ等、様々な処方を使って高質の全体的な統一が保たれており、全国どこにでもある軽薄な土産物屋とかコンビニの進入を拒んでいるとのこと。各店舗も洗練されたものが多い。これは「皆で平等の立場で話し合っただけで進めよう」では多分出来なかったであろう。だからといってリーダーの独裁、専制、ごり押しで泣いている人もいるということにならないと思う。実際はどうなのでしょう。常に採算を考えて行政に頼らないことに徹しているとのことはお話の当然だし、すばらしい。「まちづくりをしているのではない。商店街の活性化を図っている」と話された事業家として当然の言葉だなと受け止めた。今まで気づけなかった視点だ。 [参加した仲間の感想から]



講義 わーくわく310 宮部道雄氏／山東町

2000年11月3日

山東町の総合計画がめざす未来イメージ“水やさしく光舞う美しい山東”を設定されたことが、住民の中に「わーくわく310」の活動を浸透しやすくしたと思う。またそれ以上に「わーくわく310」総会資料や情報誌の中に常に書かれている地道な活動の継続が「まちを変えたい、変える、変えるのだ」という言葉がこの活動に関わる人々の思いを表しているように、この気持ちを持って活動を進めていけば成功もおのずとついてくるように思う。 [参加した仲間の感想から]



講義「雨森のまちづくり」 平井茂彦氏／高月町

2000年11月4日

ふるさとづくりのエッセンス ー雨森からー

まず一つ目のエッセンスは、地区の運動会にみんなが参加していることではないか。たとえば種目は赤ちゃんから参加出来るものがあったり、他の地区ではあまり見られない中高生が活躍している。スライドや地区の新聞からも参加者の楽しんでいる様子が伝わってきた。また、その運動場は、みんなで河川敷の竹藪を切り開かれたそうだ。

二つ目のエッセンスは手作り。家々の前のお花は全てその家の人が「隣がしはんにやったら、うちとも」という気持ちだそうだ。自治会の強制や一時の花作りキャンペーンではない、そんなムードになった理由について、田植えの後、感謝の気持ちでお花を備える昔からの風習やきれいにしてある門角を外から来た人が喜んでくれることが張り合いになって20年も続いたのかも、と平井さんは話された。運動場と花作りに共通することは、住民の中から沸き上がる、雨森が大好きという気持ちではないかと思った。そしてその心は即席では出来ない。時間と土壤が育むものではないだろうか。

[参加した仲間の感想から]

講義「市民のエンパワーメント」萩原なつ子氏／ピアザ淡海 2000年11月25日

Empowerment……自分たちがおかれた状況を改善していくために判断力、交渉力、発言力&組織力をつけること

活動していくことで一人一人が力をつけ、それが組織化されて集合的な力となっていく

(目指すところは)→シチズン コントロール

「それ(活動)によって気持ちよかった、楽しかった、誰かが変わった、一人巻き込めちゃったら(いい)」「(活動は)ボッカーンとやるのではなく、ジワジワッと」「共感を得ていくことで公共性を広める」



塾生会「塾生が語る」／ピアザ淡海

2000年12月9日

いよいよテーマ別のグループ分けに向けてのカリキュラムが始まりました。

グループ分けには「企画力向上」と「グループ分け」の2回のワークショップが必要ということで、1回目は「塾生が語る」となりました。各塾生が決められた時間内5分、(話し手2分質疑)に自己を語り、皆に知ってもらうことが目的で行われました。

6月の開校式以来、約半年、仮のグループで何もないところから始まりました。

話したり、考えたり、寄ったり(酔ったり)しながら、思いを共有してきました。

自分の思いを伝えることの大切さと同時に難しさを感じた講義でした。

ワークショップ「テーマ出し」毎田雄一氏／ピアザ淡海

2001年1月14日

参加した仲間がグループに分かれ作成した「私の理想のまち」!

「集い、歴史、伝統、暮らし、共生」 稲田、高野、西田、松田、横江
「バリアフリー(物理的)、まつり」 鬼塚、前田、藤田、山元
「食べ物、土、水、子供、コミュニケーション」
伊藤、奥村、中原、永野、幡、馬場、森口



ワークショップ「グループ分け」 毎田雄一氏
／ピアザ淡海 2001年2月3日

グループ分けで大切なことはコミュニケーションを十分に図り、各人の思いを共有化すること。このワークショップで「理想のまち」について自分の考えをカードに書いて見ました。毎田さんの実践的なワークショップのおかげで一つのことを違った角度から見ることを体験を通して学びました。その後、「食」、「子供」、「夢の実現」、「まちづくり」を切り口にするグループの新しい4つのグループが出来ました。

塾生会「グループ分け」と壮行会 2001年3月17日

前回のグループ分けで「もう心は決まった」という人、「少し迷っている」という人、「決められない」という人……。気持ちが揺れ動いた時期でした。そこで各グループの代表者発表を行いました。子供の松田さん、夢の実現の鬼塚さん、まちづくりの稲田さん、湖国食の前田さん、各代表に熱い質疑応答の塾生会になりました。

「西田さんドミニカ共和国へ」

西田さんが青年海外協力隊の一員として7月から中米ドミニカ共和国へ赴任。ドミニカで2年間、水利開発普及員として水路管理や計画の仕事の予定。「日本の今日の発展は地道な水路作り、住民の手作業による努力の成果であると伝えたい」と力強く語ってくれました。

講義「信楽のまちづくり」 富増力章氏
／信楽 2001年3月24日

富増さんのことば：商工会青年部「これは何をするところや」と聞かれるのが一番難しい。自分たちももう一つ判ってない。ただし、前向きにいろんなことにチャレンジして自分たち若いんで、どんどん信楽のことを真剣に考えて、将来、自分たちが悔いを残さないように。子供や孫にすばらしい信楽を残そうという思いで、今、自分らで出来ることを一生懸命やろうやないかと、又、商工業者という立場から、その活動を通して後継者として、将来の経営者として人材育成というか自己啓発をやっつけようという思いで、これはもう思いしかなくて、みなさんと同じでこの活動をして得をすることはない訳です。



二年目を振り返って

合宿／憩いの里 湖西（高島郡大溝）

2001年5月26日～5月27日

《1日目》

“くいいじ（食のグループ）”、“ネットワーク夢創（夢実現グループ）”、“敬天愛人（町づくりグループ）”。“ふれあいヴィレッジ夢番地（子どもグループ）”以上の4グループに分かれて、6月9日の目標発表会に向けて、具体的な計画づくりを熱心に議論した。その夜は、宿泊の1室に集っての酒の宴で、夜遅くまで賑やかに、ワイワイガヤガヤと他のお客さんの迷惑を気にしつつの大盛り上がりだった。

《2日目》

前日に引き続き、各グループでミーティングを実施したが、参加者が数名帰った為3つのグループで、前日の続きを行った。

この県内研修を通じて各グループのまとまりが出来、発表に向けてのチームワークが生まれた。



グループ別目標発表会／アヤハレークサイドホテル

2001年6月9日

おうみ未来塾第3期生の開講式に続き、第2期生が来年3月の卒塾に向けての目標発表を行った。

24人の2期生がそれぞれの思いを共有する部分で、子どもとのふれあいの場づくりを通じて、子育てを考える『ふれあいヴィレッジ夢番地』、食にこだわって地域文化を見直したい『くいいじ』、ヴォーリスをキーワードに夢をかなえる町づくりの『ネットワーク夢創』、K町に焦点をあて、まちづくりを考える『敬天愛人』の4グループに分かれて、当日の発表となった。

最後に、本日出席をいただいた財団理事長の国松知事をはじめ、塾長の日高氏・運営委員長の北村教授ならびに、各運営委員の方々から叱咤激励(?)のコメントをいただいた。

その中で、グループ内のメンバー間の思いの共有化は図れているものの、方向性や具体性等でかなりの検討の余地は残されているとの講評だった。色々な意味で、過去でない未来でない「いまここ」を実感した1日だった。

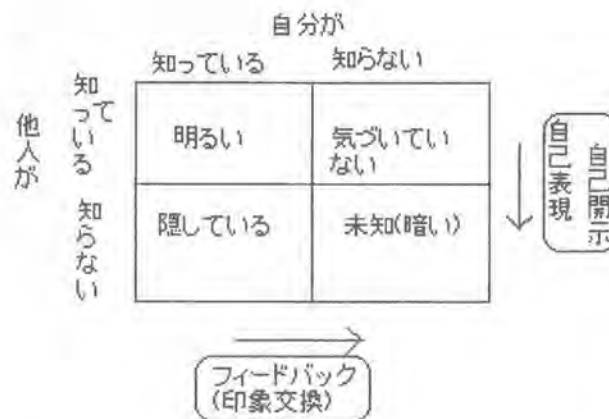


I. 自分を知らう、仲間を知らう(自己表現と印象交換)。

- ・ 5人ずつ3グループに分かれる。
- ・ 握手をしながら、自己紹介をする(1人3分ずつ。約1,200字の内容)
- ・ 自己紹介をした人に、一言ずつ返す(1人30秒)。

→「自己表現とは、最も自分らしい所を効果的にアピールすること」であり、
「印象交換とは、その人の印象を的確に述べること」。

- ・ ジョハリの窓



II. コミュニケーションとは(コミュニケーションゲーム)、

送り手のイメージを表現力により記号化(言葉やボディランゲージ等)し、受信した受け手が理解力に応じたイメージを持つことで、成り立つ。

送り手の表現力や受け手の理解力は、各々の価値観に影響される。

より良いコミュニケーションを行なうためのポイントは、

- ①相手の立場に立つ、②積極的傾聴(相手の話しをしっかりと聞く)、③ボディランゲージ(身体で表わす表情)。

III. 提案書とそのポイント

企画か、提案か、を区別し、なぜこれをするのかという目的意識を明確にする。

企画の3要素：論理性(目的に合っているか)、創造性(新しいか)、現実性(実現できるか)

企画の3つの行動：思考(考える)、文書にする(形にする)、プレゼンする。

IV. プレゼンテーション実施

今日の講義の内容をうけて、グループ発表をする。

グループ研究の班に分かれて、提案シートの作成し、1グループ7分間の発表をする。

→プレゼンテーションはコミュニケーションそのものである。聞き手の注意を引き興味を起こさせる(導入段階)、話の輪郭をつかませ主要な内容説明をする(展開段階)、言い換え繰り返しによるまとめ・質問(終結段階)というかたちで進める。

おうみ市民活動屋台村(9.29～9.30開催)参加

くいいじ

テーマ“手前味噌がはぐくむ未来の旨みを求めて”

敬天愛人

テーマ“「K町」にみる公共によせるころ”

ふれあいビレッジ夢番地

テーマ“地域で遊ぼう 地域で子どもを育てるのか!”

ネットワーク夢創

テーマ“ヴォーリスは偉人か?”



運営委員からの講評に対して、各グループで色々と思うところもあったが、これを機に、卒業に向けて各グループがより具体的な活動を展開していった。

デザインセミナー：講師 藤原孝子氏／つがやま荘（守山）

2001年12月8日

デザインの原則

- ◆近接……………関連する項目を近づけてグループ化すること。ひとつのまとまりとして認識されることで、情報を構造化し、混乱を減らすことができる。
- ◆反復……………色、形、質感、位置関係、線の太さ、サイズなどの視覚的要素を繰り返すこと。要素の関連づけに役立つ。
- ◆整列……………紙面上のあらゆる要素を意図的に配置し、視覚的な関係を持たせること。清潔、洗練、新鮮という印象を与えることができる。
- ◆コントラスト…視覚的要素(書体、色、サイズ、線の太さなど)にはっきりした違いをつけること。読者を紙面に引きつけるのに大いに役立つ。



実際に自分達で名刺やチラシのレイアウトをしながらの講義で、それぞれの個性がかなり出ている作品を見るのは面白かった。今回習ったレイアウトの手法が各グループの報告書でどのように生かされるのか楽しみである。講義後の忘年会は事務局のみなさんが初めて勢揃いされて大変盛り上がった。



二年間あっという間の時間でした。一年目はいろんなところを回りながら素晴らしいまちが県内にたくさんあることを知りました。二年目は、グループ研究で楽しい仲間と熱の入った議論をしたり、成果品としての資料提出が遅れていらしたこともありました。でも、忘れない！このなんとも言えない仲間達。みんなの地域のコーディネーターとしてのこれからの活躍、期待しながら負けないようがんばりましょう。



記 念 品

信楽の陶房「壺久郎」、すなわち未来塾二期生富増力章さんの作品です。

昭和62年から信楽で陶器の製作にかかり、土と技術に没頭した15年間。

最近少し自信のある作品が出てきたという富増さん。今後は未来塾の経験を生かして地域のコーディネーターとしても大きな力を発揮されるだろう。

塾長、運営委員長、運営委員の感想

——く い い じ——

◎味噌汁から楽しいまちづくりへ

新しい近江の味が提案できた。味噌汁の中で世代間の、地域間のネットワークがづくりができています。

重要な発見、未来塾らしい。

——ふれあいビレッジ夢番地——

◎地域のなかでの子ども達

情報ネットワークはどんなものが必要なのか明確にしないといけない。

今後の個々の活動について検討しているのが良かった。今後の活動が見えてきた。これからの活躍が楽しみ。



—— 敬 天 愛 人 ——

◎いま自治会を考える

自治会研究として高いレベルになっている。おもしろく興味深い話題である。

「恥」を自覚することによって住民の総意づくりが自然な状態で行われてきた。

マイテーマを決めて取り組み自治会の総合的研究となった。

—— ネットワーク夢創 ——

◎ヴォーリスから学ぶ

大馬鹿小馬鹿のまちづくり、リーダー像とは??

リーダーを育てる条件とは?

突出したリーダーより多数のリーダーがいることがいまは重要かも。

グループ研究の報告



手前味噌が育む

おうみ未来塾くいいじグループ 研究報告



「手前味噌が育む未来の旨みを求めて」

～味噌汁でまちづくり！～

新メンバー募集中。問い合わせは淡海ネットワークセンターへ

目次
(サイトマップ)

- ＋くいいじ紹介「くいいじ」とは・メンバーの思い
 - －なぜ味噌汁？なぜ志賀町？
 - －メディアで紹介された「くいいじ」活動
- ＋くいいじ歩み その1「堀越先生・嘉田先生のお話し」
 - －その2「志賀町味噌汁アンケート」
 - －その3「志賀中学ゲストティーチャー」
 - －その4「ルンルン味噌汁ミニコンテスト」
 - －その5「卒塾発表 志賀町味噌汁試食」
- ＋くいいじ明日「今後」「メンバーこれからの思い」
- ＋味噌基礎知識
- ＋味噌汁おわん「例会＆食べ物記録」

メンバー

奥村恵津子、金野弘子、永野麻也子(幹事)、馬場和一、前田壮一郎、幡郁枝(編集)

淡海ネットワークセンター事務局:天川隆男

※この報告書はWEBでも見ることができます。

<http://homepage2.nifty.com/itachi-suki/kuiiji/h-index.htm>

私たちは例会に欠席したメンバーのためにWEBでの例会報告をしていました。
それは情報の共有が目的でしたが、画像を交えての記録はそれだけで楽しいものでした。



手前味噌が育む未来の旨みを求めて 「おいしい」とは？

「食い意地」が張ってるぼく達の「食維持」の活動、つてな意味をこめて。

奥村 人は土から生まれ 土にかえる。

環境・食文化を通して私の還る土、未来の生命をうむ土、
を考えてゆきたい。



金野 昔から祭りの直会(なおらい)は 「食」に始まった。

一つの釜の飯を食べることによって
人と人との和、コミュニケーションが生まれる。

永野 私は前から、おもろいこととおいしいことには、 ものすごおカンが働きます。

私のキーワードは『楽しくなくっちゃ！』です。

幡 自分は何に心を動かすか、かっこつけずに考えてみたら、 おいしいものならどこにでも行くことに気がつきました。 自分の心が動かないのに、 人の心を動かすことができるでしょうか？

私はおいしいものに心を動かします。

馬場 僕には育ち盛り、食い盛りの子供が3人います。 彼らの食生活と僕が彼らのときの食生活は 大きく異なっています。

確かに豊かになっていますが、
本当に昔より豊かと聞かれれば疑問が残ります。

前田 一面に広がる田んぼを見てふと思いました。 あれれ、このお米誰が食べてるんだ？ そして現在、どういうめぐり合わせか、 彦根市の農業法人で米作りに携わっています。 だから、

ぼくは人(屋根)の下に「良」と書く「食」をテーマに選び、
一年滋賀の食を追及していきたいです。

なぜ味噌汁なのか？なぜ志賀町なのか？へ



なぜ味噌汁なのか？ (テーマ)

うまい酒にはうまい肴がある。その周りには満面の笑みを浮かべたひとがいる。その空間がとめどない会話を生み出す。

コミュニケーションの基本は「呑む、食う、しゃべる」である。

わたしたちはこの基本に立ち返った。まちとはそもそもひとの集合体である。ひとの集うところ、食を中心とした新しい仲間づくりができるのではないだろうか。

「食」と一言にいても様々なバリエーションがある。普段の食卓を想像すると真っ白なごはん、季節の産物を使った汁物・煮物・揚げ物・焼き物・和え物などがある。漬物や酒も人によっては欠かせないものだろう。

普段の食卓とは劇場である。登場するさまざまな食材を生かし、組み合わせ、劇を作り、楽しむ。この劇は地域や年齢などの壁を超えて楽しめるという特徴があり、より多くの人の話題となる。

毎日のように劇に登場するキャストに「味噌汁」がある。豪華キャストとしてしばしば話題にあがる県下名産「ふな寿司」とは対極をなす地味な存在とはいえ、「味噌汁」は伝統食のひとつであり、また共に発酵食である。

今日まで現役でしかも毎日のように活躍している「味噌汁」は比較的作るのが簡単で、季節の具を取り合わせることができて栄養面にもすぐれている。



わたしたちはこの「味噌汁」に焦点を当てた。

なぜ志賀町なのか？ (フィールド)



わたしたちはだれもが話題にできる「普段着の味噌汁」をコミュニケーションのツールとして

地域の歴史文化をひもとき、老若男女問わず会話を生み出す活気ある「まちづくり」につなげていこうと考えた。

西を比良山、東を琵琶湖に挟まれた志賀町には、山からのおいしい水、漁業・農業の産物が豊富にある。

また京都・大阪の通勤圏であることから新しい住宅地が建てられ、古くからの住民と新住民と一緒に住んでいることが、特徴としてあげられる。近年、県内各所で見られる状況と同じく両者の交流は少ない。味噌汁の具には野・山・湖からの恵みが用いられる。その点から志賀町は申し分ない立地である。さらには水田の生産調整による大豆栽培に対応して、町内には味噌の醸造所も設けられている。もちろん住民の中には代々伝えられてきた方法で味噌を作っている方もいる。

このような志賀町の風土を味噌汁一杯の

なかに反映させることができるのではないだろうかと考え、志賀町を研究の対象地域に定めた。

↑ 志賀町地図 (色分けの上から小松・木戸・和邇(わに)・小野の4学区)

メディアで紹介された「おいしい」活動

●毎日新聞

2001年12月18日掲載



●京都新聞

2001年12月21日掲載



「みそ汁アンケート」では、生徒たちは「めん
 を突流、授受ではその結なの飲んだ」となご「フ
 果を報告した。メンバーも「おいしい」とい
 うのは「志賀町には中国かなどと感想を述べてい
 らぬ技術がもたらされた。グループの永野麻也
 た。みそもその時に持ち子代表者は「みそ汁は
 込まれたのかもしれない」と語った。
 地域ごとに味が違い、み
 そ汁の話題は交流のきっかけになる」と話してい
 た。

●エフエム滋賀

「Lake Side Morning 77」
 「平和堂 MY DAILY LIFE」
 2002年 1月29日(火)後半9:20～
 【週テーマ:おいしい味噌は手前味噌!】
 <味噌汁でまちづくり・おうみ未来塾「おいしい」グループ>
 【生ゲスト:永野麻也子・奥村恵津子】



「くいいじ」の歩み その1

堀越先生のお話

2000年5月14日(月) 滋賀大学教育学部講義室



- (1) 堀越先生と食文化研究の関わり
- (2) 滋賀の食事文化研究会の歴史
- (3) 今後の目標は若い人に伝統食を伝える事
- (4) 滋賀の伝統食の特色

滋賀の食の歴史
 琵琶湖の環境と水質
 湖北の湖魚消費
 地域別の淡水魚の食べ方
 ハスの話
 春から夏に魚をよく食べる
 ニゴロブナは 昭和60年から激減
 尾上漁港にて琵琶湖の異変を聞く

沖島の漁師の船の話、瀬田しじみの話
 マキノ、湖西、今津には佃煮やさんが多い
 食べ方のいろいろ・ナレ寿司の薬効・淡水魚から海産魚の話・魚なら何でもナレ寿司にしていた・漬物文化、豆文化、米粉文化

先生のお話の中で、滋賀の食に関する研究をして地域作りする 私達のグループのキーワード「発酵」が生まれた。

嘉田先生のお話

2001年5月19日(月) 淡海ネットワークセンター

フィールドを持って研究するときの心得

- (1) 楽しみながら活動する。
- (2) 話を聞いた方へはお礼に報告書をかえす。またその報告書には協力してくださった方の個人名を入れる。
- (3) キーワードは「自分化」



嘉田先生の関わっている2つの違うタイプのグループの話
 10年ぐらいのタイムスパンで考えている人
 驚く好奇心
 地域と一緒に活動できることはじっくり出来る
 教え合うというのではなくいろいろ教えられる
 あえて不便を残す
 ふだんの気取らない生活こそ大切

ポジティブパワーいっぱいのお話を伺って、キーワード「自分化」とともに私たちは元気をいただいた。

アンケート総括 「くいいじ」の歩み その2

① 目的

「味噌汁でまちづくり」に取り組むためには、地元の方の味噌汁との関わりを知ることが重要である。また、世代間を越えた交流を視野に入れているので、世代による味噌汁に対する認識の相違も明らかにする必要がある。さらに、アンケート調査というアクションを起こすことで、我々と志賀町住民とのつながりも期待される。

② 調査方法

アンケート用紙は次ページに掲載した。

志賀町立志賀中学校全校生徒(800人)と志賀町老人クラブ連合会会員(2000人、65歳以上、以下「老人」と表現)を対象に、2001年7月上旬～8月にアンケート用紙を配布。志賀中学校は4つの小学校区から構成されている。北部の小松・木戸学区は、昔からここで暮らしている住民が多い。一方、南部の和迹・小野学区は、和迹学区に一部旧集落があるものの、大半が新興住宅の住民で占めている。この特性から味噌汁との関わりや嗜好に差異が生じる事も考えられる。

また、中学生は、自ら味噌汁を調理する機会もあり、食べ物に対する嗜好も確立されていると考えた。従って自分の考えをアンケートに反映できることが予想される。

一方、老人を対象にすることで、志賀町の伝統的な味噌、具材や調理方法の発見が期待される。また、味噌汁にまつわる思い出を記入してもらい、今後直接聞き取り調査をする際に役立つ。

志賀町は多世代同居が多く、中学生と65歳以上を同時期に調査することで、味噌汁を話題にしてもらうことも今回の狙いである。

③ 調査結果

有効回収数:中学生688・老人691 合計1379

中学生と老人に返したアンケートのまとめは、29ページに掲載

- ・中学生も老人もおおむね「味噌汁は好き」
- ・中学生は夕食時、老人は朝食時に食べることが多い。
- ・各項目で旧の集落と新興住宅での明らかな違いは認められなかった。
- ・具としては豆腐とワカメに人気が集まるが、中学生では豚肉など動物系、老人では野菜を好む傾向にある。

・志賀町では、減反施策で地域に味噌小屋を作り、女性グループが手作り味噌を販売している。

・多くの老人がそれらの味噌を利用している事がわかった。

・味噌汁を好む理由として、食べ慣れている、体にいい、ホッとする、等があった。

・一方、嫌いな理由では、食べ飽きた、夏は暑い、味噌の後口が悪い、など。

・特に中学生では、自分で調理していないので「我慢して飲む」ために嫌いであることが推察できる。

・老人の味噌汁に対する思いでは多様であった。味噌汁が生活に深く根付いていることがうかがえる。

・中学生、老人に共通して表れる味噌汁のイメージは、懐かしい、家庭的、安らぐ、等が多い。

④ 考察とまとめ

アンケートを解析するにあたり、滋賀総合研究所の秦憲志氏にアドバイスをいただいた。ここに感謝の意を表させていただく。地域間や年齢差のクロス集計を示唆していただいたが、顕著な差は認められなかった。これは

味噌汁が幅広い年齢層で日常の食事として浸透していることを意味する。しかし、味噌や具の好みは同世代、同年齢であっても様々である。

味噌汁は誰もが経験している「食」であり、かつ、バラエティー豊かな食べ物であるといえる。

我々が目指す「食べ物からまちづくり」にはうってつけである。

しかし、アンケート結果からもわかるように、味噌汁のイメージは「懐古的」である。21世紀のまちづくりには、味噌汁に対して前向きなイメージを持ってもらう必要がある。志賀町は、オリジナルの味噌や、湧水、湖魚、こだわりの農産物を有し、「志賀町ブランド」の味噌汁でまちおこしの可能性も秘めている。

今回のアンケート調査で出会った人々とのつながりを次のステップに活かすために、中学生とのコミュニケーションの方法を検討したい。

「くいいじ」歩み その3へ

私たちは、食を通して地域づくり・仲間づくりができないかを考えています。
 そこで、多くの人に親しまれる伝統食の「味噌汁」をとりあげることにしました。
 お手数ですが、アンケートにご協力をお願いします。
 なお、このアンケートは志賀中学校のみなさんにもお願いしています。
 どうぞ、よろしくお願いします。

次に質問に答えてください。回答は右の回答欄に記入ください。

- 性別はどちらですか。 ①男 ②女
- 年齢は、何歳ですか。
 ①60～64歳 ②65～69歳 ③70歳～74歳 ④75歳～79歳 ⑤80歳以上
- 住んでいる学区はどこですか。 ①小松 ②木戸 ③和邇 ④小野
- 一緒に住んでいる家族は何人ですか。(答えの欄に人数を書いてください。)
- 一緒に住んでいる家族は何世代ですか。
 ①1世代 ②2世代 ③3世代 ④4世代以上
- 朝食は主に何を食べますか。 ①ご飯 ②パン ③その他 ④食べない
- 味噌汁は好きですか、きらいですか
 ①大好き ②好き ③嫌い ④大嫌い ⑤どちらでもない
 選んだ理由:]
- 1週間の内に、何回くらい味噌汁を飲みますか。
 ①1～2回 ②3～4回 ③ほとんど毎日 ④飲まない
- 1日のうち、味噌汁はいつ飲みますか。
 ①朝食 ②昼食 ③夕食 ④飲まない
- 味噌汁の具でよく使うものを、次の内で3つあげてください。
 ①ワカメ ②豆腐 ③油揚げ ④野菜類(大根、かぼちゃ、キャベツなど)
 ⑤肉類(豚肉、鶏肉など) ⑥貝類(アサリ、しじみなど) ⑦魚類
 ⑧その他 具体的に]
- 家の味噌汁は、どんな味噌汁ですか。
 ①インスタントの味噌汁 ②だしと味噌から作る ③わからない

問	答え
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	
10	
11	

- 味噌は、どんな味噌ですか。
 ①店で買ったもの ②手作りの味噌 ③わからない
- だしは、主に何から作りますか。
 ①煮干し ②かつお節 ③コンブ ④粉末だし ⑤ティーバッグのだし ⑥わからない
- 家の味噌汁の器は何ですか。
 ①木 ②プラスチック ③マグカップ ④陶器 ⑤その他()
 ⑥わからない
- あなたが13歳から15歳の時の味噌汁と今の味噌汁でだしや具に違いはありますか
 ①違う ②同じ ③わからない
 [違う場合は具体的にお書きください。]
- 家で味噌を作っていますか。
 ①作っている ②作っていない ③以前は作っていた
 [作っている味噌はどんな味噌ですか]
- 味噌汁という言葉で何を思い浮かべますか。
 []
- 思い出に残っている味噌汁があれば、下の欄に絵や文章をお書きください。簡単な説明を添えていただけると嬉しいです。なお、この場合、絵等を報告書に氏名入りで公開することを予定していますがよろしいですか。いずれかに○をしてください。
 ①公開しても良い ②絵等のみの公開は良い ③公開したくない

問	答え
12	
13	
14	
15	
16	

ご協力ありがとうございました。
 差し支えなければ、お名前、連絡先をお書きください。
 名前 _____
 住所 _____
 電話番号 _____

アンケートの問合せ先
 淡海ネットワークセンター 天川
 077-524-8440
 おうみ未来塾 2 期生 くいじグループ
 代表 永野 077-594-5616

伝統食「味噌汁」アンケートのお願い

平成 18 年 7 月 4 日
 おうみ未来塾 2 期生 くいじグループ

私たちは、食を通して地域づくり・仲間づくりができないかを考えています。
 そこで、多くの人に親しまれる伝統食の「味噌汁」をとりあげることにしました。
 志賀中学校のみなさんにとって、味噌汁をどのように思っているかを教えてください。
 どうぞ、よろしくお願いします。

次に質問に答えてください。回答は右の回答欄に記入ください。

- 性別はどちらですか。 ①男 ②女
- 学年は、何年生ですか。 ①1年 ②2年 ③3年
- 住んでいる学区はどこですか。 ①小松 ②木戸 ③和運 ④小野
- 一緒に住んでいる家族は何人ですか。(答えの欄に人数を書いてください。)
- 一緒に住んでいる家族は、何世代ですか。
 (例：本人と親は 2 世代、本人と親と祖父母は 3 世代)
 ① 2 世代 ② 3 世代 ③ 4 世代以上
- 朝食は主に何を食べますか。 ①ご飯 ②パン ③その他 ④食べない
- 味噌汁は好きですか、きらいですか
 ①大好き ②好き ③嫌い ④大嫌い ⑤どちらでもない
 選んだ理由：
 []
- 1 週間の内に、何回くらい味噌汁を飲みますか。給食は除きます。
 ① 1~2 回 ② 3~4 回 ③ ほとんど毎日 ④ 飲まない
- 1 日のうち、味噌汁はいつ飲みますか。給食は除きます。
 ① 朝食 ② 夕食 ③ 飲まない
- 味噌汁の具で好きなものを、次の内で 3 つあげてください。
 ①ワカメ ②豆腐 ③油揚げ ④野菜類(大根、かぼちゃ、キャベツなど)
 ⑤肉類(豚肉、鶏肉など) ⑥貝類(アサリ、しじみなど) ⑦魚類
 ⑧その他
 []
 具体的に
- 家の味噌汁は、どんな味噌汁ですか。
 ① インスタントの味噌汁 ② だしと味噌から作る ③ わからない
- 味噌は、どんな味噌ですか。
 ① 店で買ったもの ② 手作りの味噌 ③ わからない
- 味噌は、何から作りますか。

問	答え
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	
10	
11	
12	
13	

14. 味噌は、何から作りますか。 ①イモ ②麦 ③米 ④大豆

15. 味噌汁を家で作ったことがありますか。 ①はい ②いいえ
 はいの人は作り方を書いてください。

[]

16. 家の味噌汁と学校の味噌汁のどちらが好きですか。

- ①家 ②学校 ③どちらも好き ④どちらも嫌い
 選んだ理由

[]

17. 家の味噌汁の器は何ですか。

- ① 木 ②プラスチック ③マグカップ ④陶器 ⑤その他 ()
 ⑤ わからない

18. 家の味噌汁は主に誰が作りますか。

- ①父 ②母 ③祖父 ④祖母 ⑤兄弟 ⑥自分 ⑦その他 ()

19. 味噌汁という言葉で何を思い浮かべますか。下の欄に書いてください。

[]

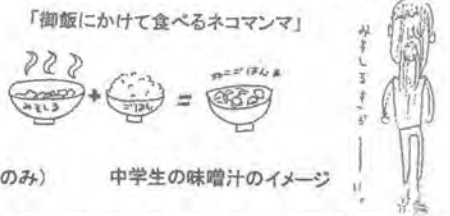
ご協力ありがとうございました。

問	答え
14	
15	
16	
17	
18	

アンケートの問合せ先
 淡海ネットワークセンター 天川
 077-524-8440
 おうみ未来塾 2 期生 くいじグループ
 代表 永野 077-594-5616

●味噌汁の作り方 (中学生のみ)

答えは全部で5通り。(1)だし→味噌→具(2)湯→具→味噌(3)だし、具、味噌(4)味噌を溶いてぐつぐつ煮る(5)湯をいれる。(これはインスタントのこと?)さて、正解はどれでしょう。



●家と学校どちらの味噌汁が好き? (中学生のみ)

「甘い、辛い、薄い、濃い」評価はさまざま。家のほうが好きな理由: 自分の好み合わせてもらえるから。おじいちゃん・おばあちゃんの自家製味噌だから。おねえちゃんの手作りが絶品だから。学校の味噌汁が好きな理由: みんなで食べるからおいしい。学校ではゆっくり味わえるから好き。どちらも好きの理由: どちらもがんばって作ってくれているから。

●今と昔の味噌汁は違う?

(65才以上のみ)変わったという意見: 「味噌」手作りが市販のものに変わった。「だし」じゃこなどで取っていたが今は粉末や科学調味料を使う。「具」自分のうちの野菜が中心で種類は少なかったが、今は肉やワカメが中心で入れる種類も多い。具の量は昔のほうが多いという意見も。「塩分」今のほうが薄目。「量」一度に作る量は昔のほうが多かった。「バリエーション(種類)」ドジョウ汁、しじみ汁、スイトンなど。



家庭ごとに違う味噌汁ですからそれぞれ変わったり変わらなかったりありますね。

「幼い頃のだじょう汁を無理やり食べさせられた思い出」

●味噌汁という言葉で何を思い出しますか?

中学生: イメージ=健康・栄養がある(効用的イメージ)・一家団らん・昔の食卓・ちゃぶだい・金色の鍋・人の手が入っている料理が並ぶ食卓など。日本の伝統食、和の心のイメージ、またコマースシャルのイメージも強いようです。65才以上のお答えと共通するイメージも多いですね。65才以上: 昔のイメージ=おふくろ・昔からある伝統食・囲炉端のある故郷の家・大家族・大鍋・スイトン(大根を入れた団子汁)・川しじみ・軍隊当時の味・すり鉢でゴリゴリする・具はしじみや、黄しめじ、油ぼんなどで、自分で川や山で取ってきた。毎日食べていたし、自分で具をとってきたり、家で味噌を1年分仕込んでいた。

●味噌汁は食事に必要?

中学生: 味噌汁は食事に欠かせないという意識はないようで、朝食より夕食に食べる人が多い。65才以上: 毎回食べる人もいれば、一週間に1回くらいしか食べない人も。朝食に味噌汁を食べる人が多い。

●まとめ

日常のありふれた情景を思い出させてくれる「味噌汁」は、ご飯との相性、いろいろな産物との相性がよく、栄養面でも優れています。その伝統の味は世代に関係なく好まれていることが、アンケートよりわかりました。今後は、志賀町ならではのおいしい味噌汁を探し、みんなでその味噌汁を味わって楽しく交流ができればいいなあと考えています。これからもご協力をよろしくお願いいたします。

味噌汁アンケート結果 報告

●実施: 2001年7月 ●対象: 連合老人クラブと志賀中学校生徒
 ●人数: 老人クラブ1100人、中学生800人 ●回収: 老人クラブ691人、中学生688人 (回収率: 73%)

味噌汁に関するアンケートにご協力いただきまして、ありがとうございました。感謝をこめて、アンケート結果を簡単にまとめたものを、ご報告いたします。

●味噌汁は好きですか?



「好き」と「大好き」で6割
 その理由は?
 毎日よく飲んでいてなじみがある。それぞれの家に独自の味がある。暖かい気持ちが和む。うちは手作り味噌だから口の中に残るぶちぶちしたのが好き。素早く食べられる

「好き」と「大好き」で ほぼ9割。
 具がたくさん入って栄養が豊富。健康によい。疲れがいやされる。身体が暖まる。日本人の体質にあう。

よく食べるので飽きて嫌い。後味が悪い。具が嫌い、夏は暑いからイヤ

●味噌汁の具で好きなものは?



11.9% 中学生は肉が好き
 65才以上で豆腐とワカメが勝って
 具と野菜が負けたのは予想外。

●だしは、主に何から作るか?



中学生: 男子に「分からない」が多い
 65才以上 粉末だし対自然だし
 =半々。意外に粉末が人気。

ゲストティーチャー 「くいいじ」の歩み その3

12月に志賀中学2年生の全クラスを対象に、味噌汁の授業を我々くいいじのメンバーが講師となって行った。

この授業は、夏に行った味噌汁アンケートの結果を子どもたちに直接報告できたら良いなという思いからだった。

最初は、志賀中学が受け入れてもらえるかどうか不安だったが、校長先生、家庭科の行岡先生 栄養士の美濃部先生が快く承諾していただき、実現することになった。

志賀中学の皆さんのご協力に深く感謝したい。



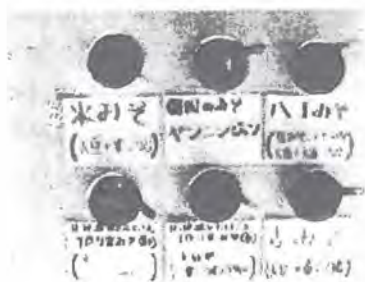
日程

志賀中学で家庭科授業を実施したのは、次のとおり。
12/11(火)2・3限、12(水)1限、13(木)1・3限、17(月)3限、20(木)3限

目的

- 子どもたちに
- ・味噌について驚いてもらう。
 - ・家に帰って、味噌を家族に聞いてもらう。
 - ・食べ物(味噌汁)に目を向けてもらう。

授業内容:時間は45分



それぞれの味を楽しむ。

- ① 説明部分
くいいじグループの説明、なぜ志賀町なのか、なぜ味噌汁なのか、志賀町の歴史、味噌汁アンケートの報告
- ② 利き味噌
米味噌、麦味噌、八丁味噌、志賀町の赤味噌・白味噌、韓国のヤンニンジャンの6種類の味噌を用意し、各自がお碗をもって、出し汁に好みの味噌(ブレンド有り)を溶いて、

より味噌の味に集中してもらうための一つのしかけとして、志賀町内の小中学校の給食に使われている味噌はどれか?という「クイズ」を問いかけた。よく当てたクラスでは10数名、当たらないクラスは1名のみという結果だった。米味噌が「ひっかけ」になったようだ。ちなみに正解は、「比良の赤味噌」。

おうみ未来塾 「くいいじ」グループ 歩み その3

③ 終わり部分

後かたづけ、ふりかえりシート記入、
味噌汁コンテストの案内、6種の利き味噌

授業のまとめ

生徒の振り返りシート結果 242人の生徒が協力。

好きな味噌は、米味噌、八丁味噌、ヤンニンジャン、比良の赤味噌、麦味噌、比良の白味噌の順。

生徒たちは、韓国の辛いヤンニンジャンに興味を持ったらしく、その辛さや焼肉の味がする、韓国が寒いからと色々な意見があった。
また、味噌の種類が多さや、色や味の差についての意見も多かった。

大部分の生徒が、味噌の材料や作り方を知らず、米粒が味噌の中に残っているのを不思議に感じていた。授業の目的である「味噌に驚く」ことは達成できたように感じた。

イベントに参加すると答えた生徒が4割近くあったのには、これからの活動を進めていく上で勇気づけられた。

なお、授業のようすは12/18毎日新聞と12/21京都新聞に掲載にされた。→「メディアでの紹介!」へ

授業を行った感想

志賀中学の生徒は、まじめに授業を受けてくれました。教壇に立つまでは、非常に不安でしたが話をおとなしく聞いてくれ、利き味噌の時は、皆、興味を持ってくれ、楽しくワイワイと過ごせました。

授業の始めと終わりに黙祷の時間があることや冬だというのに半そでのカッターシャツの子がいるなどユニークな学校でした。



「くいいじ」の歩み その4へ



味噌汁ミニコンテスト「おいしい」の歩み その4



志賀町の小学校では、隔週で休みとなる土曜日の午前中を利用して、「ルンルン」という活動を行っている。児童を集めて色々な催しを開き、楽しんでもらおうというものだ。わたしたちは2月23日、今回は小野小学校での「ルンルン」に参加させてもらうことにした。

小学生を相手に、いつも何気なく口にしてしまう味噌汁に少しでも興味を持ってもらい、ひいては「食」そのものに積極的に働きかけることのできるきっかけを与えたい。

そこで今回は「味噌汁コンテスト」という方法を取ることにした。

方法は簡単。用意した3種類の味噌汁を味わってもらい、自分が一番おいしかったと思うものに投票してもらい、というものである。

準備した3種類の味噌汁

1. ピーナッツ入り、復刻すいとんく混合削り節＋合わせ味噌(赤1:白1) >
具: すいとん、ピーナッツ、にんじん、大根、油揚げ、3種類のこんにやく(豆板 醬、青のり、白ごま)
2. 琵琶湖産、鮎の味噌汁 < 混合削り節＋赤味噌 >
具: 素揚げした若鮎、ごぼう
3. 冬の味覚、鴨の味噌汁 < 鴨からのだし＋赤味噌 >
具: 焼き鴨、鴨のつくね(鴨ミンチ＋ねぎ)、焼き太ねぎ

当日朝早くからの準備をすませ、作った味噌汁をこぼさぬようそろりそろりと会場に運んだ。80人ほどの児童が体育館に集まっていたのだが、「味噌汁コンテストしまーす。集れー！」の声と同時に、皆が持参したお椀と箸を抱えて駆け寄ってくれた。楽しみにしていたらしく、嬉しい。

友だちと体育館のあちこちに車座になって味わっていた。暖かい、おいしい、との声も聞こえた。不思議なもので、皆食べる時にはお尻にフタをするかのようにちゃんと座っていた。



好きな味噌汁の箱に大豆1粒を投票！

投票状況は前半は圧倒的リードで「鴨の味噌汁」だった。肉が入っているものをおいしいと感じたのかもしれない。終盤、他の2種類が票を重ねたが、結局逃げ切るような形で、「鴨の味噌汁」が一番人気となった。

1位 「鴨の味噌汁」 45票
同率2位 「すいとん」「鮎の味噌汁」 20票

「すいとん」はピーナッツのコリコリ感と今では食べることの少ないすいとんのもちもちした食感が楽しく、「鮎の味噌汁」はごぼうの旨味と鮎のほろ苦味が大人の味。大人気だった「鴨の味噌汁」は鴨肉の菌ごたえと少し油のういた汁と焼いたねぎの風味が食欲をそそった。

結果はそれとして、食べている時の子供の表情や「おいしかった」というときの笑顔はいいものである。また「ルンルン」主催者の大人側からもレシピを知りたいとの声があった。

「食」はやはり笑顔とコミュニケーションを生んだ。

「卒塾発表会」「くいいじ」の歩み その5

●発表の内容

※グループ紹介 画像:くいいじ団旗
 ※当日のレジュメ 終わりに配る



説明担当:永野

(1)「味噌汁試食」

各自お盆に10人以上の味噌汁を持って
 急いで配り、5分くらいで空いたおわん回収
 回収と同時にレシピを配る

※味噌汁1人前約100cc程度

準備は100人前

出す味噌汁は「ピーナッツ入りスイトン」

画像:小野小学校でのルンルンの味噌汁コンテスト
 2~3枚

説明:小野小でコンテストに出した味噌汁のうちの一つで

す



(2)「なぜこの味噌汁ができたのか?経過」

画像:くいいじ活動フローチャート

説明:ざっと簡単に経過説明し、
 ゲストティーチャー・ルンルン・これからを詳しく説明

(3)「ゲストティーチャー」

画像:6枚(前田教壇・女子試食・男子試食
 ・毎日新聞記者・味噌6種類・新聞記事)

説明:なぜ、ゲストティーチャーなのか
 =アンケートの返しのアクションとして

授業内容=志賀町と味噌・アンケート結果
 ・味噌の作り方・利き味噌・新聞での紹介

(4)「ルンルン 味噌汁コンテスト」

画像:(食材の地図・準備しているメンバー)

味噌汁に群がる子どもたち・大豆投票)

説明:ルンルンのこと、食材のこと、老人クラブからの参加、反響の大きさ(「味噌汁のおばちゃんだ」)
 親子での会話(「鴨の味噌汁がもう一度食べたいよー」「分かった」)、
 投票結果(鴨が1位、スイトンと鮎が2位)、など



(5)「くいいじ 今後の活動」

画像:(WEB報告書の表紙・くいいじ活動の広がり図)・
 説明:WEBでの報告書は、

全国への情報発信を可能にする
 くいいじの活動で新たなネットワークの芽が!
 なぜ志賀町だったのか? =メンバーが住民であり、
 入っていきやすい、下手なことではできない、
 そのメンバーの持つネットワークが利用できた、
 などから。他人ごとではない活動をせざるをえない。
 今回、ピーナッツスイトン(味噌汁)や
 鴨の味噌汁のヒントは季楽里さんから頂いた。
 豆腐屋さとちゃん、作業所のコンニャクを売ること
 になった。このように、生産者・子どもたち

・ルンルン・老人クラブ・中学校など、
 いろんな立場の人を

「味噌汁」が結んで、志賀町の産業振興や 特色あるまちづくりのつぼみがいつか花開く!

- (6)「くいじメンバーあいさつ」
全員が並んでグランドフィナーレ
(事務局天川さん、3期の名田さん・山口さんも)
新メンバー募集中、例会はおいしいもん飲み食い、
(少なくとも)年1回の味噌汁イベント開催

- (7)片付け
全員で、即座に洗い物を片付ける。

●運営委員会・塾長の感想

北村裕明委員長



おいしいまるやかな味噌汁をありがとう。近江の味という印象を強く受けた。まちづくりは地域資源の発見と人の輪の広まりであることを味噌汁の中で実践したわけである。味噌や食材という新しい地域資源を再発見し、活用している。味噌汁から見えてくるものは非常に大きい。

藤井絢子委員

食べ物を通してというのは楽しいが、楽しさを越えてまちづくりの非常に広いネットワークをこの1年で作ったなあとと思う。
志賀町発で全県的に広がったらすごく面白いことになるのではないかな。

岸田眞代委員

味噌汁の発表は非常にチームワークがとれていた。
ピーナッツ入りの味噌汁を生まれて初めて食べ、意外といけると感じた。おいしかった。
新聞社などに活動そのものを広げながらできたのはとてもよかった。
プレゼンテーションもはっきりしていてとても楽しかった。

木原勝彬委員

(全体的な感想として)
ヒューマンネットワークといった、温かいネットワークのコミュニケーションの重要性を認識しているのではないかな。そういう意味では本質的なものを突いているな、と思った。

岡崎昌之委員

(全体的な感想として)
滋賀県という地域の現場から何を学ぶか、ということが一番重要。
滋賀県内の様々なグループや地域の現場を丹念に見て、歩いたのが今日の成果だったと思う。

日高敏隆塾長



僕は戦争中に育った。味噌汁は「天井汁」というほど薄いもので、自分の目が汁に映ったものを「シジミだ」と思いながら飲んだ。そういう時代だったので、その後味噌汁は飲んだことがない。今日も一口飲んだだけで後は飲めなくて申し訳ない。ただ、こういうことをよく調べたものだと感心した。



「くいいじ」の明日



地域プロデューサーとして勉強したことを各自地域の活性化に役立てるとともにネットワークを広げること。志賀町を本部として各メンバーの地域を支部とする。

くいいじオリジナルの味噌汁を完成するまで続けること
どんな味、どんなこだわりの具、究極の味噌汁を求めてたゆまぬ努力をすること。

**未来ある子供たちとともに
一緒に味噌汁を食べるイベントを
定期的開催したい。**

各メンバーの思い

馬場

衣食住は生活する基本です。昔のような自給自足の社会は無理でも食に関しては「地産地消」で生産者と消費者の顔が見えたらいいな。



前田

うまいもんを食べれば自然に笑顔が広がります。
「食と農」の力を信じてまずは身近な食べ物に目を向けてもらうような仕掛けを。

永野

志賀町に蒔いた「まちづくり」のタネは少しずつですが育とうとしています。
出会ったいろんな人とのネットワークを基盤に
さらに大きな「志賀町・・・大好き」ネットを
作っていきたい。

幡

これからも おいしいものに出会った
感動を志賀町の人と分け合いたい。
子供たちの発想と経験あるお年寄りとの出会いにきっと新味噌汁の芽が・・・。

奥村

これから・・・頑張ります。

金野

くいいじのオリジナル味噌汁を「千人鍋」を使って子供たちと
イベント開催。その為にも「食」の勉強を続けよう。究極の味噌汁を作るために・・・

味噌 基礎知識

1.味噌の材料の来た道

日本では昔から米・麦・あわ・きび・豆の5種を五穀と呼び、大切にしてきた。狩猟・採取生活を基本としていた縄文時代、大豆が当時の遺跡・鳥浜貝塚(福井県)で見つかっている。また紀元前4000年頃、中国長江の下流で稲作が行われ、その米(ジャポニカ)が朝鮮半島を経て日本に伝来した。これが弥生時代の始まりである。こうして東南アジア→中国→朝鮮半島→日本へと味噌の原料の穀物とその栽培法が伝えられた。

2.味噌の起源

古代中国で考えられた「醬(しょう)」は、もともと動物性タンパク質を細かくつぶして容器に保存し、発酵させて料理のソースかディップとして使われていた。古代日本でも、発酵させた「味噌のようなもの」があったと推測されている。文字として最も古いのは、大宝律令(701年)の「醬院」の制度の記録である。この「醬(ひしお)」とあるのが、味噌の原型ではないかといわれているのだ。大陸から伝来した「醬(しょう)」と日本古来の「味噌のような発酵食品」とが合体して大豆や雑穀を使った発酵食品「味噌」ができたのではないかという説もある。現在のような形の味噌が定着したのは室町時代以降である。日本の食の基本、「米飯・味噌汁・漬物」がはっきりと形づくられたのもこの時代とされている。こうして味噌も醤油・酒と共に、日本の食文化に欠かせないものになっていったのである。

3.味噌の作り方

味噌は大豆、小麦、裸麦などの穀類・麴(こうじ)・塩・水とで作られる。蒸し煮にした穀類に、麴菌(こうじきん)を付けて発酵させ、麴(こうじ)を作る。次に蒸し煮にした穀類をつぶして麴(こうじ)・塩と混ぜ、容器にすき間なく詰めて塩でフタをし、その上から封をする。この材料が発酵によって時間とともに熟成され味噌になってゆく。その土地の風土・水・気温・材料の違いなどで、微妙に味が異なるのも発酵食品のおもしろさであろう。「味噌は生きもの」といわれるゆえんである。

4.味噌の種類と分布

麴(こうじ)による分類

- 米味噌……日本の味噌の8割を占める(白味噌)
- 豆味噌……大豆が主原料(八丁味噌)
- 麦味噌……「田舎味噌」とも呼ばれる(九州味噌)

味や色による分類

- 甘味噌……白・赤
- 甘口味噌……淡色・赤
- 辛口味噌……淡色・赤

※使用する麴や味、色調で大別。
各地方ごとにそれぞれ特徴がある。

参考文献

- 『日本海シンポジウム』森浩一編 小学館
“日本海沿岸諸民族の食文化と日本”
味噌・醤油・酒の来た道
- 『ニッポンみそ汁風土記』日本みそ汁研究所
エー・ジー出版
- 『ふなずしの謎』滋賀の食事文化研究会編
サンライズ出版
- 『食文化探訪』石毛直道著 新人物往来社
- 『みそ文化誌』みそ健康づくり委員会 全国味噌工業協同組合連合会・社団法人中央味噌研究所発行



例会 & 食べ物記録

- 第1回 食グループ例会 2001年4/7(土) 場所:居酒屋 魚民(草津市)
食事:生ビール中ジョッキで乾杯 2000円コース

- 第2回 食グループ例会 2001年5/20(土) 場所:前田下宿

食事:手前味噌、自家製鮎寿司、スナックエンドウ、
 志賀町「さとちゃん」の寄せ豆腐(黒豆&普通)
 豆腐ちくわ、飲物
 自社米ご飯(ヒノヒカリ)、朝摘みイチゴ
 ヨーグルトケーキベリージャム添え、イカせんべい
 1期生吉田作「近江吉田」ブランドこだわり赤かぶ漬
 手作り漬物三種(水菜、ラッキョウ、キュウリ)
 手羽元煮物、浪漫鶏オープン焼きイタリア風、
 ガメ煮(筑前煮)



- 宿泊研修会 2001年5/26~27
場所:いこいの里湖西(高島町)
夕食:アユ寿司、うなぎ、小魚の佃煮など湖の幸

- 第3回例会 2001年6/18(月) 場所:淡海ネットワークセンター
持寄:お手製サンドイッチ、ミッドアップルパイ、
みたらし団子、ミルクプリン、ミルクフィッシュ
コロッケ、かりんとう、おかきとうま茶、ダーズリン紅茶

- 志賀町関係あいさつ回り 2001年7/4(水) 場所:志賀町内
昼食:Holiday Afternoon
カツサンドとベーグルのツナサンドセット カップスープ付 850円
(天然酵母使用の手作りパン)
お茶:ギャラリー&ハンドメイド・喫茶 大きな木
ケーキセット(ケーキ&アイスクリーム&ホットコーヒー)850円

- 例会と食事会 2001年7/15(日) 場所:木波屋雑穀堂(草津市)
食事:日本酒:自家製日本酒(辛口)、若戎 山廃 真秀、郷
乃誉、菊秀、酒呑童子香田
肴:枝豆まったり豆腐(竹入り)、地鶏のささみタタキ、大根の
ぜいたく煮(滋賀)、にろぎのあぶりもの(高知)、長芋のステー
キ(秋田産無漂白長芋とステーキソース) 鶏肝煮、あゆのうる
かと 高知カツオの酒盗、卵焼き(長芋入り)、にしんの燻製、と
ってもおいしいお好み焼き、とろろと雑穀のごはん、豚の味噌
汁



- 「くいいい」アンケート第一回集約報告
2001年8/12(日)
場所:淡海ネットワークセンター

昼食:ピアザの1F「タントタント」お昼のバイキング1700円

- 例会 2001年8/31(水) 場所:守山市民ホール
夕食:コロッケ、おにぎり、守山銘菓(俵とつがやま)、はとサブレ、みたらしだんご、お茶、冷コー

- 例会 2001年9/9(水) 場所:守山市小津公民館
昼食:ゴーヤチャンプルー、鶏からあげ、おいなりさん2色、麦茶、
モダン焼き、松茸おにぎり、揚げナスと石垣の油味噌

- 中間発表会用OHP作成例会 2001年9/11(水) 場所:淡海ネットワークセンター
おやつ:レーズンサンド、元気飴、緑茶

- 中間発表会の打合せ 2001年9/23(日)
場所:淡海ネットワークセンター
おやつ:クッキー、チョコレート、お茶

- 滋賀総研秦さんとアンケート検討例会 2001年10/2(火)
場所:淡海ネットワークセンター
夕食:中華おこわ、ししとう煮びたし、キャベツかぼ酢のもの、
あげびと豚肉の炒め物、黒豆の味噌汁、きゅうりの糠漬け

- 例会 2001年10/7(日) 場所:ネットワークセンター
食事:鯖鮓、クルミ饅頭、アケビ肉詰め、烏飯、キムチ、チャンジャ
いなり、おにぎり、彦根梨、お茶



- アンケートまとめ打合せ 2001年10/18(日)
場所:守山サイゼリア
お茶:コーヒードリンクバー、フォカチオ、カントッチョ、ジェラートミルク

- アンケート報告書作成 2001年11/1(木) おやつ:おたべ(抹茶とプレーン)

- 志賀町うまいもん探訪(まち歩き) 2001年11/11(日)
場所:JR和邇駅～志賀中学～味噌作り小屋～JR近江舞子駅(踏破)

夕食:百合根と山芋のタイノコ包み、竹とうふ(ゆで卵の白身入り、シヨウガじょうゆ)にぎり3種(松茸、鯛、ウニ)、どびん蒸し(松茸、ハモ、エビ、すだち)、鯛お造り(コンニャクの家、キュウリとベニシヨウガのゲタ、キュウリの松、カブで作った花)、鯛あらだきゴボウ(サーピス)、ハモ(空揚げ、湯引き、おろしポン酢しょうゆ)、温いソバ(エビ天と松茸天) ※ 志賀町たからや 梅5000円のコースでボリュームもたっぷり。



- 例会 2001年11/30(金)
場所:淡海ネットワークセンター
夕食:いしる味付けのイカメシ、手作りソーセージ3色、即席ピクルス、
石垣島の麦味噌の味噌汁、熱々出来たてゆで卵いしる味、お茶
販売:民宿のいしる(イカでできている！)

- 例会&新年会 2002年1/12日(土) 場所:(第一部)守山つがやま荘喫茶、
(第二部・新年会)西の村(守山市西村邸) 新年会:おでん、サンドイッチ、大根菊花漬け
日本酒(久保田、御代栄、波乃音しぼりたてさきにごり、金亀一滴、立山)

- 志賀町オリジナル味噌汁試作品 2002年2/10(日) 場所:永野家
味噌汁4種、日本酒(舟来屋、オーガニック日本酒雪の茅舎、金盛、十四代、琵琶乃長寿、
太田七右衛門)、アンキモ、白焼きウナギサラダ

- くいじ卒塾後について例会 2002年2/14(木) 場所:守山市小津公民館
おやつ:コロッケ、おむすび、ハヤの甘露煮、おまんじゅう、チョコレート

- 「ルンルン」ミニ味噌汁コンテスト 2/23(土) 場所:志賀町小野小学校
味噌汁:若鮎素揚げ(赤)、ピーナッツ入りスイトン(赤白合わせ)、吉野鴨と焼きネギ(赤)

- 卒塾発表打ち合せ例会 2002年3/8(金) 場所:淡海ネットワークセンター
おやつ:ケーキ2種(モンブランとイチゴショート)、クロワッサン、タンカン

- 卒塾発表準備 2002年3/16(土) 場所:大津市生涯学習センター調理室
昼食:いなり寿司、鳥からあげ、サラダ、おにぎり、さし入れタルト

ふれあいビレッジ夢番地

地域で遊ぼう 地域で子どもを育めるのか！

高野吉隆 中原由香里 松田由枝 宮本敏彦 山元宏和

目次

◆活動の目的40
◆活動内容	
1 市民団体の取組み41
2 フォーラム・アンケート46
3 行政の取組み51
4 NPO 法人の取組み53
◆これから	
1 グループとして56
2 個人として56

◆活動の目的

◎研究動機

私たちは「子供に関する何かがしたい」というメンバーが集まり、子どもと一緒に何かできないかということで活動を始めた。子どもを取り巻く環境には、地域・家庭・学校の三分野からの関わりがあると考え、自分たちがいつでも参加できるものとして特に地域と子どもの関わりについて研究をしていくことにした。地元に着目を持ち、地元のために何かしたいという気持ちが芽生えるには、子ども時代の地域での体験が非常に大切である。従ってそうした体験を通して、子どもたちが、また私たち自身が楽しみながら琵琶湖の豊かな自然の恩恵を意識できるような、自分たちの地域を見つめ直すきっかけになるような活動をしたと考えた。

◎研究課題

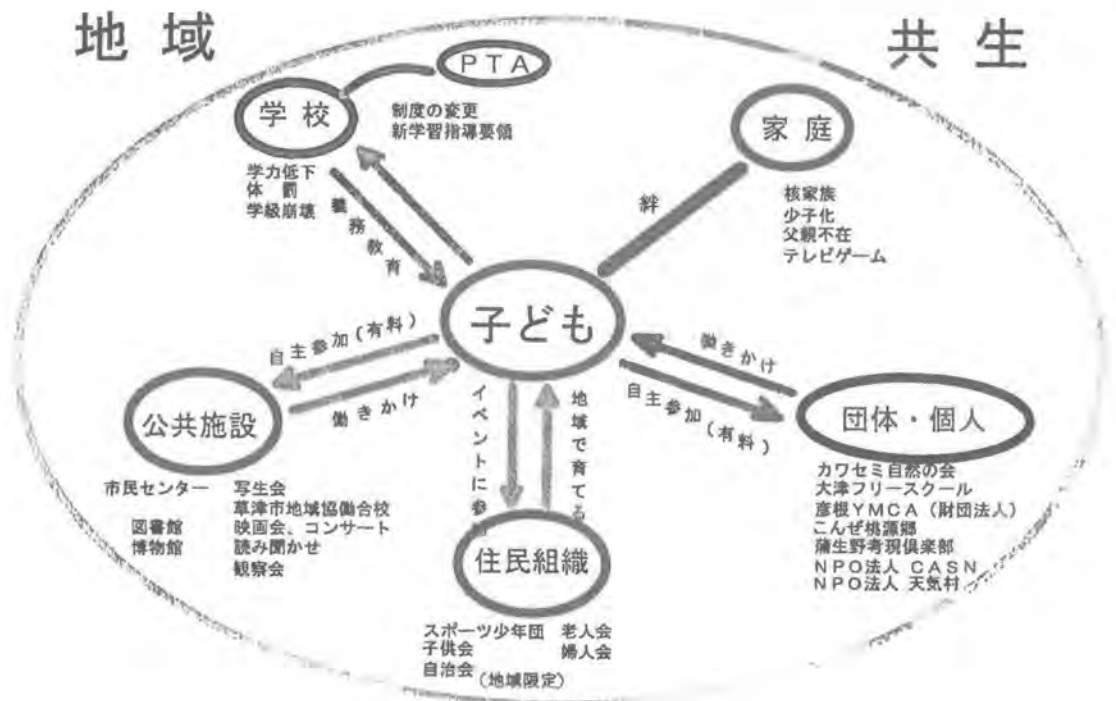
- ・ いまの地域・家庭・学校の関係を知る。
- ・ 現在、地域で活動されているグループの実情を知る。
- ・ 地域で私たちのできる活動を探る。
- ・ 継続的に活動できる方法を探る。

◎研究方法

- ・ 活動中のグループにアプローチ..... ヒヤリング、アンケート、資料収集
- ・ フォーラム..... 複数のグループの代表者による対談（活動の現状、問題点、今後について）
- ・ 提案..... 地域の活動の方向性について
私たちが出来る活動の模索

【子どもを取り巻く環境について】

子ども達の事を考えていく上で、また私達の活動を始めるために、まず今の子ども達がどのような状況にあるのかを確認しあうために、以下のような相関図を作ることから始めた。子どもを取り巻く環境(家庭・学校・地域)について考え、子ども達との関わり方や問題点についてまとめた。



◆活動内容

1 市民団体の取り組み

私達に関わるとすれば、「地域の団体・個人」としてということになるので、まずそのような活動をされている人達のお話を聞くことから始める事にした。

【カワセミ自然の会】

2001.5.20

(1)概要：

- ・ 小学校教諭の橋詰幸樹さんと奥さんの純子さんが、10年前に「自然観察会」として始める。
- ・ 最初は、学校の生徒達と身近な自然に親しむための集まりだったが、口コミで参加者が次第に増えた。
- ・ 2ヶ月に1回の観察会を開催。
- ・ 幼稚園児から高齢者まで幅広い参加者。



(2)活動内容：

- ・ スタッフは30名余り。(博物館の学芸員等の専門家、学校の先生、森林アドバイザーや学生、主婦など個性豊かな人達)
- ・ 大津市北部の堅田や仰木の里山や川を拠点に活動。
- ・ 真野川(大津市)の河川改修工事が始まるため、川の自然が破壊される前にその自然な姿を地域の子供達と共に見届けておこうと、真野川の河口から源流までさかのぼる観察会を半年間かけて6回実施し(94年)、冊子にまとめ県内の小中学校に配布。

(3)感想：

- ・ 浜口式自然観察ビンゴゲーム(クイズに正解なら○をつけビンゴになるようにする)を通して、子どもも楽しみながら自然の不思議さや面白さに目を向けさせるような工夫がされていた。
- ・ 自然と触れ合う時間が持てる事、スタッフの専門的なアドバイスで、普段は見過ごしている自然のすごさやすばらしさに気づかされる事が、観察会へ参加する魅力かもしれない。
- ・ 有り余る好奇心でスタッフ自身が、夢中で観察する姿が印象的だった。スタッフも楽しみながら続けていく事が、観察会が続いた秘訣ではと思った。

【大津フリースクール】

2001.6.24

(1)概要：

- ・ 中学校の美術教師だった永谷彰朗さんが、大津市内の民家を借りて98年に小中学生の不登校生を対象に設立

- ・ボランティアのスタッフ(学生、主婦、僧侶他)で運営
- ・生徒数は現在数名、多い時で10数名
- ・スクールへの参加は、出席扱い(学校・教育委員会と連携、卒業認定会議にかける)
- ・会費制
- ・“関西冒険塾”(一般の人を対象)を併設
- ・スクールに来るキッカケは、
 - ①公共施設に置かれたチラシを見て、
 - ②学校からの紹介、
 - ③カウンセラーの紹介

(2)活動内容：

- ・水曜日は料理の日。野菜を手作りして、食事に使う。
 - 「完結させる」=身体にしみつく、大切に作る。
- ・探検する
- ・不登校の子どもたちは、特にカヌー・ボート(水の上に静かに浮いているもの)を好む
 - 情緒に良い
 - また、水の上から見る風景がいつもと違う(非日常であることを好む)
- ・フリーマーケット：①知らない人との出会いがある(人との触れ合い)、②お金の価値を実感(手づくり品の販売を通して)
- ・カロム大会：指先での遊び(安静体育)…病弱な子、体育が不得意な子が多いので
 - 夢中になるが、ファミコンをする時の表情とは全く違う。
- ・公開講座(カヌー体験)のスタッフ活動：スクール生が、教える側になる。

(3)永谷さんの事：

- ・88年から自転車で7年かけて世界一周をし、世界各地の文化や子どもたちに触れる。帰国後、東京の塾に通う子供たちを夜遅く電車の中で見て、へんだと思った。さらに、自転車による日本一周を2回、各地で講演しながら実行した。
- ・子供たちが自然に触れ合う事で元気になるような冒険学校を作ろうと思ったが、他にもある。学校の価値も知っているので、“フリースクール”という形で始める。
- ・2000年秋より、地元町議を務める。

(4)感想：

- ・7年かけて“自転車”で世界一周をしたことはすごい行動力だと思う。想像を超えた日々だったのでは！スライドで見た世界各地の子ども達の様子がとても印象的だった。
- ・フリースクールのいろいろな体験を通して、子ども達が自分らしさを取り戻し自信を持てるようになると、元の学校に戻っていくそうだが、こういう居場所が子ども達には必要なかもしれない。

【図書館ボランティア・やぎゆげよ】

2001.7.20

(1)概要:

- ・メンバー2名:ピアノ講師の弓削さん、元教師の八木さん
- ・99年に図書館が開設され、ボランティア活動として始める
- ・毎月第3土曜日午後開催。参加者は1、2～5組。(町人口約7,000人)
- ・幼児・赤ちゃんがお母さんと一緒に参加。小学生は少ない。
- ・内容:絵本の読み書かせ、パネルシアター、工作、ピアノ演奏
(子どもの興味を引くような進捗に工夫する、子どもの目線で)
- ・長浜おやこ劇場に15年程かかわっていた。(おやこ劇場も全国的に転換期にある)

(2)話しの内容:

*子どもの虐待について:

- ・結婚・出産を経験しても自分の考えを変えない人がある。→親に成れていない。
「子どものために」ということができない親が確実に増えている。
- ・親の、社会的な結びつきの無さ・社会性の無さがあるのでは。

*子どもを取り巻く環境について:

- ・大人たちが関わりを持たなくなった。
- ・最近、親が忙しい→子どもに関わる時間が減った。
(親が働きに行く事を、自分たちをほって出て行く、子供たちは見ている?)
- ・何気ない日常の中で、どれだけ気持ちを共有できているか。
- ・地域・家庭に子どもの居場所があるようにしたい。
- ・いろんな形で、関心を持って接するようにすればいいのでは。



【りゅうとプラザの文化ホール活動】

2001.7.20

- ・文化ホールは、99年に開設。
- ・文化ホール活動は、芸術振興というより地域振興をめざす。
- ・「りゅうとプラザサポーター制度」により、市民と町職員がホールの運営に関わる。
プロジェクトチーム(企画・広報) 市民6名+職員
スタッフチーム(当日の手伝い) 市民約10名
サポーターはボランティア・企画はホールの予算を使用
- ・「友の会制度(広報配布、チケット先行発売)」7、800人余り(町外の人多い)
- ・人の輪の広がりをめざす。
- *企画は、地域の人に参加できるものを目指す。
- ・地域発掘シリーズ(地域のプロに頼む)/ピアノ教室をタイアップした企画(年6回開催)
- ・びわこロックフェスティバル(野外)/裏方体験講座の開催
- ・富田人形浄瑠璃の鑑賞会を開催(年1回小学5、6年生を対象)

(1) 音のワークショップとは

- ・子どもたちとむかし子どもであったおとなたちが、音を切り口にした森との交流を、多彩なゲストとプログラムで楽しめます。
- ・日常のよろいを脱いで、森のいぶきを五感で感じ、ゲストやスタッフのそそのかして表現することをみんなで共有する。

○やりとげたいこと

- パラダイムシフト 《 問い直す 》
- ネットワーキング 《 つながる 》
- リ・クリエーション 《 元気になる 》

○大切にしたいこと

- 多様性 《 いろいろな人とのあつまり 》
- 体験 《 とにかく、いろいろやってみて・・・ 》
- 気づき 《 主体的に学びとる 》
- わかちあい 《 皆で考え、感じ、語り合う 》



(2) 内 容

- ◆ オープニングコンサート
- ◆ 音造形をつかった音遊び
- ◆ 5つの選択ワークショップ
 - 土笛で森を吹く (土笛をとおして伝えることの面白さを知る)
 - 手作り炭で森の記憶を描く (出来映えを気にせず、感じたまま描く)
 - ボイスパフォーマンス (自分の声で自由に表現する)
 - 木・音・木霊とあそぶ (1本の木切れがどんな音をかもしだすのか)
 - 音で伝える (声を使わなくてもこんなに表現できる)
- ◆ ナイトハイク
- ◆ ジョイントコンサート
- ◆ その他

宿泊参加および1日参加を合わせて約40名の人達が、朝日の森 朽木・自然研修所に集まった。雑木の木立の中に建てられた当施設は、周りの景色に溶け込んだように自然で、中に入ってビックリ。ゆったりとした室内に、音造形作家 滝英夫さんの作品(原木から造られた人や動物などをイメージした非常にユニークな手造り楽器。持ち運べるものから見上げるような大きさのものまで、様々な大きさ。)がわれわれを迎えてくれた。滝さんの作品が発する音色には独特のものがあって、参加者が勝手気ままに扱う音を聞いていると、何か異次元にタイムスリップしたような、日常ではあじわえない不思議な気分になった。このワークショップの最後に、滝さんの作品などを使ってミニコンサートの予定があったが、時間の都合で聞かれずチョット残念だった。

そのほか、選択ワークショップでは『ボイスパフォーマンス』『木・音・木霊とあそぶ』に分かれて参加した。全体を通しての参加ができなかったが、感想として誰かに指示や強要されることもない、個々の体で感じて体で表現することを大切にされた、スタッフの方の想いが伝わるワークショップであった。

YMCAとは、世界最大の国際的組織を持つ青少年団体で、世界123ヶ所、日本全国に185ヶ所のネットワークを持ち、精神・知性・身体の調和のとれた全人格的な成長を願い活動している。その中で、滋賀YMCAは1950年創立、国際協力・地域奉仕活動を始め、社会教育など幅広い活動を展開し、社会教育法第10条により、民間社会教育団体として県教育委員会の傘下にある。

活 動

- ・ 滋賀YMCA教育（共育・響育）プログラム
地域のみなさんに必要に応じて指導者を派遣している。
- ・ YYS「やまぼうし」（青少年支援センター）
学校に行けない・行かない、誰かとお話したい、ちょっと動いてみたい、勉強したい、仲間がほしいなど、そんな人たちを対象に活動している。
- ・ 「フリースペース」（未就園児託児）子育て支援プログラム
幼稚園に入る前の子どもたちの戸惑いやお母さんの不安を少しでも取り去る為の様々な遊びを通して、感動行動・創造性を豊かにする。
- ・ 野外活動クラブ（ほくらは自然の仲間）
毎月1回、自然の中で仲間と遊び、ふれあう体験で「生きる力」を育てる
例 キャンプ ハイキング 野外料理 自然観察 ナイトハイク 等
その他に、サッカークラブ・音楽倶楽部・気功太極拳・こどもアートスクールなどがある。
- ・ 春休みプログラム
春の日帰りデイキャンプ・尾鷲／海の体験キャンプ・色々なキャンプ

会員・プログラム参加の募集

- ・ YMCAのOB達にダイレクトメールを送る。

野外活動等のボランティア募集

- ・ 県内外の大学への呼びかけやちらしの配布。
 - ・ YMCAのOB達に呼びかける。
- 両方共、リーダーとして参加してくる人は多い。

指導者の想い

NGO・NPOの団体であり、企業では有りません。民間の社会事業団体として、子どもたちが色々な体験を通して、健全に育っていくサポートをしていく事を信条としているとの事。現代の子どもは変わったとの意見が多いが、子ども達は何も変わっていない。本質的な子どもらしさ・すなおさを伸ばしていき、色々な環境に反応出来る様な人づくりをしていきたい。

今回2度指導者の方にお話を伺ったが、残念ながら子どもたちと一緒に野外活動に参加出来なかった。今後は是非一度参加したい。2年前に山で彦根YMCAの子どもたちと出会った時の、子ども達の生き生きとした明るい笑顔を思い出される。

最後に1点、親達にとってはかなりの費用負担にならないかと思うと、YMCAの活動を本来、地域とか町の人々で出来ないかと思った。

2 フォーラム・アンケート

【屋台村への参加】

子どもたちを地域に

『ようこそとんぼとみぞっこのフォーラムへ』

◎日時 平成13年9月30日(日)

AM10:00~

◎場所 ピアザ淡海305会議室

◎フォーラムの趣旨

H14からの週5日制によって、子どもたちの余暇利用についてどう考えていくかが今後の大きな問題です。この余暇をうまく活用できるよう、地域と共に将来を担う子どもたちの教育を考えていかなければなりません。

こうしたなかで、現在県内で活躍している市民グループの考え方を聞きながら、私たち一人ひとりが何が出来るか考えてみました。

◎パネラー

☆こんぜ桃源郷

栗東市で里山を生かした自然体験学校の創造をめざして発足された。荒れた雑木林や減反の田んぼを子どもたちの自然体験の場に改良、様々な自然との付き合いを楽しみながら里山保全を行っている。

☆蒲生野考現倶楽部

小学生や住民達でみぞやため池を調査・分析する環境学習事業を展開。H12に環境省水環境賞を受賞。H13の8月「たんけん、はっけん、ほっとけんー子どもと歩いた琵琶湖、水の里のくらしと文化」を出版されている。

☆草津市生涯学習課

H14から小中学校が週5日制になることから、これからの時代を担う子どもを育てるため、地域・家庭・学校の連携を図るべく様々な活動を展開している。

◎質疑

Q：蒲生野考現倶楽部では地域の人や子ども達がどの程度参加されているのか？

A：全体で43人で、実働部隊は20人程度

- ・会員募集の際、役場の担当と連携する。
- ・子どもの参加で親もついてくる。
- ・まとめる作業や活動発表の練習など身につけられる。

概要 調査研究部 環境プロデュース部門。目の前の調査研究をする。

文化交流部 環境文化セミナーは、語り手が地域の人で聞き手が専門家。

あたらしや学問所 現在整理中。

マックス探検隊 男女40名の子ども達

Q：資金面での運営はどうしているのか？

A：当初はトヨタ財団からの補助金。現在は町の社会教育事業の一環として補助金をいただいている。県のNPO育成に関する助成金の申請をしている。

会費、参加費はとっていない。

Q：学社融合に向けて自治会が柔軟に考えても学校側が保守的で抵抗がある。具体的な対策は？

A：教師のなかでも理解のある人はいる。先方の話を聞きながらどんどん対話をし、積極的に動いていくことが大切。

Q：学校の先生や地域の皆さんに期待することは？

A：地域の人をゲストティーチャーに来てもらうなど工夫が必要。また学校と地区が合同で運動会をするなど地域の人たちがもっと積極的に学校に関わってほしい。

週5日制になり塾通いなどがますます増え、地域活動が隅っこに追いやられてしまう恐れがある。

A：学校の部活なども先生がボランティア感覚のところもあるように見える。地域の人に指導を求められるような感覚が学校にほしい。

Q：NPOや市民活動など大人や学校からの働きかけで、子供たちは本当に望んでいるのか？いっしょにやりたいと思っているのか？

A：子供たちに切実感や大変さを実感させるおもしろい接点を見つけてあげる。

子供たちとじっくり話し合うと興味を示してくれる。



A：子どもの意見を聞ける大人が増えると子供たちも大人と話しやすくなり、自発的な動きがでてくる。しかし、学校の事務局である教師や行政が仕事としての頭を抜け切れないでいる活動は動員をかけても人は集まらない。

A：子供たちも大人の姿をよく見ているので、日頃から何気ない会話が必要。

Q：学校と地域を繋ぐ時に、とっかかりでこんな苦勞をしたとか、学校が門戸を開放してくれなくて苦勞した等の経験がありましたら聞かせてください

Q：親たちは地縁組織や地域コミュニティは壊れていて何も期待してない一方で、上からの言葉は素直に聞き入れる。

その子供たちは自主的に地域の活動等に参加して、体験して感動したりしている。

この子供たちの貴重な体験を親たちは関知していない。その姿を見ていると先はながいなあといった感じがする。

このギャップをどのようにして埋めたらいいのか？

A：お上から言われると信頼・安心するといった国民性があるのかも。地域協働合校も教育委員会の旗振りのもとに地域、家庭、学校がうまく動き、担任に繋がっている保護者が動き子どもの参加があった。

民間の活動をうまくやっていると周りの信頼を受けるよう努力する必要がある。ネットワークやノウハウを活かしていけばどうか。

A：上から下へトンと降ろすのは楽でもある。NPOもその辺をうまく使っていく必要がある。

まとめ：個々一人一人が意識を持って、周りの人間関係を築き、さらに団体においてもネットワークを広げていく努力が必要であり、行政はちゃんとバックアップしてあげる関係が必要である。

【市民グループアンケート】

子どもを取り巻く環境には、地域・家庭・学校の3つの分野からの関わり方があり、子ども時代に体験や経験を通じて受けた様々な出来事が非常に大切である。そして、子ども達がそれぞれの関わりの中から受けた刺激は、どの関係1つとってみてもその後の成長過程を経て成人して後ずっと、何らかの形で考え方や行動に影響を与えるであろう、と私たちは考えた。

その中で、私たちは今後ますます必要とされるであろう地域の中でのつながりに着目し、今現在県内各地で活動中の団体から、実情・問題点やアドバイスをいただく事で、今後のグループ活動を身のある物にしたいと思った。そこで、8月中旬に県内で子どもとの関わりから活動しているグループにアンケートの回答を依頼し、その結果を下記の様に整理した。

協力依頼した団体（42団体）

じゃりんこ文庫・滋賀県子ども文庫連絡会・おもちゃライブラリーぴよんぴよん
滋賀子育てネットワーク・おもちゃライブラリー「ばれっと」・石部みどりの少年団
栗東町小中学生を持つ親のためのネットワーク会議・石部おもちゃライブラリー赤とんぼ
おもちゃ病院・日本ボーイスカウト滋賀連盟・かぶらの会・人形劇サークル コロボックル
草津おはなし研究会・おもちゃ図書館ミッキー・活動グループ クレア・自然と遊びの会
長浜子どもの本研究会・長浜市水生生物少年少女調査隊 みずすまし・志賀町文庫連絡会
人形劇グループ“ともだち”・甲西おもちゃ図書館 とまと・人形劇サークル おにぎり村
おはなしサークル トトロ・サンデー林業クラブ 愛林会・マキノ地区BBS会・遊林会
びわこパレイ自然塾・びわこネイチャーゲームの会・大津おやこ劇場・長浜おやこ劇場
草津栗東おやこ劇場・NPO子どもネットワークセンター 天気村・CASN・大津里親会
びわこシェル探検隊（おおつ21世紀塾）・大津フリースクール（関西冒険倶楽部）
BIWAKO ANGEL（ポテジャコクラブ）・マキノ自然観察倶楽部・カワセミ自然の会
こんぜ桃源郷・蒲生野考現倶楽部・滋賀県おやこ劇場協議会

以上 順不同

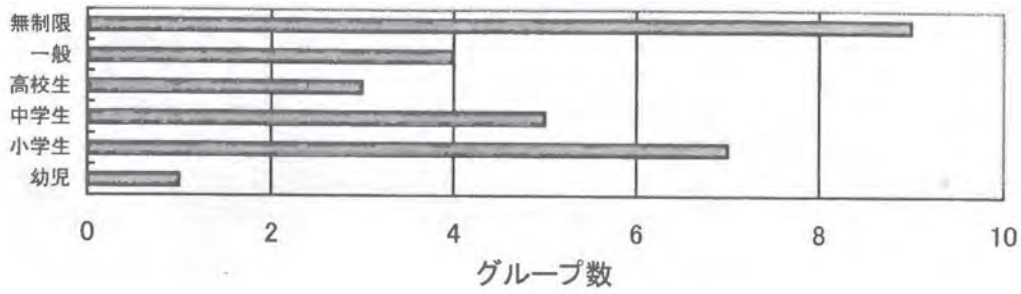
回答のあった団体数

そのうち21団体から回答をいただきました。



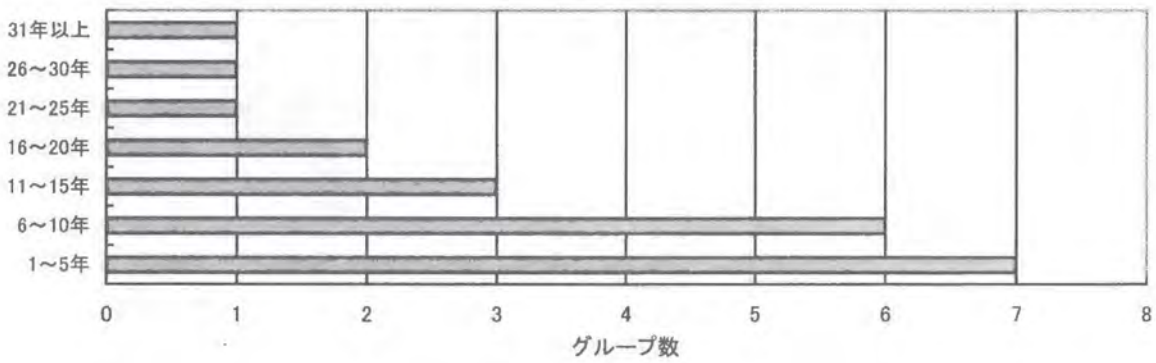
子どもに関する活動をしている市民グループへのアンケート

参加対象年齢

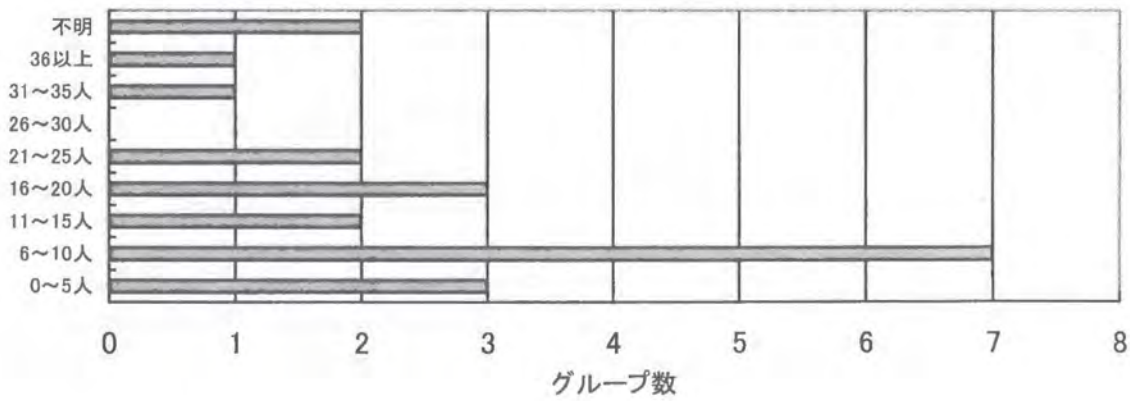


年数

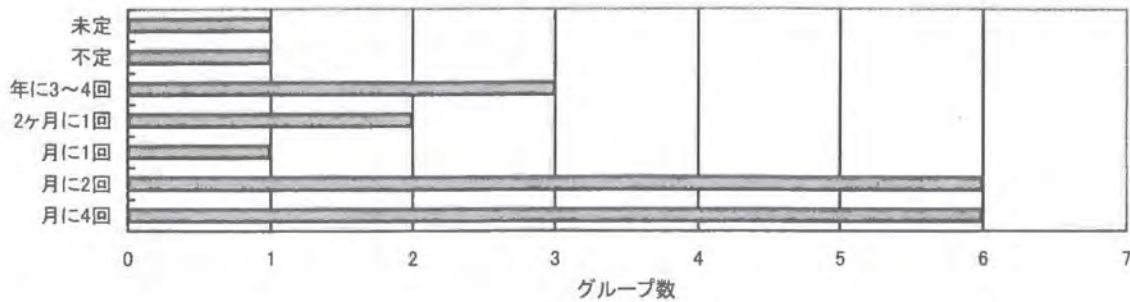
活動を始めた時期



スタッフの人数



活動間隔



アンケート結果

Q：今後の活動でのネットワークづくりの必要性について

20件中16件が必要、と回答

主な回答：市民活動をする上で、ネットワークづくりは欠かせない

情報の共有化
情報交換のため必要 など

ネットワークづくりの必要性



□必要
■不要
○その他

Q：現在の活動を通じて他の団体と連携されていますか？

21件中11件がしている、と回答

主な回答：他団体から協力依頼がある

情報交換 など

他団体との連携について



□している
■したいが現在はまだ
○していない

Q：地域に望むこと、行政に望むこと

主な回答：地域で問題意識を持つ人に参加してほしい

広報、金銭面での支援を望む
自由に使える場所がほしい など

Q：活動の問題点

主な回答：財政基盤がなく不安定

資金不足
広報が行き届かない
スタッフが仕事を持っているので、時間調整が難しい など

Q：活動を始めたきっかけ

主な回答：野外活動を通じて、いろいろな方と知り合い、交流の場を広げたい

残り少なくなった河辺林を保全するため

「どの子にもよい本を、よい読書環境を」を目的とし、文庫相互の協力と経験の
交流を深める など

Q：活動の趣旨・めざすこと

主な回答：緑に親しみ、緑を愛し、これを育て、健全な精神を養い、互いに力を合わせて
社会に役立つ自主的な活動をする

川の中のいきものを調べることによって川の実態を知り、環境を見る目を養い、
環境保全への関心を高める

子どもたちが生き生きとしかものびのびと子ども時代を過ごすことを願う

子どもたちの好奇心や探求心に答え、様々な活動のもと、各年代にあった育成を
行い、心と身体のバランスのとれた人格形成をめざす

3 行政の取り組み

(1) 文部省(文部科学省)の方針

近年、子どもの生活体験・自然体験の不足が懸念されており、平成 11 年 6 月に生涯学習審議会答申「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ」が取りまとめられた。その中で、“長期の自然体験活動など子ども達に豊かで多彩な体験活動の機会を与えること”の重要性が指摘されている。文部省では、同方針も踏まえつつ、平成 14 年度からの完全週 5 日制の実施に向けて、地域で子どもを育てる環境を整備し、親と子どもたちの活動を振興する体制を整備するため「全国子どもプラン(緊急 3 ヶ年戦略)」を策定し、関係省庁とも連携した子どもの多彩な体験活動機会と場の充実などを始めとする施策を、緊急かつ計画的に推進することになった。

「全国子どもプラン」では、地域における子どもの体験活動の情報提供などの体制整備として、①親や子どもたちの様々な活動やボランティアに関する情報提供を地域ごとに行なう「子どもセンター」の全国展開、②通信衛星を利用して、子どもたちの夢と希望をはぐくむ番組を全国に放送する「子ども放送局」の運営等を、また、家庭教育への支援としても種々の取り組みなど、各般にわたる施策を進めています。

(2) 滋賀県及び 草津市では

滋賀県でも、「教育行政の重点施策」に中で、「社会全体で子どもを育てる環境づくり」のために、「全国子どもプラン」とも連動しながら、地域社会や家庭の教育機能の充実を支援するとともに、家族や地域の絆の大切さについて啓発すること、としています。具体的には、「地域子ども体験キャンパス推進事業」の拡大、「子どもセンター」「子ども放送局」等の設置推進を進め、地域で子どもを育てる体制の充実を図っています。

草津市では、「青少年の健全育成」「地域の『こころ』を育む地域学習社会」を目指して、「地域協働高校推進事業」を展開しています。近年の青少年の問題行動多発等からその対策として、学校任せにしていた教育観を見直し、①開かれた学校を目指す、②地域の教育力をつける、③家庭の教育力を復活させることを重視したものです。家庭・学校・地域それぞれがもつ教育機能を生かすシステムづくりのために次のことを基本理念・基本方針として当事業を推進している。

基本理念：・子どもと大人が協働する

・人や社会のために「自分は何ができるか」を強く意識する。

基本方針：①子どもと大人のかかわりあい ②共に学び合うよろこび

③ボランティアのネットワーク化 ④生きがいのあるまちづくり

(3) 学社連携・学社融合とは

平成 8 年度の「地域における生涯学習機会の充実方策について」の中で述べられている。学社連携とは、「学校教育と社会教育がそれぞれ独自の機能を発揮し、相互に足りない部分を補完しながら連携・協力し、教育効果を相乗的に高めようという理念、方策や事業」。学社融合とは、「学校教育と社会教育がそれぞれの役割分担を前提としながら、そこから一歩進んで学習の場や活動などの両者の要素を部分的に重ねあわせながら、一体となって子どもたちの教育に取り組んでいこうとする考え方」であり、学社連携の最も進んだ携帯と見ることもできる。

学社融合が進むことによって、「学校教育の充実・活性化」「学校のスリム化(コンパクトで中身の濃い学校へ)」、また「社会教育施設・社会教育事業・生涯学習の充実・活性化」を目指しています。

【学社連携・融合を考えるつどい】

2001.11.28

“学社連携・融合を考えるつどい”が『学校が変わる！地域が生きる！－学びの創造－、
「地域と学校」から「地域の学校」へ』をテーマに、ハーティーセンター秦荘において開かれ
ました。

一部は、「地域の学校へ、その一歩をふみ出すには」というテーマで、PTA・小学校・
青年団の各々の立場からの報告が行なわれました。

二部は、「地域で子どもを育てる新たな動き」として、「通学合宿」等の実践事例が報告
されました。

三部は、「学校再生！こうすれば学校が変わる 子どもが輝く－学校と家庭と地域の関係
－」と題して、寺脇研氏(文部科学省大臣官房審議官)の講演がありました。

休憩時間は、情報屋台村として、学校の教育活動と協力・連携している施設や団体など
の紹介のコーナーを設けてあり、情報提供されていました。

〈感想〉

栗東市立葉山東小学校では、「eタイム(総合的な学習)」の中で、公民館で活動されてい
るサークル活動を一緒に体験したことから発展して、「他にも公民館活動と学校教育活動
で同じようなねらいのものを一緒に取り組むことで、お互いに利点があるのではないか」
という考えのもとに「公民館との融合した活動」を進めておられた。公民館長の同意を得
て、地域の人々が授業やクラブ活動・委員会活動の講師として参加されている。子どもた
ちにとっては「行動や心が落ちついている」「地域の人とのコミュニケーションが増えた」
「正しい規範意識が高まる」等の影響があり、また地域に人々にとっても「人のため、地
域のために活動する楽しさ、喜びを味わう」「得意なことを伸ばす」「自分の良さを再発見」
という体験ができたという。また、子どもたちと地域の人々が交流することで、お互いに
顔を覚えて、登下校時や休日に子どもたちを見守ってもらえる、長い目で成長を見守って
もらえるというメリットが出てきたそうです。

4 NPO 法人の取り組み

既存の団体の話を聞いたりアンケートを取っていく中で、今こうした子どもに関わる活動をしている団体に必要なことは幅広いネットワークを創っていくことであるという考えに思い至った。そこで私たちがこれから地域の子どもの関わっていく一つの手段として、今ある団体間の橋渡しが出来るようなネットワークを創っていくという一つの目標が生まれた。しかし、どのようなネットワークをどのように創っていくかという方向性が定まらなかったため、現在ネットワークを広げつつあるNPO 法人を訪ねることにした。

【NPO 子どもネットワークセンター天気村】

2001.12.24

子どもセンターの活動

- ・99年4月「全国子どもプラン（文部省における全国1000ヶ所の「子どもセンター」の開設の方針）に呼応
- ・ほとんどの所は生涯学習課に併設、NPO がしているのは天気村のみ？
- ・公的事業を受けることで、行政の後押しがある（チラシを幼・小・中へ配布してもらえ、他）
- ・情報誌を出すことが委託事業の主

現在 職員2人…山田貴子(代表) 辻充子(事務局)

事務(パート)1人

保育(パート)4人

ボランティア30人(登録)

活動内容

保育園…月～金、AM9:30～PM3:00

定員25名(90年頃から始める)

子どもサポートシステム「あそび隊エココインプロジェクト」「こんべいとうクラブ」
ファミリーサポートシステム「ベビープレイグループ」「こんべいとうハウス」
「子育てネットワーク」「保育ルーム」「マーブルチョコの会」「保育サポーターネットワーク」

ボランティア育成

障害児サマー事業

経緯

1987年 設立(山田さんが中学教師を退職後、1人で始める)

父親から譲り受けた土地に2000万余の借金をして、教養棟、ギャラリーレッスン室、喫茶店、etcを備えた施設として始まる

90年頃 保育園活動を始める

99年4月 NPO 法人格取得

内容

- ・屋外保育(営業活動)をしていた“有償”ボランティアの活動をしていたため、外からの理解を得にくかった。
→NPO を取ることで
 - ・活動が見えやすくなる、活動しやすい
 - ・継続していく→後継者をつくる
 - ・対外的に認められる(行政の委託も得やすくなる)
- ・“ネットワークセンター”の名前は、法人化の時につけた
- ・既存の団体は入って来た子を困らせてしまう所が多い(行事への参加は拒まないが、



自らは他団体への参加は嫌がる)

天気村だけの活動に囲い込むのではなく、色々な団体の活動に関わって欲しい

“子ども”を中心に考えると、色々な体験をさせてやりたい(=ネットワーク)

→子ども自身を取り巻く環境のネットワークを組む

31の団体・NPO・企業が賛助団体として登録

・活動当初、“ネットワーク”づくりのために、あちこちの団体に出かけていったが
疲れる(会議の出席 etc) その後は“融和”をめざす

ネットワーク

エネルギーが要る

知り合うのみ

会議(例会・運営委員会)への参加が大変

融和

自分達の活動の中で

一緒に動いて行く

【感想】

代表の山田さんの決意ひとつからすべてが始まった、ということになる。譲り受けた土地と借金という個人的な負担でスタートしたというのは大変な事だったと思う。現在は、施設も活動も充実し、事業としても成り立っているようだ。

教師時代の体験から、子どもを中心に考えた環境づくりを実現されている事がすばらしいと思った。

【CASN (谷口さん)】

2001.1.21

昨年2月に設立し、5月末にNPO法人としての認証を受けられた、CASN代表の谷口久美子さんにお話を伺った。キッズフェスティバルや子育てサポート育成講座、そして今注目を浴びて全国的な拡がりを見せているチャイルドラインの開設を5月に控えてと、谷口さんや他のメンバーの方々が慌ただしい日々を送っておられる中でのお願いとなった。

(1) 活動の経緯

- ・代表の谷口さんが、25年間おやこ劇場(専従職員としても働く)で活動していた。しかし会員制での運営であったが徐々に会員が減少、それと対外的に認知されるように法人格の取得を目指したが、そのような状況ではなかった。
- ・これからは子どもの時代で、活動の持っていき方次第でうまく展開するだろう。
- ・25年間で培ったネットワークを使って、事前の準備活動としての学習会をサロニック的に続けてきた。
- ・2001年の2月に、「子どもをトータルでとらえられる場」づくりを目指して、NPO法人 CASNを設立する。

(2) 活動内容

- ・理事は各自が所属団体を持ち、そちらの活動も同時に行っている。
- ・情報交換の場、情報提供としての広報誌(季刊誌)の発行。
- ・催しの企画や運営
- ・チャイルドラインの開設(現在準備中)

(3) 運営形態

- ・会員からの会費(30~40名)
- ・委託事業(例 21世紀記念事業)
- ・補助金(行政・企業)

- ・企画の提供（人形劇・音楽・コミュニケーションプログラム等）
《活動自体はボランティア》

(3) 問題点

- ・経済的に自立できない 専従の事務局を確保したい。
- ・活動の拠点を設けたい。

(4) 今後について

- ・場づくり
子どもをトータルで捉えられる場
地域や学校で無くなった感動を共有できる場
地域の人の生き方を長い目で見続けられる場
- ・チャイルドラインの開設

- 「子どもの様々な問題は、大人社会を写し出す鏡である。」とよく言われますが、谷口さんの口をついて出てくるのは、子どもに対する想いと一方では、大人たちに対する多くの注文でありました。その事は当法人の目標でもある、「指導者」から「援助者」へ「先導者」から「伴走者」へ子どもに向き合う大人たちによる組織」を、地域社会で実現していきたい気持ちの現れと感じました。



◆これから

(1) グループとしての今後の考え方

- 定期的に集まり、情報交換・スキルアップを諮るとともに、県内の活動しているグループに対してコミュニティ情報誌を発行する。

☆コミュニティ情報誌の発行

- ・年二回程度、定期的にコミュニティ情報誌を発行する。
- ・県内団体の情報を収集し、コミュニティ情報誌をだす。
- ・淡海ネットワークセンターに情報箱を設置し、情報を得る。
- ・流れ

情報収集 ⇒ 編集会議 ⇒ 発行 ⇒ 情報収集 ⇒ 編集会議 ⇒ 発行
4~8 9 10 11~2 3 4

- ・淡海ネットワークセンターの情報誌『おうみネット』と同時に配布させてもらう。

☆定例会

- ・コミュニティ情報誌を年二回発行するため、編集会議として年二回、発行作業のため年二回の合計で年四回の定例会を開催する。

(2) 個人としての今後の考え方

☆各人が各々の地域で活動を展開する。

- ・宮本：CASNのチャイルドライン

今の子どもたちには、地域・学校・家庭で自分の話をうんうんと何も言わずに聞いてもらえる機会があるだろうか？ 何事についても否定される子どもにとって、他人を傷つけたり・自分を傷つけたりする事でしか自分の存在を確認できない、あるいは引きこもる事で自分の存在を守ろうとする、そのような状況にまで追い詰められている現実があるように思う。その意味で、子どもの存在をそのまま受け入れてあげる事が、子どもたちにとって最も必要な気がする。チャイルドラインは、子どもの声に耳を傾け、大人の価値観を押しつけないし、子どもの意志を最も尊重する電話だからこそ意味があると思う。

そしてもう一つチャイルドラインは、身近な事として考える機会の少ない大人達に対して、多くの子ども達が抱えている貴重な生の声として、プライバシーに配慮しつつ発信していく事が出来る手段であると思う。

- ・高野：「きらり びわ」活動

3年目の今年は、びわ町の宝島の竹生島を町づくりのキーワードとして、近くて遠い竹生島に町民がもっと気軽に行ける様にして、鳥（カワウ）によって緑が失われていく事を啓発しつつ、「竹生島学」のフォーラム・サミットを開催する。3回目となる竹生島クルーズを来年の正月に行う。

? (仮) 姉川ホットライン グループの立ち上げ

子ども達と一緒に姉川で、遊びやキャンプをし、歴史や自然を学び、環境や水を考える。

町村合併をも考え、湖北地方の一体感を川を通じて考えたい。

びわ町 湖北町 虎姫町 長浜市 伊吹町 高月町 木之本町 余呉町 山東町

? 茶房「鬼佛庵」応援団

ハンディキャップがある人もない人も、ともに働ける喫茶に参加する。 伊吹町

・松田：カワセミ自然の会

県下で活動されているグループの“ネットワークづくり”ができればいいな、という思いで進んできたが、現時点では力不足ということになった。これからも試行錯誤を続けながら、何らかの形に出来ればと考えている。

この一年をかけて、地域で活動されているグループを本当にたくさん見る事ができた。心引かれる活動をされている所が多数あり、共に活動できればという思いになったが、やはり“地元”にそんな活動が広がっていったらいいなと考えるようになった。幸い地元で活動されている“カワセミ自然の会”の観察会に毎回参加させてもらい、子ども達と楽しい一日を過ごす機会をもつことができるようになった。

また、カワセミ自然の会がフィールドワークにされている真野川が河川改修されることになり、工事にむけて「真野川川づくり会議」が開かれている。洪水を防ぐためとはいえ、“カワセミ”のいる真野川(観察会で見る事ができたのはラッキーだった)の自然がむやみに破壊される事のないように、子ども達にとって魅力ある川であるように、より良い知恵が出し合えたらと思い、参加することにした。

未来塾で学んだ事をきっかけに、今後も地元で、少しずつでも活動を広げていきたいと思っている。

・山元：PTA、青少年など地縁団体での活動

最近のコミュニティには地域コミュニティ(地縁を主にした団体で町内会、社会福祉協議会などをいう)とテーマコミュニティ(NPO、市民活動団体をいう)のふたつに分類されるが、これからのまちづくりはこのふたつがうまくリンクして動きをだしていくことが重要視される。

こうしたなかで、わたしは私の住む地域の活動を思い切り力強く進めていきたいと考えている。

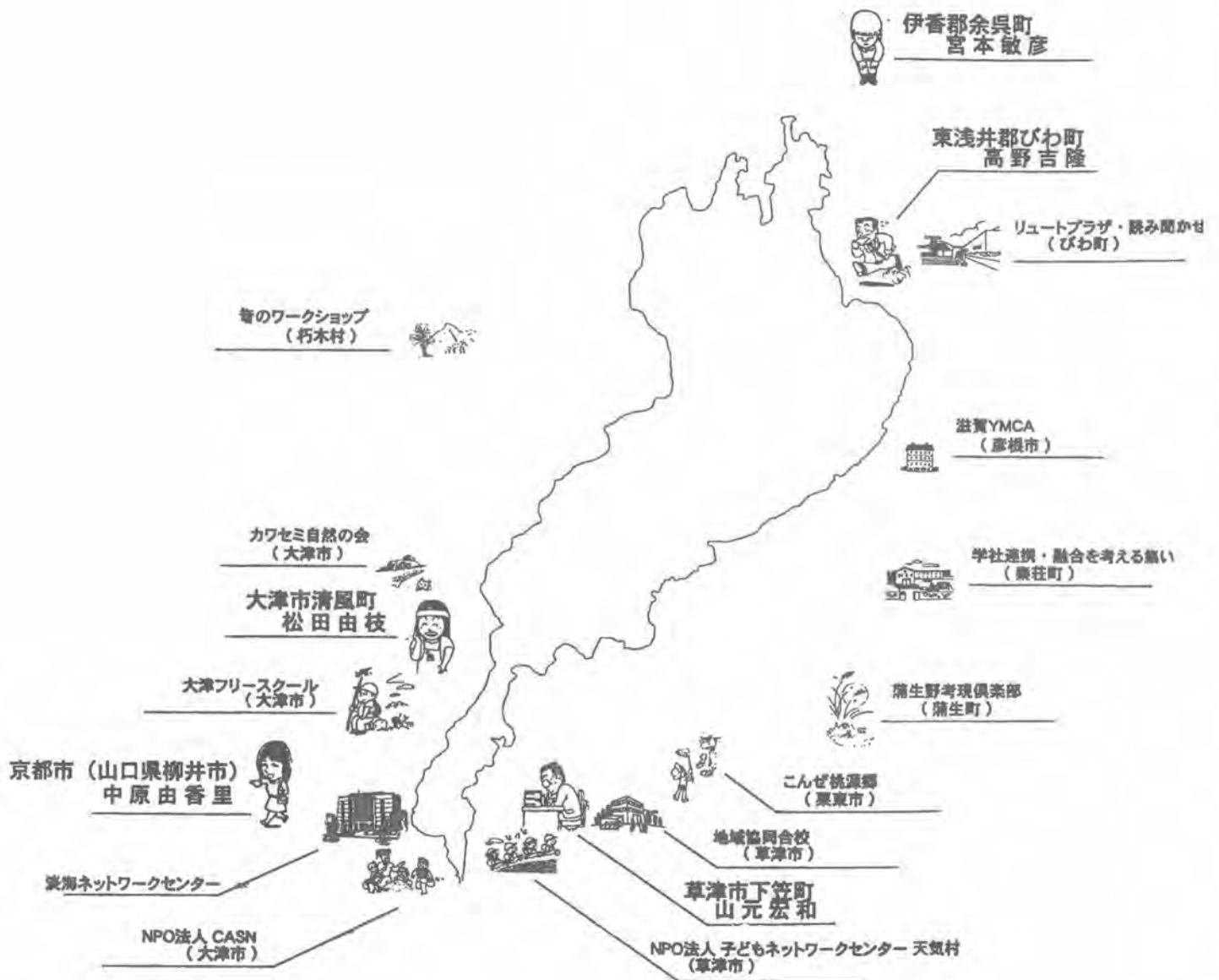
◎青少年活動

H13はPTAの活動を展開できたが、この活動のおかげで青少年学区民会議や社会福祉協議会の当て職をいただいたことから、H14は何らかの活動に入っていきたい。

◎わくわくプラザ

すでに地元公民館で実施されており、夏にはキャンプファイヤーをしたり、秋には自然の中での散策を行い、自立できる青少年の活動である「わくわくプラザ」に子供たちとともに行動できる人として参加要請をいただいている。

夢番地 活動の足跡



K町にみる公共によせるころろ(報告書版)

おうみ未来塾 敬天愛人班

はじめに

地域にお伺いした際の「名刺代わり」の一部(～2.まで)をもって「はじめに」のはじめとします。

K町のみなさん こんにちは！おじゃまします！

私たちは、滋賀県が設立、知事が理事長の淡海ネットワークセンター（財団法人淡海文化振興財団）が行っている人材育成事業「おうみ未来塾」の第2期塾生（平成12年度から平成13年度までの2ヵ年）です。

今年、私たちのグループ研究として、みなさんの暮らし（地域社会）に焦点を当て、学ばせて欲しいと思い、やって参りました。これから度々お邪魔しますので、受け入れて下さる様どうかよろしく願い申し上げます。

1. 敬天愛人とは（宗教や宗教団体とは関係ありません。）

西郷隆盛公がよくお使いになられた言葉らしいです。

「天」とはおてんとさま（自然、神さん、人知を越えたもの）のこと。「敬天」とはおてんとさまに謙虚になり、敬う。

「愛人」とは家族や地域の人々を大切に、楽しく暮らすというように解釈しました。日本人の伝統的な心の持ち様に立ち戻って、人々の日常の暮らしにおける家族や地域との関わり方を見直すことから今の時代を考えていきたいとの思いでグループ名としたものです。



2. メンバーの紹介

名	前	住所、所属等	
稲田	秀明	近江八幡市 草津市職員	前列左
伊藤	正則	大津市 大津市職員	後列左
松井	義光	坂田郡伊吹町 薬草加工販売	後列右
青木	伸子	草津市 琵琶湖博物館勤務	前列中
西田	幸次	甲賀郡土山町 途中から青年海外協力隊員従事	在ドミニカ共和国
上坂	紗絵子	滋賀郡志賀町 同志社大学院生、福祉施設勤務	前列右

* 淡海ネットワークセンター 敬天愛人班担当 川勝六四

3. 研究動機： このテーマに取り組んだ理由

私たちはこれまでの経験から、「市民活動をする人々が地域での活動への意識が薄いのではないか」「市民活動が地元、地域に根付いていないのではないか」という問題意識を持っていました。

テーマを持つ「市民活動」と、地域に根ざした、身近な生活そのものである自治会や婦人、老人、子供会などの「地域活動」が両輪（協働）で機能することがめざす地域社会に必要なことではないかと思われまます。

そこで、私たちは居住地域の自治的組織諸活動など地域の人々の日常的なつながりの様子をみつめ、それを素材に市民活動と結ぶ回路を探り、「地域の問題発見力、政策形成力と実践力を兼ね備えた人」

に迫ってみたいのです。

4. 研究課題： この研究によってなにを明らかにしようとするのか

一人の人間にとって社会はまず家族、次に地域社会。自分の利己心（プライベート）を抑えて家族や社会を考慮し、行動したとき公共性（パブリック）が生まれる。今回のこの研究では「公共」という言葉をこのように幅広くとらえます。

昔ながらの「地元」「地域」「在所」「村」であるK町という地域は「昔ながら」が残っているようです。「昔ながら」は閉鎖的なイメージですが、そういう面だけではないようです。また、自営者等が多いためなのか、あるいは職住が近いためか、「助け合い精神」「顔の見える町」「日頃の交流でコミュニケーションのとれている町」など私たちの日常生活で消えつつある大切なものが見えるように思います。

- ・ これらを幅広く「公共によせるところ」ととらえて、K町において人々の公共によせるところの在り様はどうなのか？いままではどうであったのか？何に苦勞されているのか？これからはどのようにされようとしているのか？探ります。
- ・ そして、テーマをもつ市民活動と地域自治活動をつなぐ「ことば」を見出すよう努力します。また、自分は、市民活動で、あるいは我が居住地域でこれからどう振舞いたいのか？実践につなげる道筋を模索します。

5. 研究方法とまとめかた：

K町への聞き取り調査からキーワードを取り出し、それぞれ個別のサブテーマ（マイテーマ）を設定しました。次にこれに沿って自らの地域等と比較しながら、K町の人々の様子を聞かせてもらい、自らの受け止めに報告書（第一章）にします。また、班の仲間でこれらを総合して課題に迫る座談会（第二章）を行いながら、上記の課題に迫ります（第三章）。最後にそれぞれの今後の思いを述べます（終わりにあたって）。

（目次）

第1章 K町に見る公共によせるところ・・・それぞれのマイテーマから	
I. 地域の自治力	60
II. 後継者	64
III. 自警団	65
IV. 生活改善	66
V. 町内会長さん	68
第2章 自治会にみる公共によせるところ・・・座談会記録	71
第3章 これからの地域社会は自治会と NPO の協働から	77
終わりにあたって	80

第1章 K町にみる公共によせるところ・・・それぞれのマイテーマから

I. マイテーマ 地域の自治力

青木 伸子

1-1. 調査の対象と方法

自治会総務担当のTさん（K町出身、在住に話を聞きました。あらかじめ、以下のような質問をお渡ししておきました。

- ①住民総会について・出席率・話し合われる内容・意見が分かれたときの折り合いのつけ方②町の管

理している場所について・公的機関が所有で町が管理の管理方法と管理者・土地所有者（公的機関）への提案の有無 例：多目的広場、駐車場③自治会費について・「高い」という意見はあるか④漁業と農業について・K町では、漁業と農業の両方の職業の方がおられる。両者のコミュニケーションの有無 例「農業」が湖に流れることについて、両者の話し合い、協力の有無など⑤福祉協力委員の活動について・活動内容⑥住民の要望について・要望の内容・要望の取り上げ方・自治会で実現困難か実現可能かの判断は誰が、どんな基準で行うか

1-2. 聞き取り調査と考察

① 住民総会について

まず、「住民総会」とは、K町地区全戸集まって行なう「住民総会」＝「総会」と呼んでいます。1月3日午前中に、年一回行なわれています。参加率は370軒中70軒程で、20%位です。「住民総会」を運営する「役員」は、7名の頭役と各町2名ずつ選ばれる16名の町役、合計23名で構成されています。役員は選挙制ですが、町の役員選出はその町によって違い、町に任されています。

次に、「住民総会」後、年一回行われるものに「各町総会」があります。K町は8つの町に分かれ、それを町（ちょう）と呼んでいます。町ごとに100%参加で行われるのが「各町総会」で、各町は最少16軒から80軒の家で構成されています。そこでは、町内の人々が町への要望を上げていきます。

※キーワード 町役会 100%参加

② 町管理の場所について

K町内に県の所有地や公有地があります。どのような管理をしていますか、という問いに、「特に管理ゆうても・・・」という返事でした。例えば、K町漁港前に多目的広場があります。ここは、県の所有地ですが、管理者は町、管理作業者は県と自治会、管理にかかる費用負担は県となっています。その広場の草刈などは町が行なっていますが、県からの補助等は受け取っていないそうです。その代わりに、町民が優先的に使えるようにしています。また、河川堤防左岸に桜並木があります。そこは公有地で、町で管理しています。H13年度は、7月1日に下草刈を町会、老人会、子供会、婦人会、エルダー、ボランティアで行ないました。K町「平成13年度事業報告書並びに収支決算報告所」（中間報告）によると、同じ桜並木の枝が道路にはみ出ている為、枝打ちを市へ要望しています。幹線道路にはみだした枝を切るのは危険と判断された結果だと思えますが、自分たちでできることは自分たちで、できないことは市へ相談、要望をするという一つの色分けの方法ではないでしょうか。

※キーワード 行政と自治会の協働

③ 町内会費

16000円（年会費）は妥当か、という質問に、「高いとおっしゃる家がないようにしています」とのことでした。減免措置を設けていて、一人暮らしの家は8000円になります。K町では当たり前のことかもしれませんが、「一人暮らし世帯」を把握しています。Tさんが、「減免措置を受けている家は20軒くらい」と説明された時、「〇〇さんちはおじいさん、なくなつて（亡くなり）今、おばあさんが一人」という風に一人暮らしの背景も言われました。

S40年代初めは固定資産的な集め方だったそうですが、基準が明確でないために10数年前から一律16000円据え置きだそうです。減免措置を設け、「負担が大きいと思われる家にはできるだけ無理がないように、自治会の方から配慮している」そうです。

※キーワード 配慮

④ 漁業と農業について

例えば、農業についてなど、2者の連携、協力などがあれば聞きたかったのですが、特にないようでした。現状として、農業はビニールハウスでの野菜づくりが全国でも有名ですが、漁業はY漁港において、漁獲量、漁獲高共に減少傾向です。（水産まつり2001実施要綱資料参考）

K町の職業的な面から、町民の傾向として、Tさんは「農業では「専業農家」が多いので、落ち着いてる者が多いし、住む、働くが同じということで地元に関心が高くなる」ことを指摘されました。また、地理的なことから「よそから人が入って来なかったの、信頼関係もあり、都会に近くて田舎が残って

いるので人々はおおらかな性格だと思う」とも。この「よそ者」という言葉、しばしば、地縁団体批判に使われています。しかし、Tさんは、「K町では養子さんでも自治会長になれます」と言われていました。つまり、「よそ者」でも気持ちと信頼があれば、町の重要な役職につけるのです。

※キーワード よそ者 信頼関係

⑤福祉協力委員の活動について 話を聞けませんでした。

⑥町民の要望について

⑥-1. 要望の内容

Tさんは、「要望の量はほかと比べてないが、年間、結構あり、K町は「自治レベル」がしっかりしていると感じる」と言われました。その理由として、「(生活上、困ったことが起こると) 直接、市役所へ電話する人もいると思うが、ほとんどは、自治会で住民の総意をまとめて、行政へ言っているから」と。H13年度の事業報告書によると、町民の要望として上がっている事業は33件でした。内容は、道路、排水路、街灯、消火栓の設置など「生活に密着」したものがほとんどでした。その中で「今年度に要望又は必要が生じ実施した事業」が一番多く、13件です。その内訳をみると、自治会で実施した事業8件、町と市で実施2件、市が実施2件、国土交通省実施1件となっています。自治会で実施した事業が大半でした。その中に、8/16~22に実施された自警団による「Y小学校夜警」があります。これは、以前に何者かによって学校の窓ガラスが割られる、という事件が起こったため、町民が安心、安全に住むため、再犯を起こさせないため、事件後、速やかに要望、実施されました。身近な生活の中に自警団があることは大変心強いことです。詳しくは、伊藤さんの「自警団」で言及しています。

⑥-2. 要望の実例

以前、聞き取りをしたK町に生まれ、育ち、嫁いだYさんが、「助け合いバス案」について教えてくれました。K町では、メイン道路を走る路線バスの本数が減少したそうです。早速、協議の結果、バス会社に本数を増やしてもらうため、市へ補助金の要望を出されたそうです。高齢社会を迎え、若い者は外へ働きに出る時代に「引きこもり老人」をできるだけ生まないためにも何とか、市の協力が欲しかったそうです。しかし、この要望は市で取り上げられませんでした。そこで、Yさんは、「手の空いてるもんが病院や買い物など希望の所まで、車を出せないか考えています」とおっしゃっていました。実際に隣の町に「車の送り迎えサークル」があることを知っておられ、「うちの町でもできたら」と考えておられます。自分たちが自分たちの町で「暮らしやすくする工夫と努力」をされている気がします。施設の改善、整備とともに、町民みんなが安全、安心、快適、便利に生活ができるように「生活空間の改善、整備」も含んでいるといえます。このような生活空間の改善、整備は物やお金だけでは解決せず、地域の人々の間に「近所づきあいがうまくいってる関係」で成り立つものと考えます。

※キーワード 生活空間の改善・整備

2. 地域の自治力について

地域というエリアの自治力について考えようとしてきましたが、地域の自治力とは、その地域を構成する、そこに住む「住民の自治力」であることに気がつきました。なぜなら、地域の自治は自然発生的に生まれるものではなく、これまで見てきたように、住民が個々の発見、気づきを出し合って、総意にまとめ上げていく過程と長年に渡ってその過程が培われた土壌の存在が必要だからです。

「住民の自治」については言葉の定義をした多くの研究書があります。そのうちの一冊に『「住民自治」とは、文字どおり「住民が自ら治めること」「住民が地域社会を自主的に運営すること」である。住民や自然から遊離した行政にかわって、住民自らが自然共生社会を作り上げることであり (*1) 続いて、「理想としては、住民自治組織が、大きくなり、力を持つこと、行政は機能を縮小することである」とあります。住民自治組織にも行政にも各々最大限に力を発揮できる得手があり、また不得手もあるはずで、単なる組織や力の拡大、縮小ではなく、得手不得手を明確にして、得意とする分野で地域を治めていけるシステムを作っていけばいいのではないのでしょうか。それには、住民自治組織は自治のプロ集団である行政と有志参加型 (*2) の市民活動との3者の協働が「住民自治」の鍵になると考えます。このような考えを持つきっかけとなった「まちづくり懇話会推進委員会」と「CS神戸」 (*3) の「くるく

るコミュニティ」(*4)について紹介します。

まず「推進委員会」は、事務局のOさん（行政マン）によると、小学校区（Y学区 2500 戸、7~8千人）の15の自治会の自治会長、会長指名の住民1~2名、市議員、事務局で構成されています。もと、この学区にはY自治連合会がありますが、自治会長も連合会長も任期は基本的には1年。推進委員は継続性が必要ということで任期は3年になっています。Y地区の圃場整備というハードだけではなくまちづくりというソフトを考えたい、というのがはじまりです。学区民に情報の発信を心がけ、ホームページで活動を公開中。甲良町へ「グランドワーク」(*5)の視察、現場を歩こう会（町内を实际歩く）などを行っています。「理想としては、これらの活動を各自治会で行えたらと考えています。」とのこと。

次に、「CS神戸」では、循環型の地域づくり「くるくるプロジェクト」に取り組んでいます。理事長の中村さんは「高齢社会の特徴は、それまで職住が離れていたが、60歳からあと20年近く、地域に住まうことになる。人それぞれ、興味、関心が違うが安心、安全に住める町づくりをしたい、2万人位で一つのコミュニティをつくりたい、そのうち1%の200人が真剣に取り組む必要がある」と。「大切なのは、NPO、ボランティア団体と地縁団体（自治会、老人会など）とのネットワークで、行政（役所）がフォーラムの開催などコーディネートをしてくれたら理想形。行政が主体となってNPO、地縁団体のネットワークを進めていく必要がある」と言われました。

また、K町の自治会の方と対話する中で、長年にわたる自治の経験に感心せずにいられませんでした。きっと、他の自治会も経験に基づく自治のノウハウやまた、悩みなどもあるはず。それらを自由に出し合える交流の場として、「自治会ネットワーク」のようなものを作れないかと考えています。

(*1)住民自治シンポジウム実行委員会「住民自治の拡大をめざして」『住民自治で未来をひらく』緑風出版、1995、P16

(*2)山崎丈夫「地縁組織論」自治体研究会、1999、P146

(*3)NPO法人。阪神大震災をきっかけに生まれ、自立と共生にもとづく新しいコミュニティづくりを支援する中間支援団体。

(*4)地域にある多くの財産（人、建物、芸術、自然、アイデアなど）を利用し、安心して安全で楽しい町づくりを目指している。その一つ「くるくるエネルギー」は神戸製鋼の太陽電池パネルでコンポストを稼働させ、地域の生ごみを堆肥化し、土に返そうとするもの。

(*5)住民、行政、企業が連携して身近な地域の改善・整備を行う英国生まれの町づくりの手法。滋賀県甲良町では、水に着目して「せせらぎ遊園のまちづくり」をすすめている。

3. 研究を終えて

K町というある特定の地域にある自治会を題材に「公共心」という普遍的なものを探そうと試みました。まず、「公共心」という言葉の定義を試みたのですが、文化人類学辞典にもなく、ある社会学者によると「社会的には「公共心」という概念は改めて規定されていない、まして、自治会と「公共心」を直接結びつけるのは苦しい」とのことでした。しかし、実際、K町の方に出会って自治会の話を知ると驚きの連続で、新鮮でした。噂で聞いていた自治会への負のイメージだけでは、決してないことを知りました。ここで知ったことを残し、これからのまちづくりに生かすため、一石を投じたかったのです。この研究は敬天班という「未来塾」で結成された市民活動グループとしてのものであったと位置付けています。市民活動は風の人、自治会活動は土の人とすると、風の方は土の人と対話を持って、相手を知ることができました。風の人と土の人が何かできるとするならば、このプロセスなくしてはあり得ないと思います。K町のTさんに失礼ながら、「もし、風の方がこんなことやってみたい、と提案があったら、自治会はどうしますか」と尋ねると、きっと、K町にはそんなもの必要ない、という答えを予想したのですが、「その時々必要であれば、話し合っ、やっていきますよ」と答えられました。社会変革の求められるこれからは、ますます、風の人、土の人、「人と人の交流」が必要になってきます。この研究が風、土の両輪を目指す私にとって貴重な経験になりました。

4. 参考になった本の紹介

この研究で出会った本のいくつかを紹介します。地域や社会で活動をしようとするには、必ず、先人の経験知や専門家の理論に学ぶ必要があると感じました。「わからないという状況を克服するには、関心をもって学習することが大事。形骸化した参加者をつくるなら、(町づくりは)しない方がまし、学習しない人が来るくらいなら、しゃべらせないほうがいい」(*1)と少々辛口ですが、その理由を明確にしています。

① 農文協編「こんなまち、こんなむらなら、行ってみたい」農山漁村文化協会、2001

② 梅沢昌太郎「村組織の事業戦略 新潟県黒川村の戦略マーケティング戦略」白桃書房、2000

③ 吉本哲郎「わたしの地元学」NEC クリエイティブ、1995

④ 岩崎信彦著「町内会の研究」御茶ノ水書房、1989

⑤ ノルウエー環境省編「女性のための草の根まちづくり」かもがわ出版、1999

(*1)渡邊俊一「中心市街地を活性化するための市民参加のまちづくり」『街をよみがえらせた知恵と手法』ぎょうせい、1999、P27

Ⅱ. マイテーマ 後継者

松井義光

1. 「続けること」は古くて新しい課題

「オヤジ苦勞し、子樂をし、孫貧する」と古来より伝え聞きます。また「継続は力なり」とも言われています。事業を順調に発展させること、事業継承の難題は、古来より現代に至っても、なお模索に値する課題だと思います。

多様な個性を尊重しあう現代(なぜか自由と平等が大手を振って、義務と責任が弱々しくあとからついていっている場面によくであろうように感じる私ですが・・・)においては、地域づくりに対する担い手と受け手(本来は住民全体の幸せのために行う地域づくりが目的であるため担い手と受け手という述べ方はおかしいのですが、リーダーが大多数の住民を先導しているのが実情だと思います)の思いも多様であり、組織の継続・継承はより慎重な配慮が要求されると思います。

2. 後継者クラブは地域の宝もの

地域資源のことを、私は地域の宝ものと言っています。安心して誇りを持って暮らせる質の高い地域づくりを目指して、宝もの探しや宝ものづくりが試行錯誤を積み重ねながら展開されています。

今回のK町でも素晴らしい宝ものをたくさん発見しました。その一つが「後継者クラブ」です。K町は近畿最大の都市近郊型野菜産地です。個々の農家では困難なことを共同化することで解消してきたその中核組織が園芸組合です。「後継者クラブ」はこの組合の1つの部会です。「共同組織化で実現した後継者がのびのびと育つ野菜産地」として全国でもトップレベルの評価を得て組合員の方々は自信と誇りを持っておられます。

3. 後継者クラブの若者からの聞き取り調査の要旨

- (1) 気軽に話し合える相手が身の回りにたくさんいる。家庭でも職場(農地)でも、よく似た希望や悩みを抱えていることが多いため、理解しあえ、本音で語り合える。
- (2) 若者は年輩者を尊敬し、指導を素直に受け入れている。農業は能力と経験及び工夫の積み重ねが収益率に反映するため具現者の実績を素直に受け入れている。
- (3) 組合のリーダー達(指導者)は実績に加え海外視察や全国的な情報交換などにより、農業環境を取り巻く社会情勢の変化を分析し、若者を含む組合員に必要な都度指導している。若者も全国的な交流会に自信と誇りを持って、かつ目的意識をもって参加している。
- (4) 後継者クラブが中心となり積極的に取り組んだメロンは魅力ある高収益品目として売上も着実に伸び、1億円を超える主要品目のひとつに成長した。経営意欲を促し、自信と満足感を得ている。
- (5) 農休日の設置(農休日は組合員全体での食事・懇親会や研修等に活用)や健康相談事業などにより労働条件の改善に意欲的である。
- (6) 後継者クラブのメンバーの多くは自警団等の地域の諸活動に積極的に参加している。地域への愛着が感じられる。

4. 聞き取りから感じたこと

この地に生きる私たちが自然に生かされているという自覚を持ち、自分たちの地域は自分たちが責任を持って守り、発展させるという気概を自信を持って語るその姿に感動しました。「おじいさんも親も代々そうしてきました。家族や親戚に恥をかかせられません」との語りから「恥を自覚する文化」を先人から日常生活の中で受け継いできたことが「自由と平等」の時流にあっても「義務と責任」が強烈に感じられるのだと思います。

5. 後継者の学びから気付いたもの

K町における「後継者」の学びから、「地域愛・人間愛」から醸成された「情愛」と「理念」との適正な調和が「組織の継続」のキーワードであることに気付きました。

今後の実践活動には常に「情愛と理念の調和」を考えながら取り組みを進めていきたいと思っています。

Ⅲ. マイテーマ 自警団

伊藤 正則

○ 活 動

地区の青壮年20数名の方々が自警団を結成され、町内で日常的に活動しています。周辺の他地区でも存在するそうですが、この地区では年齢層が格段に若く、また、農・漁業従事者が多いことから昼間でも体制が整っているところが大きな特徴です。

今、一般的には初期防災は地元消防団、常設消防の責務であるとの意識が常となっており、市民は納税者であることをもって、公共の安全は行政の責任としてきていますが、当地では「初期消火は地元の責任」を合言葉に独自の制服を着用し、町内を定期的に見回り、防災防火訓練や器具点検、一般家庭の防災防火意識の啓発等をきめ細かく実施されています。

特に年末や春祭、夏まつり、運動会等、他地区に比べて比較的多い地区行事では主要な役割を担っておられます。

○ この組織があることよっての効果

- ① 公共・住民財産の損失を最小限に留める経済的な初期警備装置
- ② その活動で団員が連帯感を醸成し、規律を通して長幼の序や社会の一員としての誇りと自覚を持ち続けることで農・漁業若年従事者への格好の社会教育の場
- ③ 日常、町内で若者が住民と一体となって活動している姿は、特にお年寄りや子供たちにとって安心して生活できていることから地区の活性化、コミュニティの円滑化に大いに寄与
- ④ その活動は子供たちにとって身近な事象であり、その姿は憧れとなって印象に残り、家庭での話題となっていることから家庭教育の絶好の教材として、健全育成にも大きく寄与等々の側面が見られます。

○ 運 営

この活動は団員にとってはごく自然な日常生活の一部であり、未だ途中退団した例はないそうです。そのためには運営に関し、役員は正副団長、会計、指導員（消防団経験者）と自治会長（顧問）の計5名が集団指導体制を取られています。

先輩は現在の若者気質・世代間の違いを理解する中で厳しい中にも連帯感の醸成に努めておられ、団員OB数十名も積極的な応援体制を取られています。

現代社会において、一般的に地域コミュニティが希薄になってきていますが、こころ豊かな生活・人生を得るために地域の連帯感がこれまで以上に求められており、その意味において自警団に対して地区住民の安心感を伴った信頼は厚く、団員の励みの一つとなっています。

○ 環 境

この環境を作り出している一つには全員ではありませんが、団員の多くが農・漁業若年従事者であります。特に農業従事者は自治体が誘導した蔬菜の園芸農業をいち早く地区に導入し、近隣都市への一大蔬菜供給地として全国的にも高い評価を得ています。

農家が安定した収入を確保していることから継続的に従事する意欲が存在し、団への安定した人的供給が可能となっていることだと思えます。

二つ目には自治会の支援があります。当地には数多くの社会活動団体がありますが、全てに云えることは、集団指導体制と組織員の十分な討議で運営されていることでもあります。その原形が町会の運営であり、組織運営の知恵を各団体が当然のこととして実施している結果だと思えます。

IV. マイテーマ 生活改善

上坂紗絵子

1. 背景

今と昔を比べたとき、明らかに今のほうが多種多様で広い範囲（距離的に）に仕事以外の楽しみをみいだすことができる。移動時間の短縮化や情報網の発達、さまざまなサービス形態ができてきたことなどの社会的な大きな変化によるものといえる。そしてこのことはどの地域でも起こっていることだといえる。

K町では冠婚葬祭におけるおつきあいに大きなエネルギーを使っていた。時間的にだけでなく金銭的にもである。しかしおつきあいにお金がかかるということは他の生活（余暇、教育、地域以外との交際など）を圧迫することから、地域でのおつきあいに対して「負担がおもすぎる」という意識が大きくなってきた。

その中でK町において、暮らしやすさを保障するために、特に「葬」に関するおつきあいについての簡素化を中心とした「生活改善」が自治会をあげておこなわれた。理念は暮らしやすい、住みやすいまちづくりである。自治会長さんはその理念を「つきあいが大変だからお嫁さんがこない町ではいけない」と表現された。

2. 実施状況

葬儀関係について12項目、年忌法要について4項目、報恩講について4項目、お見舞いについて3項目の決定事項（禁止や制限）を守らなければならない（罰則規定は設けない）という生活改善である。喜んでいる人が多いのではあるが、ほんの少数の守らない人、守ったとしても我慢している人もいる。町内で生まれ育った女性であるYさんは「涙をのむ人がいる」と言われた。つまりがんばること（派手にすること）が供養になるという価値観があるからだ。この価値観はそもそも1.の背景で述べた生活改善の理念、目的の価値観と相反しているといえる。K町の一人一人が二つの価値観をはかりにかけて、しかし今後のK町のために「我慢」をしているのだ。2つの価値観が町の人々の心を揺さぶる中、それでも新しい生活改善の基準を守ろうとされるのはどうしてだろうか。それには決定段階のプロセスが重要な意味を持つのではないかと私は思う。

3. 行われた生活改善

特徴① 決定の手続きが民主的で参加型といえる。

葬儀関係、年忌法要、報恩講、お見舞いについての詳しい項目があるアンケートが最初に行われ、アンケート結果をもとにして話し合いをかさねられた。中心的に行ったのは生活改善推進委員（婦人会より選出）と自治会役員の方である。

～アンケートと実際に決定して行っている生活改善～のほんの一部の例

葬儀当日の食事について

アンケート

- 1 手作り料理の廃止、2000円以内の弁当のみとする・・・70%
- 2 自由にすればよい・・・・・・・・・・・・・10%
- 3 手作り精進料理 一汁三菜と香物とする・・・・・・・・・・・・・8%
- 4 お茶とお菓子のみとする・・・・・・・・・・・・・10% (5 その他)

実際の生活改善の決定・・・食事：3000円以内の弁当のみ（茶碗蒸し、付き出し禁止）
飲物：果物・白ご飯・汁：自由

香典返しについて

アンケート

- 1 香典の1割程度の額を定めて実施・・・・・・・・・・47%
- 2 廃止すればよい・・・・・・・・・・27%
- 3 できるだけ質素にして実施すればよい・・・・・・・・22% (4 その他)

実際の生活改善の決定・・・廃止

これによるとアンケートの結果を多数決としてそのまま採用していないことがわかる。話し合いのときに『『守れるかどうか』ということに基づいてほしい』と自治会の役員は要請された。「守れる生活改善」「守れるかどうか」をものさしとして決められた結果、お金のみを介在するおつきあい（粗供養、香典返し）はほとんどが「廃止」である。そしてコミュニケーションの場ともなる食事は「廃止」ではなく金額や料理の種類を制限をするという「簡素化」となった。

また最初にアンケートを行ったこと以外に反対意見や質問の言える説明会を、全ての家の方が参加できるように何度も設けた。それに参加してもらったことが「守らなければならない」という意識を強めているのではないだろうか。みんなで決めたから守ろうという意識が作りだされたのではないだろうか。アンケートや説明会によって「みんなのもの」という意識が生まれ、このことは他のことに関する決定でも同じではないか。機会の保障だけでなく本当に参加をしてもらうことによって「他人事ではない」という気持ちになるのだ。その積み重ねがK町の自治会への帰属意識を強める要素になっているように私は思う。

特徴② 生活改善によって町内でおこるマイナス事項は、町内の商店の利用が減ることである。したがって生活改善で改善項目に挙げられた（つまり簡素化された）食事の際の買い物は町内の商店を利用することを義務付けた。このことによってこの生活改善によって生活に困ることになる人をなくした。これは経済学で言われるパレート最適ではないだろうか。新しいことをするとき、ものごとを良くしようと改革するとき出てくる困る人にまで配慮ができていことも、この生活改善という改革のポイントではないだろうか。

4. 公共によせる心への第一歩

私はK町の生活改善を通して、真剣に町について話し合えることに感心した。それはこの生活改善によって簡素化はされたが今後もおこなわれていく「あつまり」の存在が大きいのではないだろうか。飲んで集まったり、台所でのおしゃべりは一見とりとめのないこと、世間話が多いかもしれない。しかし人と人との関係性というのは突然できるものではなく築きあげられていくものである。つまり目をあわせて話すことの積み重ねが関係性を築くのである。これは飲んで集まるときのことだけではない、盆踊り、運動会、敬老会などの行事、そして普段道で出会うときも関係性を築く最高のチャンスなのである。つまり地域の人とふれあい、関心を持ち合うようになるということによって地域全体に関心をもてるようになるのではないだろうか。地域全体の暮らしやすさに関心をもつことはつまり公共によせる心のあらわれだと私は思う。だから集まりでおしゃべりをしたり道で出会ってあいさつをするということは公共によせる心を育む第一歩といえるのではないだろうか。

5. K町から具体的に学べると私が感じたこと「総会」

K町では毎年1月3日に総会が行われる。午前中は各町ごとに行われ、午後からK町全体のものが行われる。そこでは会計報告だけでなく地域の課題を出し合う場となっている。午前中の各町の集まりの方が出席率は高く（役員の方「ほぼ100%の出席率」）一人一人の要望が出される。暮らしている中で感じるような困ったことを、仕方ないとあきらめたり、一人だけの課題とせず、みんなで解決しようとする姿勢がうかがえる。

多くの地域は総会をもっているであろう。しかし他の地域もみな、本当に活きた総会、参加してよかったと思える総会を開けているのだろうか。またK町ではどうしてこのように参加率が高いのであろう。それは自治会、そしてその総会に問題解決能力があるからではないだろうか。ではどうして問題解決能力が高いのか。その要素は「参加」にあると思う。協力することによって解決することのできる問題はたくさんあるのではないだろうか。

ひとりひとりがプライベートな場でぐちを言うということにとどまらず、公式の総会という場で生活のしにくさを言う。このことによってその問題はみんなのものとなり、協力して解決しようと動き出す。

生活改善はその一つの例だろう。K町において総会は課題発見の第一歩となっているように感じる。そのような総会を開くように努めること（具体的には場所、時間の決め方、召集方法、発言しやすい雰囲気など）、そしてそこで決められたことを解決しようと話し合いを繰り返すことは、住みやすいまちづくりのためにとっても大切なことだと感じるようになった。

6. さいごに

一人一人の生活は決して整理、画一化などできるものではない。つまり社会保障制度というシステムが一人一人の生活すべてを快適にするには限界があるのだ。しかし人間にはよりよい暮らしをしたいと願う欲求がある。

戦後社会保障の制度が整備されていく中で病院、施設が増えていくことは地域から排除される人がでてきたという面ももつ。それら制度ができるまでは家族が犠牲になっていたという事実があり、また地域に暮らすとは言えない部屋から一步も出ないような暮らしをしていた方もおられた。決して制度の整備はマイナス面ばかりではない。しかし結果として多くの地域は様々な人が暮らすことを許す許容力を衰えさせてしまったのではないかと私は思う。実は暮らしやすそうで暮らしにくい、いざというときにも頼りのない地域になってしまったところが多いのではないだろうか。

私は社会福祉を勉強する中で制度化することの大切さ、重要性を知った。しかしその一方で制度化自体が大切ではなくそのシステムからつくりだされるものの大切さがあることをK町を通して知ることになった。自治会というのはシステムである。そのシステムが昔から大切にしようとする地域の人と人とのつながりは、一人一人の暮らしを支えてくれるとても大きな力を持っていることを再認識した。

具体的に私は何をしていこうか。私の住んでいる地域には23歳、独身で女性である私が参加できる自治会関連組織（老人会、婦人会など）はない。今後そのような組織に関わる立場になれば積極的に関わってみたい。（K町をみてそう思うようになった。）

それまでに今日からできることとは？私の住んでいる地域で一人でも多くの方が私のことを知って、困ったときにも嬉しいときにも話し掛けてくださるようなそんな関係をひとつずつ作っていければいいなあ、と今私は思う。

V. マイテーマ 町内会長さん

稲田 秀明

自治会長さんとは4月21日に私たちの受け入れをお願いして以来何度かお話をさせていただいたところですが、主に時間的制約から、詳細に記録し、他と比較するなど「研究としての手法」をきちんと踏まえることはできませんでした。

(1) 自治会長さんにお会いし、お話を伺った概要は次のとおりです。

1. 現自治会長のNさんは59歳、数年前に大手の会社を一旦退職の後、関連会社で受託業務を行なっておられる。
2. 現職へは平成11年からで、前町会長が任期8年と長かったので、周囲の推薦により、立候補、当選し、その後1年ごとに再選されている。
3. 大体、夕方にバイクで町内を巡回し、その際に町民から質問や相談を受けたり、必要な連絡、調整をされることも多い。
4. 民生委員でもある。60歳定年であり、その後については、公的年金に加え、会社独自の年金制度があって、経済的に困るようなこともないと思われるので、地域に奉仕する活動を続けていきたいと考えておられる。（専業農家では代替わりはあっても、定年はなく、その時点の体力に合った仕事をすることで家族内の役割分担を果たそうとされるので、長期継続して奉仕活動に従事することはむづかしいと思われる。）

5. 土・日は、たいてい行事で埋まってしまう。役員会は週一回で、20時から22時まで、会計さんから一週間の出納報告がある。
6. 趣味は詩吟で、各種大会の審査員として出かけたり、週一回は詩吟のグループに出張教授されている。
7. 最近の自治会運営の自己評価として以下のように語られた。
 - ① 合議に十分手間ひまかけており、協力的に自治会運営ができています。各頭役も精力的に活動されている。
 - ② 生活改善、自治会規約の大幅改正、町内の不法駐車追放、消火栓器具の充実等新たな改革改善も進んでいる。
 - ③ 定例の祭りや親睦の各種行事もしっかり出来ている。
 - ④ 生活改善のとりきめでは法事の際の仕出しは町内の店からとることになっており、副次効果で、仕出し店が繁盛し、魚等の新鮮度が増したと聞いている。

8. 現自治会長になってから自治会活動の再活性化が進められた。

役員を増やし、分担を細分化されたこと、役員の選出方法、任期の制限等合理化が図られたこと、婦人グループから始まった生活改善の取り組みを指導し、ある段階から、町内の関係団体それぞれで討議をしてもらい、また、各町でも議論し、と、議論の綱の目を組織し、取りまとめ、決定、実行を行なわれた。

(2) お話をお聞きして… 「理想に近いと考えられる民主主義がここに在る」

K町は自治会活動のいわゆる先進地として紹介されたことは殆どないと思われます。しかし、お話を聞くに従って、ここでは私や班の皆さんの居住地と比べ人と人のつながりが広く深いと感じられました。それだからでしょうか議論も激しくとことんされている様子が伺えます。そのうえで、決まったことには無条件に従わなければなりません。この例は役員選挙で選ばれたら辞退はありえない（出来ないような個人的事情がないことは皆知って投票されていることもあります。）こととか、生活改善の取り組みと実行の過程や不法駐車追放の取り組みなどにもみられます。これは「老人クラブ」の活動についてお聞きしたときにも同様に感銘を受けたことです。

人と人のつながりが広く深いのは、

- ① 職住近接である70戸あまりの専業農家の存在が、濃い人間関係網を築いていることが大きそうです。
- ② それでも全戸の1/5程度ですが、農家以外にも人間関係における伝統的な地域の風土、気風があまり形骸化せず生き生きと受け継がれているようです。

外からみると、こういうところにはムラ社会の弊害ということもありがちではないかと思われますが、交通の不便な山間部の寒村などではないK町には、利益や信条を直接の動機とする近代主義的な考えも、もちろんたっぷり入ってきているはずで、両方のバランスの現状が今の自治会のありようだと思われます。

K町は専業農家が多いことの点では特異な例ですが自治会の様子が近隣の他と大きく違うという話はどこからも聞くことはありません。ですから、この地域の自治会を中心とした運営が「濃い」のは事実としても「特殊事例であって他の参考にならない」というのは言い過ぎになってしまいます。実際のところ、多くの自治会は十分に民主的運営がなされているといってもいいのではないのでしょうか。ちなみに、私たちは地元で輪番での役員が回ってきたとき近隣の皆さんの意向を最大限配慮した運営に一所懸命努めようとするのではないのでしょうか。

(3) 自治会長とは？他の何に似ているか？

私なりにごく簡単に実感による定義を考えてみました。

「ある範囲の地域に居住する各戸が、組織的に行なわないとできないレベルの近所付き合いがあります。」

これを円滑に行うための伝統的な生活様式としてのムラ秩序の長」

とすれば、この地域の長老が頂点に立つのが昔からの物事の順序というのですが、世の中、新し物好きが多いためか、近頃、長老の権威は、さっぱりです。

そこで、まだ現役、ないし、現役を終えたくらいの、体力がまだあり、気力の充実している方で、家族生活に不安のない実力者の登場となります。

これが、今のK町の自治会長さんではないかと思えます。

自治会長は、町内の皆さんの多様な考え方を考慮して、普通は特定の思想的立場に立たず和を大切に、現状に寄り添って町民の利益を図っています。地域の利益を代表してくれる議員を議会に送り込もうとしますが、その議員の党派はあまり問わないのが普通です。

一定の地域の代表者として責任ある立場という点では市長と我が自治会の長とは似ています。しかし、末端の行政機関として国の委託事務や、公共サービスに従事する市長に対して、自治会長は行政とは法的には無縁であって、任意に結成されたものなので、機能を停止してもたちまち住民の生活に大きな障害が出るようなことはありません。まあ、親睦会の世話役みたいなものでしょうか。

自治会が任意の住民の活動だという点ではいわゆる市民活動と同じように見えますから、特に市民活動家は同一視したがる傾向があるようですが、全く違うことは、自治会はいわゆるコミュニティですが、市民活動はアソシエーションです。

コミュニティである自治会は町内の共同生活に関わるすべてのことを扱いますが、アソシエーションは、特定の人々が特定の目的を扱います。多くの市民活動家が自治会を敬遠するのは自治会にはみずからのイデオロギーを持ち込める素地があまりにも少ないからかもしれません。(p 79 第3章3. 自治会の特徴と可能性⑤・・・参照)

(4) 自治会長にみる公共によせるところ

私は昨年と一昨年自治会の本部役員を務めました。その経験や、過去に仕事上付き合いのあった色々な自治会長さんのつぶやきからまとめますと。

自治会長には誰でもなれるというものではありません。自治会長は「小ながらも一国一城の主」というとちょっとおおげさかも知れないが、名誉ある立場であることは間違いありません。

一方、苦勞も多い。役員会にも話せないような隣同士のもめごともち込まれる。苦情はしょっちゅう聞かなければならないし、責任も追及され放題で、「忍」の一字。プライベートの時間が極めて少なくなるのは市長さん並、その分家族に負担をかけます。

市長だと名誉もあるし、金銭の報酬もあります。しかし自治会長にも名誉はあるが金銭の報酬はありません。仕事のレベルが違うし、自治会長は親睦会の世話役と考えればあたりまえといえますが、自治会長の責任を全うする過程で「公共によせるところ」が他の誰にもない高度なレベルで発揮されているのではないのでしょうか。ふだん、ふつうの人は自分の住んでいる地域で自治会長さんがこんな風に奮闘されていることに気付くことは殆どないかもしれませんが。

第2章 自治会にみる公共によせるところ・・・座談会記録

出席者：稲田秀明、伊藤正則、松井義光、青木伸子、上坂紗絵子

1. K町で触れた公共によせるところ

稲田：台風や降雪で一部のハウスがつぶれる被害が出た翌日に被害にあつてない農家も出て、解体撤去と組み立てをされる。誰が号令するということがなく、当然に集まる。火事の時とかもそうだが、なにかもう習性というか本能のようになっている。いざと言う時に当たり前のように行なわれる互助精神

の発揮は一つの「公共によせるところ」の表れではないか。

また、現自治会長さんはある企業を定年退職後関連会社で比較的時間的余裕のある勤務や年金制度など、地域の皆さんに役立てる条件ができてきたところを周辺の皆さんも観ておられて、推薦された。そこで、頑張ろうかということで無償のボランティアである自治会長への立候補を決意されたのはご本人の公共によせる心の発露ではないか。

青木：自治会費の額についてお聞きしたとき、一万六千円だということでしたが、一人暮らしの家は自治会で把握されていて、経済事情を考慮して半額の八千円に減額されています。ふつう世間では、手を挙げて初めて特典が許される風ですが、ここではあらかじめ思いやられて、申し出制ではない。そこには自治会としての配慮のころがある。このような自治会の根底は一人一人が住みよく、心地よく、無理なく、自然体に暮らしていけるように努力されているのではないか。そのところに大変感動しましたし、このことが一つの「公共によせるところ」ではないでしょうか。

2. 公共によせるころの背景には帰属意識がある

上坂：配慮できるためには、話したりしてお互いの顔が見える環境が必要で、昔からの濃い、一緒に飲んだり食ったりする機会が多いのが「公共によせるころ」を育てるきっかけの一つになっているのではないかなと感じました。

生活改善を行うなかで何回もアンケート、説明会がされていて皆がこのことに参加してるんやなーと感じました。何回かK町の方と接していてK町の住民であるという帰属意識がすごく強いなあと感じます。その帰属意識があるということが皆さんの公共によせるころを作り出しているのではないか。自分の町だから大事にしようということで生活改善をみんなで行われたところに公共によせるころを感じます。

稲田：帰属意識といえば、老人クラブの役員さんの話で、「わしは役員なんかしたくない。農家だから年寄りなりの仕事があって忙しい。頑張って世帯主の息子らを助けたい。しかし、選挙で選ばれたらこれはしょうがないから任期の間の責任は精一杯果たす。そうでなければ、近所の人にもご先祖様にもうちの家族にも顔向けできなくなる。家族もその分は家の仕事が出来なくなることは理解してくれている。」とおっしゃった。同じ地域に住んでやっっていけば必ずこういう意識は出てくる。個人的な気持ちの話だが地域で皆が共同でやっっていくうえでの基礎になっているのではないかと思う。

青木：ある学区でまちづくり構想に取り組んでいる事務局のOさんにお話を伺ったら、自分はここで生まれ、息子も生まれ、孫、ひ孫とこの地域に世話になる。今、事務局やらせてもらっているのは大変だけれど、これは恥ずかしいことはできないということもあるが、郷土愛という言葉でもあらわせるとおられた。

稲田：町内会って役員さんも次々とおもしろく楽しいことをやっているわけでない。じゃやめたらいいのかというとそうではなくて、こういう行事を重ねていることが地域の一体感を、言い換えれば帰属意識を持続させている。いざというときに相互扶助できる態勢がそこで保障されている。

伊藤：K町の農業者は収益力が高く経済的に豊かであることが万事に良い回転をもたらしていると思う。

松井：K町の場合、職住近接の仲間が多いことが帰属意識の強さになっているのではないか。また家族労働であることから家族の絆と共に地域人達の絆も深く、お互いに支えあう意識がよそと比べよく育っているのではないか。

自営業者として自分が儲ければいいのだから個人は個人として海外に出かけてまで勉強されているが共同への努力にも頑張られているところに公共によせるころを持っておられる。

また、この地域の皆さんの帰属意識、絆が強いには同家（親戚の範囲を越えて同姓の家々でグループがあり、年一回会食されている。同家で区画される墓地がある。）での付き合いがあることもある。

稲田：「帰属意識が強い」というのは言い換えれば「自分の位置、居場所」がはっきりしているということだ。いままで会ったK町の方はたいいてどっしりと安定した印象がある。

余談だが実は農家同士は競争されていて、共同は美しいとか道徳的だからではなく、共同した方が市場に対して有利だということであって、今でも共同で扱わなければならない種目は限定されていて、あとは自由だから技術力の高い農家は、共同外の種目に力が入っていると聞く。

3. 地域における協働の強さ

松井：農家間の競争は激しいのだろうけど、後継者育成ではしっかりと育つよう共同で配慮されている。メロンの新品種試験、商品開発は後継者クラブの役割で、産地として成長しつづけているが、彼らはこの地域農業者全体のために役割を果たしている。地域で一斉に農休日を設定することへの合意自体が大変なことだったらしいが、粘り強く議論を積み重ね、それを実現したところには競争原理では説明できないものがあると思う。

稲田：園芸組合は個人事業者の集合体のようなものでK町農家全体の今後の盛衰に影響するのだから指導者の方々は個人の都合、損得をひとまず差し置いて全体のために努力されているのかもしれない。

4. 懐の深さ

伊藤：自警団は若い人が町内の防火、防犯に努めていただいているのであり、老人や女性のみならず、昼間留守にするサラリーマンには大変心強く、「公共によせるところ」そのものの頼りだ。

町内に小学校があり、窓ガラスが沢山割られたことがあって、そのあとK町の自警団が巡視され、校長から感謝状を頂いた。この学校に通うのは15の町内会区域からだが、学校の所在地はK町だからと自治会長からの相談にしっかり応えられた。懐の深さを感じる。

稲田：自警団の役員さんの話では、彼らはあまり旅行に行かない。なぜかという留守の間にK町に火事があったら困るからだ。現場には絶対に消防署員より早く着いていて、できるだけ消し終えておくことに、とても充実感を感じておられるのではないだろうか。

伊藤：それと農業者の多いこの地域では自警団の役割は防火や警備以上に子供達への社会教育になっているという面も大きい。子供達の眼から見れば頼もしい限りであこがれるのではないか。

5. 地域での安心感

松井：婦人会の役員さんの話だが、町内では色んな組織が沢山あって、いわゆる仲よしグループも色々で、それぞれの人がいろんな組織に顔を出している。自分の身内には心配をかけてしまうから言えない悩みも話せる場がある。そこでは自分の本音で物が言える、相談にのりあえる。そういう中でお互い同士がわかりあえる。例えば年寄りの介護の悩みが目を見ただけで、口を見ただけで分かる。どんな苦しい時でも分かってもらえる、皆が知ってくれている。そういう安心感があるとおっしゃっていた。ただ、若いお嫁さんとかはまだそこまではいかないらしい。

稲田：生活のすべての分野が居住地にあり、イコール居場所であるということではないか。農業者の人達は職住がごく近接していて、そのうえ、新興団地がなく、前出の「同家」もあるし「帰属意識」の強い条件がそろっているといえるだろう。

しかし、一方ではK町でも京阪神に通勤のサラリーマン家庭が多い。野菜農家はざっと2割を超えるくらいでしかない。サラリーマンはどうしても意識は職場に向かう。日常的にはテレビ、新聞などの大量の情報の海に浮かんでいるという点ではいずこも同じではなかろうか。

6. 自分のまちではどうするか？

川勝：帰属意識が強い、居場所がはっきりしているとはどういうことだろうか。郷土愛とは少し違う。郷土愛はそこに住んでなくても、よそからきた人でも持つことができる。

K町にはどうして帰属意識があるのか、また学んだことをどのようにしたら他の地域に活かせるので

しょうか。

伊藤：松井さんのところは同じように古い、新住民もいない環境でありながら人々のあり様はK町とは全然違うといつも言っておられるが。

松井：ここにはしっかりとした仕掛け人、リーダーだけでなくその周りに支える人がおられる。うちではリーダーを支える人がなくて足の引張りあいをしてしまう。いいことだから皆で協力しようという意識と、めんどくさい、やってもいっしょ、誰かがしてくれるという風な意識の違いだろうか。風土か？私たちはK町と出会って帰属心、居場所が大切という意識の大切さを自覚した。それを自分の町の人にどうやって自覚してもらったらいいのか。誰がどう伝えたらいいのか。

7. 昔ながらのもの～どこに目を向けるべきか？

稲田：「昔ながらのもの」には歴史の試練を受けて、取捨選択、切磋琢磨してなおかつ残ってきたものなのだから学べることはたくさんあると私は考えるのだが。

松井：県主催の湖北一市十二町の諮問会議の委員になっているがそのなかでできるだけ多くの住民が恩恵を受けるような事業を進めるよう提案しているが市民主役課とかはキラキラと輝くようなアピール性の高い、シンボリックな事業に目が向いているように私は思う。

稲田：いわゆる「起爆剤的役割の可能性」への期待だろう。自治会で何が課題なのか目を向けて議論することは今あまり考えられていないのではないだろうか。運動会や盆踊りで親睦を深めるようなことも大切なかもしれない。

松井：私自身がここで学んだことはなかなか我が町では受け入れられない。どうすればいいのか。

8. 我が地域を振り返る～支えあえる土壌

上坂：今回の私たちの取り組みの意義について、前にここで話し合った。この報告書を読んでもらった方、報告を聞いてもらった方がふっと自分の住んでいる地域をふりかえって、帰属意識を考えてもらうきっかけとなったらいいな。K町の良さに触れたことで自分の価値観が変化して近所でもいい関係を作っていこうという意識ができたように思う。家からでがけに近所の方に会ったとき今までよりもっと元気に挨拶しようとかの積み重ねを大事にしたい。

昔の人は生活の必要上共同しなければ解決できない課題が多かったが今はその必要が少なくなった。そういうなかで無理に危機感のようなものを作り出す必要もないのかもしれないが。

稲田：これほど便利快適な社会になると人と人がくっつき合う必要性も薄れ、地域の課題もさし迫ったものはなくて、近所付き合いがなくてもOKと多くの方は思っているのが実体だ。そういうなかでK町は次々と地域課題に取り組んでいる。

伊藤：高齢者を家庭で介護してきたが状態が重くなって、四六時中気の抜けない女房にこれ以上負担がかけられず、施設にお願いしている。ほんの片時でも近所の世話になれば引き続き家で介護を続けられたかもしれない。そういう意味でK町の方が大変うらやましいと思う。あそこでは多少なら近所に甘えられるお互いの関係を築いておられる。

松井：介護保険の適用までいかないが、近所で心配りが簡単にできること、介護の家族にちょっとした支援のできるシステムが必要だ。

話は変わるが、うちの近所では表面的な波風を立てない接し方をして、そのくせ裏では他人にあけすけな批判をしたりする。この点K町は率直であけすけだ。こういう気風を是非うちに取り入れたいが難しそうだ。

稲田、伊藤：こういうところもあるということでK町での経験を話して一人でも理解者を増やしていくことしかない。3人でできれば動く。自分自身の総合的な力が問われるところだ。

9. 地域における公共心について

青木：社会学などの世界には「公共心（公共によせるところ）」という言葉の定義はないようだ。しかし、K町では現実に生き生きとおこなわれていると確かに感じた。私たちなりの捉え方でこれを表現することは価値のあることではないか。間違ってるという人が沢山あってもいい。議論のきっかけにしたい。自治会論は社会学でも埋もれているようだ。NPO 活動が活発だが、実際のところ NPO だけで何もかもやっていけるとは思えないし、あるいは自治会だけでやっていけるとも思えない。ある社会学者は「自治会は解体されるべきもの」と考えてこられたが、環境問題に迫ろうとした時、自治会抜きには無理だとわかったそうだ。

稲田：自治会が法制化されたのは昭和 15 年からで、昭和 22 年 GHQ 指令で廃止された。この時期は敗戦まで国家社会主義が日本を動かした時代で、これをいつまでも続けている。

10. 自治会のマイナス面とつながりの願望

青木：例えば学区の運動会の中学校の部のリレーで誰も行きたくなくて、じゃんけんしたらある女の子に当たった。泣いて、ご飯も食べられないので断りに行ったが、「連合会に顔向けできない。当たったので仕方ない。血が出て、吐いても出てもらう」と言われ恐ろしさを感じたと聞いた。また町内会組織を通じた赤い羽根募金などいろいろな負担とか動員をかける。いやな束縛を受ける。

稲田：組織的に何かをやろうとすれば、必ず個人を束縛する面があるはずなんやけど。

伊藤：昨年我が学区にボランティア準備会ができた。ある日曜日に小雨の中 100 人位集まった。この時ある自治会長さんは「この取り組みは自治会ではできん」と言った。それはまず強制でないということ。またうちでは 20%が自治会に入っていない。広報配布をその分郵送すると経費も高い。「われわれの町内会だ」という意識が育つような運営が必要だ。地域のつながりは皆願望として持っているのではないか。また職場生活中心でやってきた私と違い、女房は地域での絆ができています。こういう思いの人達が連携していけば面白いものができるのではないかと思う。

稲田：20%の人はそれで別に困っていないということらしい。しかし、ある昭和 40 年代終り頃できたマンションの住人で、自治会には加入せずにこられた方から最近になって公民館に「敬老会の案内が届かない」と苦情があったらしい。さすがにリタイヤして外の仕事の関わりがなくなると地域に眼を向けざるを得ない。

11. 自治会の悩みと可能性

稲田：自治会では大した事業はしていない。大したことをやるとしたら高い共通目標を共有しないとできない。高い目標を強引にやれば目標意識のない人には不本意であり、強制となる。「それほど負担にならない最低限の活動でしかないのになかなか協力が得られない」というのが一般的な町内会役員の悩みではないのか。

伊藤：連合会からは割り当てが来るし、地域の方は動かない。役員はストレスがたまり、早く任期が過ぎてほしいと願う。一般にはこんな状況が多いのではないか。参画意識の高い事業目的や運営に組みなおす必要がある。

青木：昭和 22 年に GHQ が禁止しても大抵の町内会は水面下で復活した。生活上の必要性があったからであろうが、そこには「戦時中の隣組の記憶」にだけ求められない日本人の作る組織運営のスタイルがある。そのなかに、強制と受け止められかねないやりかたが含まれていて、そこに多くの学者が町内会を肯定的に見ない根拠があると思う。自治会が何をしなければならぬかではなくて、地域で「何がし

たいのかなあ」という住民意識の確認からもう一度立ち返って始めたら共有化できる自治会になるのではないか。

12. 自治会活動からの学びあい

青木：自治会同士の経験交流とか自治会運営指導などはないのか？成功事例を学ぶような機会がないから、運動会の例のように稚拙な動きを繰り返している。自治会運営のやりかたについて自治会と行政が、あるいは連合会が、シンポジウムするとか、毎年自治会役員が集まって研修会をすとかでないと変わっていかないのではないか。問題に気付いた者が行動することが大事だ。例えば地域の絆を醸成するための新聞発行とか、自治会長さんの経験交流会をしていくべきだ。

稲田：運動会の強制の話なんかは自治能力が弱いというか、人と人の関係の築き方が練れていないということだろう。「自分とこの悩み」は自分とこだけのことでよその人には関係ないということかも知れない。

松井：役員自身に問題があると思う。役員には沢山の情報が入って運営に努力しているけどその他大勢には情報が届かない。

稲田：日々忙しいし、そんなに色々な情報なんか興味ないし面倒くさい。役員さんに任せてあるのだから、私には情報は要らない、というのがむしろ一般庶民の感覚ではないか。

うちの周辺は外れの方にあるので、主要な役員就任はあまりまわってこない。一方うちのすぐ隣の大字は45戸しかないが1町内会として運営されている。うちの周辺の50戸と隣の45戸で農村下水道を設け、維持管理組合を構成しているが、自治会や婦人会、PTAなど誰にも役員が回ってくる隣町の方が組合の運営能力がかなり高いことは関係者の認めるところだ。自治能力が鍛えられていることで、人格形成に役立っているように見える。学区の運動会でも参加率が高く、よく優勝する。うちの場合は成長の機会が少ないとも言える。「情報が少なくて不満だ」などと聞いたことがない、逆に役員が大変苦勞して地域に役立つ働きがあってもその他の皆さんには通じていず、感謝の念は感じられない。

松井：先ほどの話で、「気付いた人が行動する」ことが必要と言われたが、気付いた人の行動をどういう風にサポートするのが課題だ。ここをもっと深めたい。

13. 地域の運動会を考える

稲田：オリンピックはいわば国際レベルの運動会（日本国が一つの自治会に擬せられる。）で、結構日本中熱が入ってます。金メダル取れたら大騒ぎです。地域の運動会は時々顔をあわせる隣近所の人が活躍するのだからもっと熱が入ってもおかしくない。オリンピックの場合はいやでもどんどん情報が入ってくるし、日本人としての帰属意識を呼び覚まされるが地域の運動会は参加していないと分からない。

伊藤：うちでも連合会で運動会はあるが、選手・役員は別として、すすんで応援に行こうと思う人は少ない。無理にやってるのならやめた方が良いのではないか。

そういえば、K町では運動会の前日に地区対抗に出るリレー選手が練習していると聞いた。所属地区の名誉を背負って頑張るのだ。そして、町内の各戸が空っぽになるので、自警団が巡回警備しておられる。K町ではすごい盛り上がりらしいけどうちの町には結びつかない。うちの町で盛り上げる何かをやっていくとしたらまた違う形式になるのかもしれない。

14. 地域での相互扶助ははたして可能か？

稲田：日本人はずっと地域の互助的な関係を町内会レベルの組織で支えてきたのだろう。明治の学校制度が始まった時は土地も建物も先生も地域で用意したらしい。それだけの力が地域にあった。というのは今は行政が何でもしてくれるから自助努力とか相互扶助精神は風前の灯火だ。神戸の長田区真野地区は震災当日に自治会で炊き出しされたと聞くが稀なケースであって、あとは大抵支援を受けるだけだったらしい。だから、いざという時、真野地区のように出来る基盤を普段に作っておくことが今の自治会

の大きな役割かもしれない。

青木：「白はしろ赤はあか」と皆が言ったらだめみたいな、「みんな違っていい」とか、同じ方向に皆が向くことが今は否定されている。何もない時にいざという時の準備は難しい、関わりたくないということになる。何かあったときすぐ行政に駆け込めばなんとかなるという感覚でなく、どうしたらいいかということを経験のみんなで考える意識になることが必要だ。

稲田：「みんながばらばらになっていく」方向に対してブレーキをかける動きが今の世間にはない。学校でもそういう時間をとってもらいたい。

松井：このことに関連して思うのは、「個人を大切にすること」が安直で楽な生き方につながっている。本来権利と義務はワンセットでないと世の中は立ち行かないはずなのに近頃の自由、平等第一の教育では、義務の観念はでてこない。強制に反発するのは当然だけど、なぜそういうことが出てきたのか考えた時、ケースによっては「自分はここに住んでいるのだから、これくらいの義務は果たしましょう」と考えるべきこともあるかも知れない。

伊藤：K町では義務の観念がきちんとあって、権利とのバランスが取れていると思う。

15. 市民活動と自治会の相互補完について

青木：今まで行政と自治会の補完の関係があると云われてきたが、住みよいまちづくりを進めるためには、市民活動と自治会の相互補完を目指すのが良いのではないか。自治会は市民活動をする人材の供給基地になれる面もある。

伊藤：自治会は地域に責任を持つし、行政からの情報も豊富だからNPOが唯我独尊にならず、社会の一角をきちんと占めていくうえで、理解し合い、情報を共有化していくことが大切だろう。

稲田：自治会は実態的には国・県・市・自治会と並べられるように一定範囲の地域を代表するミニ政府だ。その地域の問題は自治会で意見集約して自治会が実行する。特定目的の市民団体はその地域の意見を代表することはできない。その団体の意見に賛成する人もあれば反対する人もあるだろうから。

青木：周りをよく見れば河川、道路、公園など様々に事業が行なわれており、何らかの形で生活に影響があるとすれば自治会でよく議論して地域の意見集約結果を行政と突き合わせることは大変重要なことだろうから個々の住民がそういうことをしていける心、力を持つことが必要ではないか。

第3章 これからの地域社会は自治会とNPOの協働から

1. 市民活動・NPOへの期待

市民活動・NPO（以下「NPO」）の基本的な特性は、その活動が誰かに強制されたものではなく、「自主性・自発性」であり、この特性を発揮することによって大きな力を出すことができる。はたしてこの特性は充分発揮されてきたのだろうか。

平成10年に特定非営利活動促進法が施行されて以来NPOへの期待はすさまじい。いわく、「公共サービスの権限機能の多くをNPOに移すことで住民自治を広げ、行財政改革を進めると共に質の高い公共サービスの提供をめざす」。「行政と市民は対等平等で誰もが自由に主体的自律的に参画していけば完全

な行政の責任領域はわずかで、あとは大なり小なり市民がかかわれば理想の地域社会が実現できる」と。ところが、滋賀総研報告（滋賀県委託調査 パートナシップに基づく協働の推進に係る調査報告書 「NPOと行政等とのパートナーシップのあり方」 平成13年3月 財団法人 滋賀総合研究所）では、「滋賀での協働活動も、これからスタート地点に着こうとしている段階であるといえよう」（p26）としている。その一方ではこのことがなかなか進まないことに業を煮やしてか、同報告書で「滋賀県の施策のすべてについて、パートナーシップ型とすることを義務付ける。協働できない事務事業はないという観点から、協働を前提とし、それができない場合には説明責任を果たすこととする。」と提案している（p38）。強権的に県職員に民との協働を義務付けしようとしているのであれば、対等・平等、自主的、自律(立)的の理念はどこへ行ってしまったのか。急ぎすぎではないだろうか？

冒頭にあげた市民活動の基本的な特性は、現実に充分発揮されているのだろうか。自主性、自発性の発揮が大きな力を生み出すことは疑いない。とすれば、地域住民の自治活動と上手く連携できないか考えてみたい。

2. なぜ自治会なのか

日本では意識するしないにかかわらず殆どの人が居住地自治会の構成員である。確かに、いわゆる市民活動の動きと関わりなく一般的に地域の自治はごく平凡、地味に、あるいはしょうがなく行なわれているようにも見える。決していつも楽しく円滑に、とはいかないだろう。輪番でやむなく……。自治会を自分が役員の時につぶすということもなかなかできない。春祭り、敬老会、盆踊り、運動会、行政への陳情、総会、次の役員を何とか受けてもらって肩の荷を下ろす。こんな感じが一般的だろう。しかし目には見えにくい、地域の一体感はこの地味な活動に支えられているのではないだろうか。

近代民主主義こそ草の根の民主主義を大事に、自治会がどんなに問題を含んでいようと我慢強く見捨てず、改善すべきは主張し、大方の合意を得て進める姿勢をとるべきだ。K町ではかなり徹底した民主主義的運営のもと、具体的な町内の課題解決に取り組み、成果をあげておられる。

地域課題への取り組みはここ（自治会）にも見られるのではないだろうか。という仮説が私たちの研究の出発点だったのである。

3. 自治会の特徴と可能性…

自治会とNPOがお互いの立場、特徴を認識していることが協働の前提として大切であることから、参考として以下に「町内会」（中川剛著 中公新書 p75～76）を引用する。なお、ここでは、コミュニティは自治会と、アソシエーションは広い意味のNPOと解する。

「コミュニティは、社会生活の、つまり社会的存在の共同生活の焦点であるが、アソシエーションは、ある共同の関心または諸関心の追及のために明確に設立された社会生活の組織体である。アソシエーションは部分的であり、コミュニティは統合的である。1つのアソシエーションの成員は、多くの他の違ったアソシエーションの成員になることができる。コミュニティ内には、幾多のアソシエーションが存在しうるばかりでなく、敵対的なアソシエーションでさえ存在できる。人はその重要性が最低の目的にも、また最高の目的にも結合できるものである。アソシエーションは、当事者にとって多大の意義あるものであることも、大して意義がないものであることもある。またそれは、単に月例の晩餐会の口実のつものりものか、あるいは貴重で最大の利益を保護するものであるかもしれない。しかし、コミュニティはどの最大のアソシエーションよりも広く自由なものである。それは、アソシエーションがそこから出現し、アソシエーションがそこに整序されるとしても、アソシエーションでは完全に充足されないもっと重大な共同生活なのである。」（R・M マッキーヴァー、「コミュニティ」）

定義しなおすなら、コミュニティは、一般生活目標のための統合集団で、その性質上、中立的かつ生活の普遍的基礎となる土地の上に成立しやすいが、それが絶対的でなくて、ユダヤ人のように地縁を越えたコミュニティを成立させている場合も認められる。アソシエーションはこれにたいして、特殊生活目標のための統合集団で、コミュニティによっては満たされない、もしくは不十分な目標追求のために存在するものであるから、コミュニティ生活の上にアソシエーション生活が上積みされることになる。

NPO、自治会を冷静に位置づけている人もいる…

次の表は大阪ボランティア協会理事・事務局長の早瀬昇氏が去る1月31日近江八幡市で市町村職

員向けの講演をされた際に配布された資料の一部である。(時間の制約か、説明はされていない。) やや乱暴かもしれないが大阪の方らしく率直で端的に整理されていると思われる。市民活動団体に関してはいいい面しか書かないのが普通なのだが・・・。

市民活動、コミュニティ活動、行政（自治体）の比較

	市民活動団体（有志型）	コミュニティ組織	行政（自治体）
① 活動領域	特定テーマに特化（地域の課題から離れる場合もある）	居住地に関わる課題全般（大半の居住者に共通の課題が重視されやすい）	少数者の課題も含め、社会問題全般が対象（基本的に自治体内の課題）
② 構成員	有志（少数）が参加（入退会は自由。特定地域住民でなくても参加可能）	全住民参加が建前（域内住民のみ。退会は可能。組織率が低い場合も）	主権者は全住民（他の自治体への配慮は副次的）
③ 活動者	役員等の責任は重い、比較的会員の関与は多い	役員等に集中しがち	有給の専従者（一部ボランティアも参加）
④ 参加姿勢	自発的（嫌になったら、辞めてしまう）	自発的。「つきあい」など消極的参加もありうる。	法的規制と議会の合意で行動（個々の職員が意欲を持つ場合は多い）
⑤ 意思決定	責任を負う人が強い影響力を持つ場合が多い	可能な限り「全員一致」	過半数以上（議会が決定）
⑥ 役員自律性	自律的（時に反対派を除名。支援者の意向は配慮）	半自律的（構成員の意向を、かなり配慮）	本来は他律的（議会の意向重視）
⑦ 資金（財源）	会費＋寄付金＋事業収入＋行政補助？	自治会費など住民の寄付＋行政補助	税金、社会保険料など
⑧ 行動原則	自由	公平・調和	公平・平等

これを参考に項目ごとに検討してみたい。コミュニティ組織（自治会と言ってもいいだろう）の列を上から順番に、市民活動団体（有志型）の列を横目にご覧いただきたい。

① 自治会の活動領域は広い。ふだんは親睦的活動が多いが、具体的な課題に取り組むときのベースとなる。とりわけ相互扶助、極端なケースは阪神大震災のような時にはふだん親睦的活動がよく出来ているかが問われるのではないか。

各種行政施策が特定の地域で行なわれる場合はもちろん受け入れ側の窓口となり自治組織としての合意形成を経て住民の利益を追求する。

活動領域が広いだけに深くやり出したら大変な時間と人手が要る。人々は自分の仕事や勉学に忙しい、家族の団欒も大切にしたいし、文化的なことも楽しみたい、観たいテレビ番組も多い、というわけで自治会活動も最低限はするとしても余計なことまでは困るというのが一般的なところだろう。

ここで 共通の活動領域を持つ NPO と連携できる条件が開けているのではないか。NPO は専門性がある。自治会は専門的なことに手間ひまかけられないが環境、教育、福祉など趣旨が良くて地域で無理なく取り組めることならできる。つまり、お互いが活動領域を提供しあえる。（愛東町の廃油回収が一例だ。）NPO の活動が広くみえるので、住民のなかから NPO に参画したい人が現われるかもしれない。さしずめ、自治会が NPO の人材供給基地だ。

② 自治会の構成員は全住民なので、意欲的な人もそうでない人もみんな一緒に進む。だから輪番制であったりして、余計なこととみられるようなことはできにくい。特定の政治的あるいは思想的立場は自治会としてはとりづらい。通常、行政の意向は原則として尊重される。このあたりも市民活動家にはおもしろくなくろう。

しかし、地域ぐるみで取り組まないといけない課題は多い。これが出来るのが自治会だ。ここでは NPO はとても太刀打ちできない分、自治会と連携できればよい。

③ 自治会の活動者は役員等に集中しがちとしても輪番制では例えば十数年に一回はその役員がまわ

ってくるのでその意味では皆が平等に関与していることになる。臨機応変で、継続性は抜群だ。旦那がだめなら奥さんが、あるいはおばあちゃんが。世代が代わっても次代に引き継がれる。

④ 自治会への参加姿勢では、役員さんの顔はつおせないなど消極的なことがあったりするが反面社会生活の共同性を考慮し、大人の態度で協調しているのが普通ではないか。これができるから地域ぐるみの課題解決に取り組めるのだ。嫌になってやめるわけにいかない。引き続きここに住み、活動の恩恵も受ける。恥ずかしいことはできない。NPO は自主性と行動力で自治会に優れた企画を持ち込むことができる。

⑤ 自治会の意思決定は可能な限り全員一致だが逆にいえば誰もが納得する範囲でしか動かないともいえる。意見の大きく分かれることに結論は出せないし、特定の政治的あるいは思想的立場はとれない。面白くないかもしれないが民主主義的であることには違いない。

⑥ 自治会役員の自律性が半自律的なのはやはりたまたま同じ地域に居住するだけで全戸が加入する組織であることから上記のように全員一致、特定の立場をとれないことから当然のことだろう。ワンマンの会長も現れるがおおかたの住民の意思に反して動けばいずれはひきずりおろされる。ここでも自治会は民主主義的だと言える。

⑦ 自治会の資金(財源)はふつう会費が主で、事業収入などはあてにしない。自らが必要な経費は自らが賄うというあたりまえの自立精神で、税金の二重払いなどごねる人はまずいない。全戸加入の建前だけに、K町に見られるように弱者への配慮を行なう自治会も滋賀県には多い。

⑧ 自治会の行動原則は全戸対象であることから公平性を欠けば即トラブルとなる。NPO をパートナーとする場合このことを配慮できるものでなければならないが、行政ほどは厳格に考えなくても良いと思われる。

こうしてみていくと市民活動のように自由なテーマで自主性を発揮して好きなだけやれる可能性は自治会にはないが、地域の自治組織として必要な場合は地域ぐるみで取り組むことができる幅広い可能性を持っていると言えよう。

4. 小・中学校区での地域課題への取り組みと自治会

しかし、地域課題の内容によっては自治会の規模では少なすぎてできないことが多い。自治会は日常、顔の見える範囲での活動ということで、ざっと五十戸から五百戸ぐらいが一般的である。ボランティアなど市民活動の舞台は通常県域、市域、少なくとも小中学校区くらいである。そこで、小・中学校区を舞台に自治会活動を基盤にしたその連合体と市民活動を結んだ取り組みが行なわれている。ここでの自治会の課題は自治会が特定地域の範囲で構成されるが故の閉鎖性だ。

自治会と学区レベルでの自治会の区域を越える連合体とは同じ地域コミュニティといえども性格が違ふことをわきまえなければならない。しかし、閉鎖性を有する自治会ではあるが、自治会員としての意識を学区レベルまで広げて地域課題を考えることは不可能ではないだろう。実際のところ、文化祭、運動会、敬老会などの行事が行なわれ、それなりの一体感を醸成している。

K町の属するY学区での取組は各自治会で活動する課題別あるいは世代階層別各種団体をが集まった活動が主体で、自治会長会(自治連合会)は学区のあらゆる問題についての総合調整機関である。

滋賀県市町村振興課では平成12年度から学区単位のまちづくりの研究がすすめられており、知事が提唱される自治の五重奏(自治会、小中学校区、市町村、県、NPO)はこれをふまえている。平成14年3月には最終報告書が出るらしいので自治会活動と学区の取り組みの関係をどう組み立てられているのかに注目したい。

終わりにあたって

当たり前存在として人々の生活に組み込まれ、日常殆んど省みられることのない町内会ですが、地域の自治組織である以上、地方分権、住民自治、市民と行政とのパートナーシップを考えるなら飛ばすことのできない存在のはずなのに不思議に取り上げられることが少ないようです。タブーなのかもしれない町

内会、自治会に私たちは敢えて挑戦してみました。結果は、「部分にとらわれて大局的な見方ができていない、独断と偏見」に終わったかもしれません。

私たち敬天愛人班の研究に際し、K町の多くの方に貴重な時間を割いていただき、貴重なお話しをお伺いさせてもらいました。何度も煩わせた自治会長さんを始めとする頭役の皆さん、老人会、婦人会、子供会、PTA 役員の皆さん、後継者クラブ、自警団、園芸組合役員の皆さん、篤農家の皆さん、家族ぐるみで水産祭りのイベントを盛りあげておられた漁業者の皆さん、地元で生まれ育ち、地元で嫁がれたYさん大変ありがとうございました。一方的にお世話になるばかりで、私たちの取り組みの結果が皆さんにとって直接には意義あるものにならなかったことについてお詫び申し上げます。

しかし、私たちにとっては大変インパクトのある出会いであったことは、この報告にあるとおりです。「高いレベルでの民主的な自治がここにある」ことが少しは紹介させていただけたのではないのでしょうか。K町の自治の姿がこの報告書を読んでいただいた方に自らの自治会を見直し、地域の自治の力を高めたり、NPO との連携へのきっかけとなれば幸いです。

最後にそれぞれの今後についての思いを述べて終わります。

稲田：日本と世界の動きはテレビ、新聞で否応なく分かるのに近所のことが分からない。地域の課題を見出し解決していくには地域の一体感を醸成するのが良いと思うので、もっとお互いを知るための町内情報誌の発行を進めたい。また、自治会の持つ可能性と活動の活性化法、NPO との協働の可能性を何らかの実践を通じて探求していきたい。

伊藤：「K町の皆さんの実践」は、姿形の違う我が地域でも貴重な先進事例だ。住民の願いや、程度の差はあろうが地域への愛着を持っていることに変わりはない。一番感じたことは指導者の方々の姿勢。町民の信頼を得ながら、平衡感覚を持って献身的な活動をされている。研修で感じた感動を初心としてこれを忘れないよう心掛ける。

松井：宝もの探しや宝ものの作りに奮闘しておられる多くの人々との出会いから「理念と情愛の調和」の大切さを学びました。

今後は宝ものをわかり易い姿で地域の内外の人々に示す努力に加え、自治・市民活動・ボランティア等に誰もが円滑に携われるサポートシステム作りにも挑戦したいと思います。

青木：ライフワークとしての「交流」をこれからも続けて行きたい。

上坂：母に頼まれた近所へのお使いを妹に任せてばかりにせず、一緒に行く。地域の回覧版や火の用心の拍子木を持っていくときポストに入れず玄関まで持って行って手渡しをする。最近行ってなかった地域の神社にお祭りのときと初詣の時は行く。

ネットワーク 夢創



森口 和彦



鬼塚 孝治



南部 厚志



野田 博子



藤田 眞治



富増 力章



伊藤 孝子

住民の夢をかなえるまちづくり

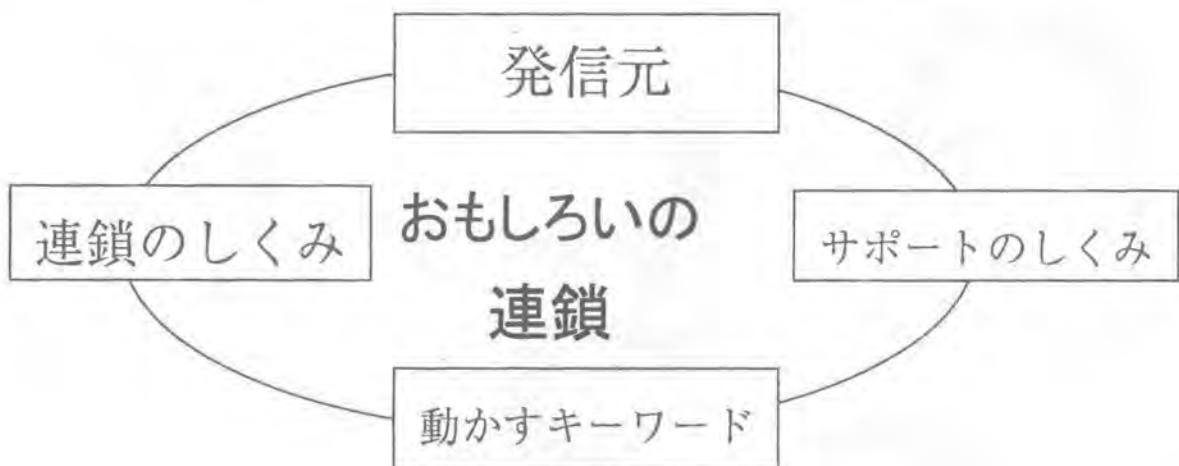
住民の夢をかなえるまちづくり

地域で“大バカ・小バカのネットワーク”をプロデュースするには……

成功しているまちづくりはおもしろい？

私たちのグループは、グループ分けの時に“個人の夢の実現”というテーマで集まりました。個人の夢の実現では、「おうみ未来塾」の地域プロデューサー養成というテーマにそぐわないので、「個人の夢をかなえるまちづくり」までテーマを広げ、“個人の夢をかなえるまちづくりとは、いったいどのようなまちづくりだろうか”というワークショップを行いました。

その結果、「自分の想いが形になり、夢が実現していく……。そこには、必ずおもしろさがあり、“おもしろいが連鎖していく”しくみが存在するであろう」という仮説が浮かび上がってきました。この仮説を元に作成したのが、以下の“おもしろいの連鎖図”です。



この“おもしろいの連鎖図”の発見によって、私たちのグループ研究は、「おもしろいの連鎖の仕組み」を見つけだし、自分たちの活動に活かすことに決めました。

「住民（個人）の夢をかなえるまちづくり」の根底に流れているものを探る……

次に私たちは、“おもしろいの連鎖図”の仮説をもとに、今までに、まちづくりに関して活躍した人をピックアップして、その活躍の根底にあるであろう「おもしろいの連鎖のしくみ」、「発信元」、そして、その連鎖をつなげていく（動かす）「キーワード」、そして連鎖が広がっていくことの「サポートのしくみ」を探ってみることにしました。

“おもしろいの連鎖図”と、その仕組みの中に、まちづくり活動で言われる“大バカ・小バカのネットワーク”というものが見えてくるだろうと盛り上がりました。

まずはメンバーおのおのが着目する人をピックアップしました。その中には、静岡での大道芸ワールドカップを始めた人や、環境活動の写真家、江戸時代の儒教家など幅広い人


が上がりました。この中から、近江八幡で活躍し、近江兄弟社・近江兄弟社学園の創始者である「W・M・ヴォーリス」に関して調べ、“おもしろいの連鎖図”の仮説が実証できるかを探ってみることにしました。

ひとつのまちをつくった W・M・ヴォーリス

アメリカから来た一人の青年であるヴォーリスが、なぜ100年前に近江八幡で活躍できたのか、近江八幡図書館での書籍調査やインターネットなどから詳しく探ってみると、私たちが注目した“大バカ・小バカのネットワーク”が機能していたことが、浮かび上がってきました。



そこでヴォーリスを取り巻く、吉田悦蔵、村田幸一郎、ヴォーリスの妻・満喜子などに注目し、吉田悦蔵の書いた「近江の兄弟」を調べたり、吉田悦蔵の息子・稀夫の妻「あひ」さんに聞き取り

調査を行ないました。ヴォーリス記念館館長の福井さんに  は、ヴォーリスのサインで、彼はいつもこれを「近江八幡は世界の中心」と説明していました。

は、ヴォーリス夫人の満喜子さんのことをくわしくヒアリングしました。そのほか、近江兄弟社学園の事務長の池田さんや、ハートランド推進財団の前田典夫（みちお）さんに、ヴォーリスの人となりに関する聞き取り調査をおこないました。

西暦	年齢	ヴォーリスの年譜
明治13年 -1880	0歳	10月28日、米国カンザス州レブンワースで、父ジョン、母ジュリアの長男として生まれる
-1902	21歳	カナダのトロントで開かれた学生宣教義勇軍の大会に出席。テイラー女史の講演に感動し、外国伝道への献身を決意する
-1905	25歳	2月2日近江八幡に到着。滋賀県立商業学校(現滋賀県立八幡商業高校)英語科教師となる。
-1907	26歳	2月8日、ヴォーリス宅にて最初のパイブルクラスを開く
-1908	28歳	京都三条YMCAの一室で、建築設計監督事務所開業(後のヴォーリス建築事務所)
-1910	30歳	建築家のレスター・チャーピン、吉田悦蔵と3人でヴォーリス合名会社設立
-1918	37歳	結核療養所「近江療養院」(近江サナトリウム、現ヴォーリス記念病院)を開設
-1919	38歳	子爵・柳末徳(ひとつやなぎすえのり)の三女、満喜子と結婚
-1920	39歳	ヴォーリス合名会社を解散し、W・M・ヴォーリス建築事務所と近江セールズ株式会社を設立。メンソレータム(現・メンターム)の輸入販売を開始

		旧大同生命ビル (1925) 設計期間中に関東大震災が起こり、より慎重な耐震的配慮を加えられてこのビルは完成した。華麗なデザインだけでなく、エレベーター、空調などの近代設備を備え、当時屈指のオフィスビルと言われた。
	『A Mustard—Seed in Japan』を出版	
昭和2年	-1927	46歳 軽井沢会の副会長に選出される
	-1934	53歳 近江ミッションを近江兄弟社と改称 出版事業部を独立させ湖畔プレス社を設立
	-1941	60歳 日本国籍取得、一柳米来留(ひとつやなぎめれる)と改名。ヴォーリス建築事務所を一柳建築事務所と改称
	-1947	70歳 自伝『失敗者の自叙伝』の草稿を起筆、昭和32年まで『湖畔の声』に連載
	-1957	76歳 7月、軽井沢でクモ膜下出血のため倒れ、近江八幡の自宅に帰り、療養生活に入る
	-1958	77歳 近江八幡市名誉市民第1号に推される
	-1964	83歳 5月7日、7年間の無言の病床生活を終えて昇天。5月16日、近江八幡市民葬と、近江八幡兄弟社葬との合同葬となり、遺骨は恒春園に眠る



近江兄弟社学園 (昭和6年) 左が教育会館、右は幼稚園舎。満喜子夫人が自宅での幼児教育を初めてから10年後、メンソレータムの創始者ハイド氏の寄付を受け、園舎が建設された。

上記・ヴォーリスの年譜で確認できるように、彼の業績はまさにひとつのまちを造ったといえるものでした。資料・聞き取り調査で明らかになったのは、ヴォーリスの業績を可能にしたのは、彼を取り巻く人とそのつながり、時系列をおった展開とひろがりによって、少しずつ積み上げられてきたものといえます。

私たちが着目した“大バカ・小バカのネットワーク”に照らしてみれば、実務面での責任者は吉田悦蔵で、彼の母は強力なスポンサーであったことから、吉田悦蔵が“大バカ”と“小バカ”の間に位置する“中バカ”の役割を担っていたこともわかりました。



吉田悦蔵氏

ヴォーリスは夢を語る人

彼は来日から20年足らずの間に、100名以上の信奉者(近江ミッションの会員数)を

得て、企業・病院・図書館・学校など多彩な足場を築きました。しかし、この業績は、ヴォーリズひとりによってなされたものではなく、彼の語る夢実現のために実務をこなした多数の人々のネットワークによるものでした。

近江八幡で始めた布教活動が広がりを見せ始めた矢先、仏教関係者の反発にあい、わずか2年で教師の職を追われました。しかし、この不遇の時代を乗り越えて活動が少しずつ広がり大きく花開いていったのは、ヴォーリズの人柄によるところが大きいと思われます。

カリスマ的偉大さではなく、広い視野に基づくあつい信仰心、積極的に仲間を求める人なつこさ、楽天的な明るさ、徹底的に人を許すやさしさ、大きな包容力、といった彼の人柄こそ、大きな業績を生んだキーワードでしょう。

その人柄と夢があって、まわりにそれを支える人のネットワークができ、そこに何事にも必要な「もの」と「かね」の要素が備わることによって、初めて近江八幡での広範囲にわたるまちづくりが可能になったのではないのでしょうか。

望ましい身近なまちづくりリーダーへのインタビュー……

ヴォーリズの調査・研究を踏まえて、グループの各メンバーが着目し現存する望ましい身近なリーダーにヒアリング調査を行いました。

基本的なヒアリング項目としては、

- 何をしている人か？
- どんなリーダーシップを発揮しているか？
- なぜ自分がいいと思うか？
- 人が寄ってくる理由は？

という内容にしぼり、各メンバーで聞き書きしたことをまとめてみました。

その詳しい内容は、“理想のリーダー”として、この報告書の中にレポートがあります。

夢を形にする“まちづくりリーダー”の条件とは？

望ましいリーダー像の聞き書きを行い、提出されたレポートを元に話し合った結果、以下のような共通点が見えてきました。

- 自分の目指すものへの明確なイメージがある
- 話すことが好き（社交性）
- めげない ⇒ 根気 ⇒ 継続
- 人への愛、やさしさ
- 人を生かす術（やる気にさせる）を知っている
- 組織感覚（実務能力のある人間を見出す能力）
- 任せきる器量がある



未来を創り出すヴィジョンが、“おもしろいの連鎖図”を創りだす！！

ここまでの活動で調べてきた望ましいリーダー像をもとに話し合った結果、ヒアリング調査したどんなリーダーも自分が実現したい明確なビジョンを持っている。そして、そのリーダーが“ビジョンと共に発するメッセージ＝情報”を中心に、そのビジョンを実現したい人が集まる。リーダーの元に人が寄ってくるのは、そのリーダーが必ず明確なビジョンを持っているためではないか。…ということが、おぼろげながら見えてきました。

そこで、私たちネットワーク夢想グループが当初仮説をたてた“おもしろいの連鎖図”に、“望ましいリーダー像”を当てはめるワークショップを行うことになりました。

生態系に見立てた“おもしろいの連鎖図”の作成

各自の聞き書きレポートを通じて見えてきたものを明らかにするために、ご自身もまちづくりで活躍されている京都工芸繊維大学の谷口知弘先生を講師にまねいてワークショップを行いました。

まず、“おもしろいの連鎖・発信元・しくみ・サポートのしくみ・動かすキーワード”に関して、ヴォーリスについて考えてみると、

ヴォーリス自身が発信元、ヴォーリスを支える信者と八幡商業の卒業生も発信元、自費で建物（学校・図書館など）を建てる、サポートの連鎖、キリスト教の生活的実践、神の国の実現、キリスト布教、信仰心、信者、人柄、よりよい明日を目指す、仲間づくり、情報誌「湖畔の声」、次の時代の先取り、新しい情報、まちづくりのビジョン＝夢、人・物・金・情報、人と人柄、サポートの仕組みがお金

などの項目が出てきました。

ここから、こういった項目をわかりやすく並び替えてみると、“発信元と動かすキーワードは近い”つまり、“発信元＝リーダー（人）”、“キーワード＝ビジョン”であることが浮かび上がってきました。

●ヴォーリスの調査や個人の聞き書きから見えてきたもの

ヴォーリスの事例に見る「サポートするしくみ」とは、ヴォーリスが周りに夢を語っていったから実現できた、人のネットワークではないだろうか。ネットワークの中心にいた吉田悦蔵は実務運営のノウハウや資金などの具体的活動をサポートしている。ヴォーリスは、リーダーとしてオールマイティでなかったが、周りの人を彼のためならという気にさせた。最近のリーダーはカリスマ的というよりコーディネート力が問われるとよく言われるように、リーダーは周りの人をその気にさせる未来を創り出すヴィジョンを持っていること、人に対する優しさ、任せたら失敗しても受け入れる度量があることが、キーマンとして一番大事なことではないだろうか。

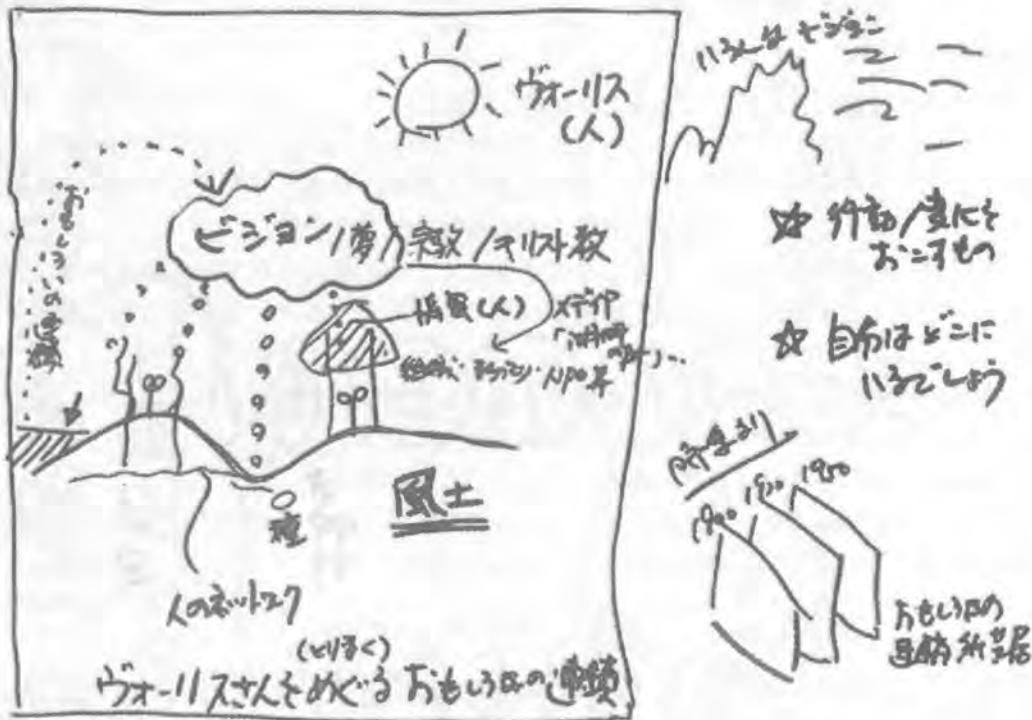
●ヴォーリスの事例に見る“おもしろいの連鎖図”をわかりやすく自然に例える。

ここまでの調査で分かったことを、下記のように対比させて図にしてみました。

太陽（ヴォーリス）……雲←→雨←→木・竹←→大地（土の中、地下茎でつながっている）

（種＝まちづくりに関わる可能性のある人、雨＝情報、芽＝まちづくりに対するこころみ、

大地＝（人物 金・・・肥料）、風土＝その土地の持っている潜在的可能性）



ヴォーリスさんを取り巻く“おもしろいの連鎖図”

“成功しているまちづくり”に存在する“おもしろいの連鎖図”から見えてくるもの……

ヴォーリスの事例における“おもしろいの連鎖図”作成をふまえて、各メンバーがヒアリングした“望ましいリーダー”の“おもしろいの連鎖図”をそれぞれ作成しました。当然ながら各メンバーによって連鎖図に違いはあるものの、全員の“おもしろいの連鎖図”に共通する特徴が見出せました。それは、“発信元＝リーダー（人）”、“キーワード＝ビジョン”があって、それを受け入れる風土があり、長い時間をかけて連鎖が可能となる、ということです。ここから“おもしろいの連鎖図”は、時間軸によって生成・発展していくことがわかり、「成長する“おもしろいの連鎖図”紙芝居」を作ってみました。

各メンバーの“おもしろいの連鎖図”と、「成長する“おもしろいの連鎖図”紙芝居」をこの続きに紹介し、そこから発見した考察を最期にまとめて見ました。

プロフィール

1954年大津市生まれ。写真家。子供時代を大津市尾花川ですごす。

競艇場の水際でトンボの孵化を眺めたり、川辺のヨシの茂みでたらい舟に乗ってトンボとりをしたり、田んぼのため池でゲンゴロウやタガメをつかまえたり、江若鉄道の線路ぎわでオオムラサキをみつけたりした少年時代の感動は著作「虫を待つ時間」や「里山の少年」に描かれている。

「自然の絵本」のまちづくり

20代から昆虫や身近な自然の写真をとる始め、写真集に「スカラベ」「世界昆虫記」「里山物語」などがある。東南アジアやアフリカにも、なんども出かけ、ひるがえって日本の特に湖西、仰木地域の風景に自分の原点を見つけたという。その仰木から志賀、高島、マキノにかけての風景を撮った写真集、前記「里山物語」で木村伊兵衛賞、毎日出版文化賞を受賞。

仰木の里山の一角にアトリエをたてる。そのときまでそこに植えられていたヒノキを伐採し、クヌギやコナラなどの広葉樹を中心とした雑木林にしてしばらくすると、虫や鳥たちの種類がとても豊富になったという。

人手の入らない原生林ではなく、人が生活する場として調和してきた自然の豊かさ、大切さを写真を通して訴え続けると同時に、里山保全の活動も始めている。

現在、新旭町を舞台とした「自然の絵本」のまちづくりに取り組んでいる。

この企画は、氏が何年も前からあたためていたもので、県下のいくつかの市町村に話を持ちかけていたが、新旭町長、海東氏の賛同を得て3年前から里山ジャンボリーなどの活動を始めている。

1年目は、オカリナ演奏の第一人者、ホソヤミカコ、2年目は、魔女の宅急便の作者、カドノエイコを呼んで、フォーラムを催した。

この活動は、自然をテーマにした絵本の博物館を中心にしたまちおこしを、ねらいとしたものである。科学や童話の専門家を編集委員に迎え、絵本作りに取り組むことで、文化面での知的向上を図り、活性化につなげたい、そういった活動のプロデュースの役割がしたいという。

この他にも大津市仰木の棚田を環境教育の場にと、里山ミュージアム構想を立てて市に提案したり、大津駅そばの町家再建にも積極的にかかわっている。

まとめ

聞いていて思ったのは、作りたいものへのイメージが鮮明にあり、過程がきっちりと頭の中できあがっていて、関係者に十分に時間をかけて根気良く説明できる資質が備わっているなあということ。もちろん努力や苦勞なしにそれが培われたとは思わないけれど、一度働きかけて反応がいまいちだとすぐ諦めてしまうわが身に引き比べてしまいました。

それと話を聞いていると、不思議と元気付けられること。共感を覚えること。ふっとヴォーリズってこんな人だったんじゃないかと思った。

彼がやることを自分ができるとは（そんな僭越なことは）考えないけど、広める手助けはできるんじゃないか、彼が大バカなら、自分は小バカの役回りができるんじゃないかと。

いま彼がやろうとしていることに何かの形でかかわれたらいいと思うし、滋賀の町づくりにどうい影響を与えていくのか、見守っていきいたいと思う。



里山保全
しがの文化向上

里山（ポリ）

里山物語 NPO

映画

里山



新旭町

自然の絵本
の館づくり

大津まちや
再建

アキノ町
里山保全

肥料
出版社
テレビ局
自治体

凡士
(ニース)

プロフィール

1961年 兵庫県姫路市生まれ、中学のときのケガで車イス生活。

地域で重度の障害を持つひとの自立生活を助ける自立生活センター「メインストリーム協会」の理事長を務める。毎夏、全国から障害を持つ高校生を集め自立生活の合宿体験を行う障害者甲子園を開催したり、10万人を集めた明石海峡大橋のオープニングイベント・ブリッジウォークの実行委員長を行うなど、多彩な顔とネットワークを持つ車イスの若きリーダー。

テーマは、いちがんとなること！

大学時代にヨーロッパ一周・野宿の旅に出たり、大阪-東京600キロを車イスで走破し駅のバリアフリー化を訴える「Try」をはじめするなど、バリバリの活動家。話をしているととても面白く、好きなことを自由にやっけてるけど、肩書きは、重度の障害があり1人では日常生活が出来ない人が、地域で生活できるサービスを提供する「メインストリーム協会」の代表。このあたりのギャップが、廉田氏の最大の魅力。その雰囲気にも多くの人が彼の周りに集まってくる。

メインストリーム協会の活動は、重度障害者の自立のための介護者探し、家探し、心配する家族の説得、仕事や生活費の相談、自立生活プログラムの提供サービスなどの他、介護の制度作りや障害者の人権擁護など多岐にわたっている。

最近、世の中の障害者観を変えていく活動をしているとのこと。今の日本では、重度の障害のある人に対する世間の見方は、「かわいそう」や「世の中のお荷物」という捉え方が本音の部分。しかしそういう捉え方は実際正しくなくて、環境さえ整ってさえいけばもっと幅広く活躍できる人がいっぱいいる。しかし世の中の制度や仕組みがそうになっていない。今はそのためのモデル作りをしたり、その必要性の話などを行っている。

とりあえずの目標は？と聞くと、障害者でこの地域（西宮）をあふれさせるために、地域で自立生活をする人を増やすこと、これは世の中を変えていくための前段階や、という発言は廉田氏らしい。

活動するうえで大事にしていることは、こういう活動を続けていくためには、みんながいちがんとなることで、そのためには、いろんな機会をつかまえて、絶えず話をしているとのこと。

このインタビューで、「どんな人でも、その場にいることによって役割を担っている。役割を担うのは、責任感を持ってその場にいることなんや。」という、彼にしては今までにない熱い語り口は、とても記憶に残りました。

まとめ

理想のリーダーとして、たえず私の心の中にあっただのが廉田氏でした。今回、夢創グループのインタビューをきっかけに、普段聞けないいろんな話が聞けました。漠然と感じていた彼の魅力が、今回おぼろげながら解った気がしました。それは社会に対する明確なアプローチの方法を持っていながら、そのことを説教くさく話すことなく、普段の何気ない会話の中で、こちらがふと話したときなどに、普段一番伝えたいと思っていたことを語っていたんだなど、そう感じました。「いちがんとなる」「役割を担う・創る」「世の中を変える」、今回のインタビューは、自分が求めていた答え探しのインタビューであったと思いました。

理想のリーダー・・・中村 ^{はじめ}元 氏

南部 厚志

プロフィール

1956年 三重県嬉野町生まれ、鳥羽水族館 副館長、国立三重大学非常勤講師
自らを「地球流民」と名のる

*地球流民(るみん)・・・ビーチサイドバーのジンに青い地球を透かし、ピアノバーでスコッチをかたむけながら地球の未来を考える、ちょっと不健全な地球市民。

市民参加のまちづくりが好き

ほとんど道楽の世界で、「伊勢志摩NPOネットワークの会」の会長とか、まちづくり塾「でもくらしちずん」を仲間たちと主宰している。昔は、青年会議所でウルトラマンのごとく頑張った。今は、弱くてもいいから毎日みんなで頑張る「ウルトラ警備隊」を作ろうと思いついた。

力まかせのまちづくりもいいけれど、みんなでゆっくりとやるまちづくりも成果が上がる。地域主権で必要なのは、市民・行政・企業がそれぞれの力を発揮して、未来の公共心を育てていくこと。愉快で、苦しくて、ワクワクする、そんなまちづくりを、みんなと一緒にやっていきたい。

まちづくりって、マジでやると結構苦しいし、時間もお金も食うし、ちょっと有名になると次から次へと頼まれるし、陰じゃどっかで嫌われたりもするし、大変ではあるのだけれど、それがワクワクするし、ドキドキするし、ボクの人生を満足させるには、お金や名誉よりもはるかに価値のあるもので、これはもう、「道楽」としかいいようがない世界ですね。

そして、そんな道楽仲間という時間は、世代を越えてとても楽しい時間です。

自分ができることはしようと思った。これって、デモクラシーの基本だと思う。「個人でできることは個人です、個人でできないことをコミュニティーです。」から始まって、そこからコミュニティー→市→県→国と小さい単位が常に主になる。早い話が、一番最初の個人はもちろんのこと、コミュニティーの部分までは、ボクたちがしなくちゃならんわけです。それをお上に頼ること自体がすでに間違っている。

だいたい、市民参加だとか市民主導だとか、行政と市民そして企業との協働だなんて言われている時代だから、市民の中にこそ社会活動家がいるべきなんですね。

まとめ

僕が「中村元氏」に理想のリーダー像を見たのは、まちづくりを本当に楽しむ心の余裕の中で「道楽」と言い切ってしまう姿勢にあります。かって中村氏は、ウルトラマンのごとく青年会議所運動にまい進してこられました。正義の味方のウルトラマンは、ウルトラ警備隊がいたからこそ、やっと正義が守られたとも話してくださいました。まさしく僕が思う「大バカの周りに小バカが集まるまちづくり」と共通であると感じました。中村氏の著書の一説に「めだかたちのデモクラシー」「ニワトリたちのデモクラシー」「サンタクロースはやめられない」などがあり、これからのまちづくりには、生活者が自然体で活動する積極姿勢が必要なことを面白く、わかりやすく表現されています。中村氏の考え方は、まちづくりと言うより「まち育て」と表現した方が適当なくらい自然体であります。

プロフィール

職業：配置売菜、農業

昭和15年5月11日辰年生まれ。県立高校を卒業して、家業の配置売菜に勤める。

若い頃は、遊び人で友達と麻雀や賭事をやったり、深夜の午前様も相当あったようである。

挨拶もろくにしないで、風評や風聞も必ずしも良くはなかった。

ところがそんな彼が、少しずつ変化を見せ始めたのは、結婚して子供ができてからのようである。

本業である菜業会の会合には、消極的で参加も少なかったとのことであるが、若さで熱が入っていなかったからと思われる。

「どうやな、みなさん」みんなと共に歩むまちづくり

注目すべきは、彼の地域でのその後の活躍である。

彼の積極的なリーダーシップが発揮されたのは、彼の広い知識と才能によるものである。

例えば、洗濯機のモーターを取り外して足踏み式の豆の脱穀機に取り付けて、貸して欲しい人があれば、無償で貸与していた。

社会全体が生活や暮らしにゆとりや豊かさが生まれ始めた頃で、これまで隣組で旅行など思いも寄らない頃、隣組の旅行を言い出した。「どうやな、みんなで3万円もあればできるやろ。一日旅行でもしようやないかな？」と。あたりの軟らかいソフトで暖かみのあるお誘いである。

奉仕作業における草刈り機のはなしは、彼の人柄と人物像を端的に表明する話である。

当時、田圃を持つ家によりやく草刈り機が普及し始めた頃で、地域の草刈り奉仕作業は、当時はまだまだ鎌が一般的且つ当たり前であったお。草刈り機械のある家でも、地域の人足作業となると、「鎌」を持つての出役である。組内は農家の家が多く、彼はそうした地域での作業の手法に大いに疑問を抱いていたようなのであった。

「わしも出すさかい、奉仕作業の時くらい草刈り機のある家は持つていたらどないやな？」

「どうやな！みなさん！」

彼の『自分も出すから』との私心のない言葉で、皆が持ち寄ると決まった。

組内の班長が当番で若手になった時、米輸入反対の要望はがきを大臣宛に書く話が出た。組内の長老が自分で書いとけと若者を揺さぶった。

彼はそこですかさず言い出した。「そんなことぐらい、みんなで書いてやったらどないやな！」もちろん、その場で書き始めたのは言うまでもない。

まとめ

時代を見据えた地域像のありようを、誰よりも先駆けて、誰よりも公平公正にあるべき姿に塗り替えた人物である。彼は決して一人歩きすることなく、みんなの意見を聞く姿勢を必ず示している。

みんなが気がついてもしゃべれないとか、人のやっかみや意地悪にもフェアな目でものを見て、巧みな言い回しで誤解や妬みを悟りに導かず巷にいるタイプの、しかし底力のある人なのである。



226.12



中華

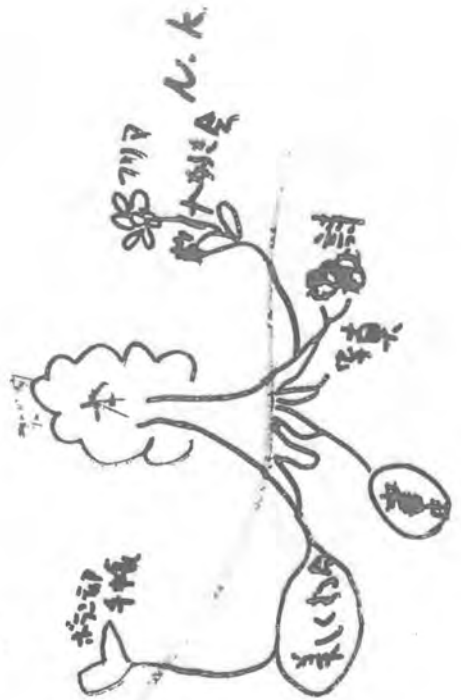
1970 H.K. 1. 16 (w)

芥川

まわりにしよう
 楽しく遊ぼう
 川を中電ろう

芥川全集
 全10巻

芥川全集
 全10巻



芥川

首相公選の実現

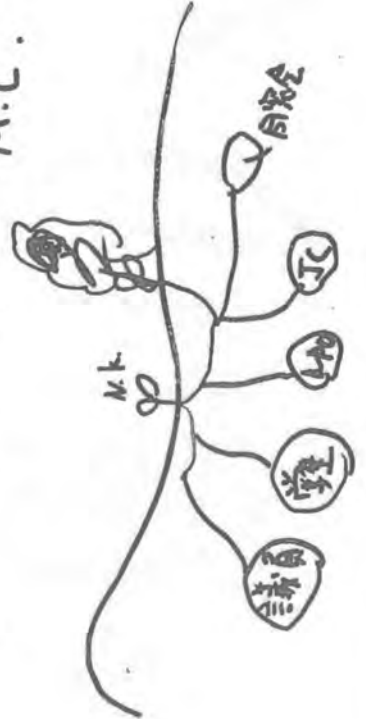


芥川

読書大会 (全巻)

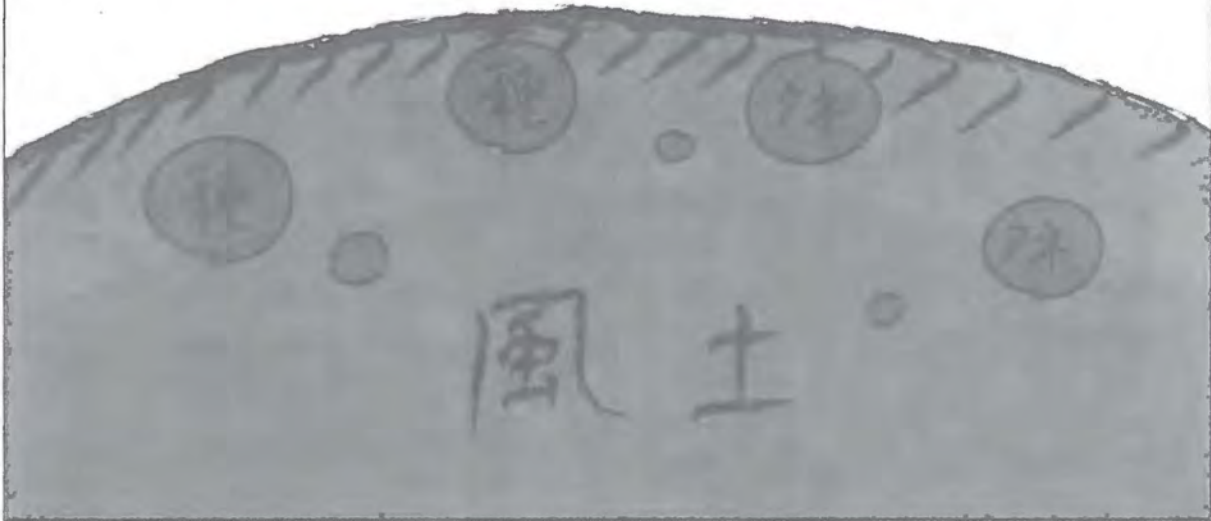


新聞
 全巻にはどこまで
 全巻はく
 M.L.

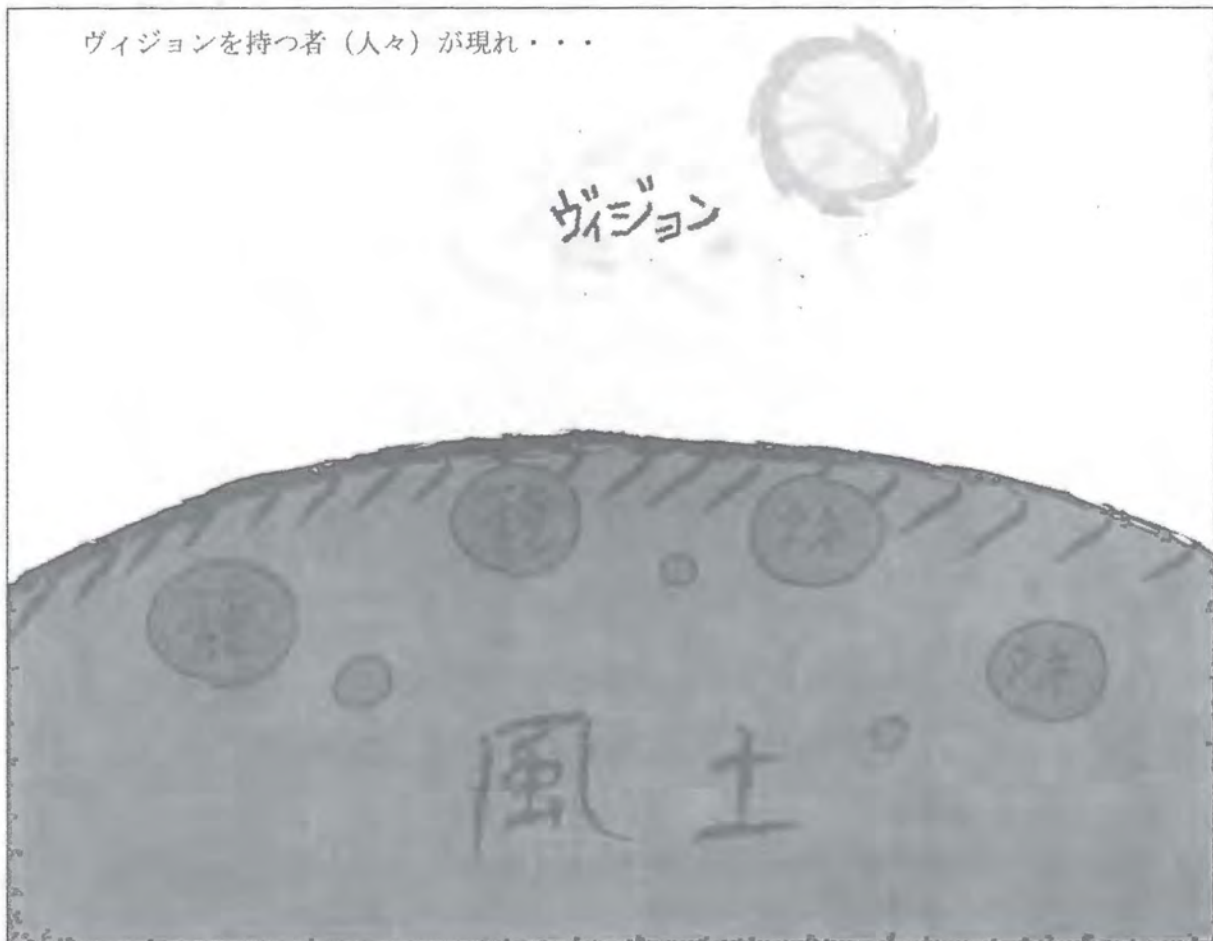


住民の夢をかなえるまちづくり“おもしろいの連鎖図”紙芝居

まちづくりのタネは、まだ眠っている・・・



ヴィジョンを持つ者（人々）が現れ・・・



ビジョンをみんなに語りかけ・・・

ビジョン

情報



まちづくりの芽が伸び始め・・・

ビジョン

情報



風土に根づき成長していき・・・
中には枯れるものもあるが・・・

ヴィジョン



ヴィジョン

さらに根をはり
開花し、新たなタネを
飛ばす・・・

連鎖のしくみもお
タネ



「“おもしろいの連鎖図” 紙芝居」から浮かび上がる連鎖のしくみ

私たちのグループ研究は、「自分の想いが形になり、夢が実現していく・・・。そこには、必ずおもしろさがあり、“おもしろいが連鎖していく” しくみが存在するであろう」という仮説から、“おもしろいの連鎖図”を発見し、その中に存在する「おもしろいの連鎖の仕組み」を見つけだし自分たちの活動に活かすことを目的にはじまりました。研究を進めてきた結果、“おもしろいの連鎖図”で想定した“発信元”、は“リーダー（人）”であり、“キーワード”は、“未来を創り出すヴィジョン”であろうということが確認できました。

「サポートするしくみ」は、リーダーの語る夢の世界を実現したいと思った“人のネットワーク”であったと思います。そのネットワークがあって、はじめて夢＝ヴィジョンを現実にする“お金とモノ”も生まれてきます。この目的を持った“人のネットワーク”が構築できて、最初は夢として語られていたことが、目の前の現実になると想定できます。

“人のネットワーク”に参加する人達にとって、最初は夢として語られていたことが現実となる、このことがとても面白いのだと思います。そして、一つの夢が達成されることによって、さらに人が集り、より大きな広がりをもったネットワークができ、次のモノが生み出されてくる。これが“おもしろいの連鎖のしくみ”ではないでしょうか？

「“おもしろいの連鎖図”」を使って始めるまちづくり

私たちが暮らしている、それぞれの風土にまちづくりのタネは眠っています。誰かが問題意識に目覚め、行動を起こそうとすると、わかりやすく人に伝えるためのヴィジョンが生まれ、次にそれを人に話し少しずつ伝えていく。つまり情報の発信です。必要なのは、根気や努力と、無駄と思わずにいろんな方法を試すこと。こうして共感する人が増えていけば、ネットワークが芽生え金やモノのサポートを得て、ネットワークシステムが構築される。その結果ヴィジョンの花が咲き、その実はまた新たなまちづくりの肥料になっていく。

大切なのは、“おもしろいの連鎖図”の、すべての条件が最初から整っていなければダメということではなく、自分たちの活動で足りないのはどこか、を考え補強していくことができるということです。けっして、突出したリーダーがいなくてもいい。リーダーがしっかりしていなければ、その部分をおぎなえる人材を・・・。金がなければスポンサーや、助成金申請、あるいはフリマやバザーでもやってみる。大事なのはヴィジョンを伝える努力、口ベタならおしゃべりさんを引きこむ。大切なのは、同じ“ヴィジョン＝夢”を実現したいという人のネットワーク、短所をみないで長所を生かす仲間作りだと思います。

そうして出来た“大バカ・小バカのネットワーク”を“おもしろいの連鎖図”という形にあてはめて動かしていくと、決して突出したリーダーがいなくても、まちづくりは可能ではないでしょうか？大事なのは、みんなで創るしくみ！づくり。つまり、誰でも動かせるまちづくりのネットワーク・・・私たちのグループは、この1年間の研究で見つけたこのノウハウを活かして、まちづくりの実践をしていきたいと思っています。

個人 の ページ

～それぞれのおもい～

写真 or 似顔絵 	氏名 青木 伸子	No. 1
	グループ名 敬天愛人班 天を敬い、人を愛する心	
	入塾にあたって 下記に記す	
	卒塾にあたって 下記に記す	
<p>入塾時にあたって～卒塾を迎えて</p> <p>2年前、「ボランティア・コーディネーターを目指して」というタイトルの応募動機作文を書いた。そこには、仕事でも、生活でも興味を持っているマイテーマ「交流」について書いた。その頃は、まだ、NPO のことも知らなかった。市民活動にどんなものがあるかも知らなかった。ネットワークセンターのことも知らなかった。初年度は「おとなしい青木さん」というイメージをもった方も多かったと思う。自分でも、何をしゃべったらいいのか、さっぱりわからないまま、研修が終わっていった。でも、徐々に慣れていった。人の顔と名前が一致して、家のことや仕事のこと、住んでる所のことなど、研修を重ねるたびにみんなを知っていった。そして、しゃべれるようになっていった。</p> <p>未来塾で様々な先生に出会った。理論だけではなく、実践的な研修にいつもあつという間に時間が過ぎていった。プレゼンの方法や仲間を作る方法、合意形成の方法、町づくりの考え方、どれをとっても、未来塾だけでは終わらないものでした。</p> <p>2年目は敬天愛人班で「まちづくり」を研究することができた。5人の仲間と担当の川勝さん、ほとんど毎週水曜日の夜に集まってたくさん話した。北山田の方には町内会について教えてもらった。水産祭りや農業者宅の訪問、老人会見学など温かく迎えてもらった。</p> <p>幡さんにメルマガの登録を教えてもらった。困ったことがあったら「永野さん流考え方」に立った。伊藤さんと一緒に老上小学校へ地域協働学校の見学へ行った。川勝さんにパソコンがウイルスにやられた時お世話になった。こんなにもパソコンが使えるようになったのも未来塾のおかげです。飲みにケーションも楽しみました。</p> <p>最初に描いていた自分のイメージにぴったりくる「CS 神戸」も知った。いろんな人といっぱい交流できた。</p> <p>まだまだ入り口にいる私ですが、これからも興味を広げ、仲間を広げ、実践の機会を作ります。</p>		

写真 or 似顔絵



氏名

伊藤 孝子

NO.

2

グループ名

ネットワーク 夢創

入塾時の思い

環境問題に対し、協同作業の緒口を探り、中々ネットワークを得たい

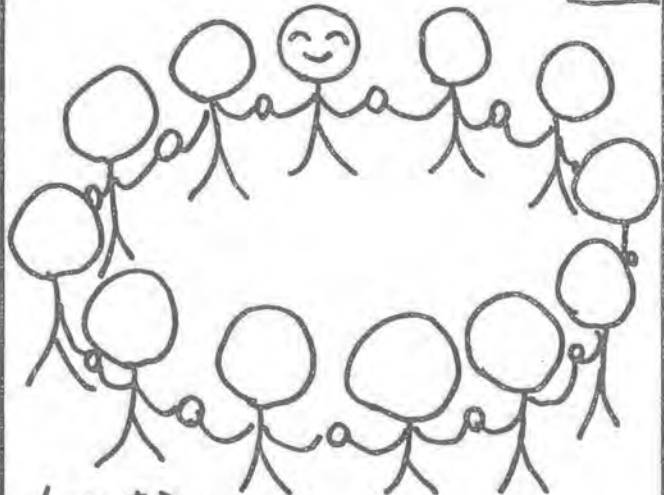
卒業にあたって

得られた人脈は貴重だと実感。やっぱり迷い、悩みながら、ここからボクボクと何かをしていくでしょう。

アドバイスされたり、相談したりできるって、とてもうれしい!



いちばんうれしかったのは... 1



人の輪が広がったこと。

2年間ありがとう 4
また会おうね!



滋賀県中にみんなに仲間がいて... 2



写真 or 似顔絵 	氏名	伊藤正則	NO. 3
	グループ名	敬天愛人	
	入塾時の思い		
	卒塾にあたって		

・当時の思い： それまでの仕事を通して、ボランティア、市民活動なるものを見聞きしてきたが、よく理解できないため、その実際と組織運営のノウハウ、又、諸外国での歴史・実態等を学びたいとの衝動から申し込み、みなさん方の仲間入りをさせていただきました。


・卒塾にあたって： 新しい世紀になり、早1年余、景気回復の機運は未だ見えない。加えて少子高齢化が加速する我が日本国。閉塞感漂い、明るい展望が見えてこない。その中で自覚ある市民が様々な分野で自立していこうとしている。この現象は社会を変えていく原動力の一翼を担っていくと実感している。

2年間、研修の機会に恵まれ、キャラクターをたくさん持ったみなさん方と一緒にあって、今までとは違った経験をさせてもらったことに感謝し、これから地域で地道な市民活動を実践していく思いを強くしている。

塾生のみなさんもこれから多方面で活動されていくであろうが、絆を大切にし、実践を通して交流を深めていけたらと思っている。

お世話いただいた皆様方に厚くお礼申し上げます。

ありがとうございました。

写真 or 似顔絵 	氏名	稲田 秀明	NO. 4
	グループ名	敬天愛人	
	入塾時の思い	下記の前 半	
	卒塾にあたって	下記の後 半	

塾生応募にあたっての抱負

今後取り組みたいと考える活動

- 1 地方分権の第一ラウンドとして地方自治法の大改正が行われた。そこで、住民の自己決定権の拡大を支える市職員のあり方を構想したい。
- 2 人々がそれぞれの思いに忠実に行う多様な諸活動が花開くための環境はどうあるべきか、また、どう作るか構想したい。
- 3 行政の仕事はあらゆる分野に広がっているが、人々の多様性を最大限に尊重する立場から思い切ったリストを構想したい。
- 4 このリストの実践過程と人々の多様な諸活動との「からみ」を構想したい。

その理由、動機

① ここ数年来、仕事の面でも同僚との関係でも、また、私生活の過ごし方も自然体で生き生きと自分の思いに忠実に気持ちよくやってこられたと思う。それまでの人生でいかに沢山のどうでも良いことにこだわり勿体ない日々を送ってきたか。もはや51歳になってしまったがこれからの人生しっかり生きたい。

② 「全体の奉仕者」である私は草津市民がよりよい人生を歩むために出来るだけのことをするのが仕事だ。就職(昭和46年)以来の私と私の家族の生活は草津市民の懐で支えられてきたが合計いくらになろうか。草津市民にとって私を雇って良かったと思われる存在でありたい。

③ 自分の経験を引き延ばし考えると、「人々がそれぞれの思いに忠実に行う多様な諸活動が花開く」ことが最高の価値であり、それを阻害する制度や行政の諸活動は排除され、保証するものは擁護されなければならないとかがえる。

卒塾にあたっての抱負

1. 「住民の自己決定権」などと定義不能かつ無意味な言葉を、今から見ると「格好悪く」使った自分が恥ずかしい。取り消したい。他の項にもあるが、塾生に合格するための受けねらいの作戦やったかな？
 2. やらうと思えばできる環境が今の時代にはある。多様性の発揮はいいのだけどまとめはむつかしそう。構想はできるか？これからも考えていく。
 3. 4. 行政の分野をかなり減らせるだろうが、後戻りと受け止められたのでは不可能だ。住民自治をどこまで深められるかがポイント？実践しながら考えていきたい。
- ① 塾生の皆さんとの歩みは結構いい経験が重ねられておもしろかった。「いい年してこの人は何や！」とお叱りの皆さんには申し訳なかった。「なにせおくて(晩成)なもので」と、これからも恥をかき捨てていく。この2年間も結構充実していた。本も読めたし、段々よくなる法華の太鼓。
 - ② 帳尻を合わせるには残りの時間が少ないので、もっと加速度を上げていかないとだめ。
 - ③ 当時ぞっこんだったある構造主義生物学者の影響だ。その後、原理、理念で動く「ろくなことにはならない」と学んだ。人間はいいところばかりの存在でも、悪いばかりでもなし。

運営委員の先生方、ネットワークセンターのみなさん、塾生のみなさん ありがとうございます。

写真 or 似顔絵



氏名

奥村 恵津子

NO.

5

グループ名

く、い、い、じ

入塾時の思い

「地域の町づくり」のプロデューサーをめぐす。という事に、
大変な不安と緊張があり、ウロウロしていました。

卒業にあたって

目的を一つにしたすばらしい仲間を支えられ、やりこま
ました。「く、い、い、じ」の一員であったことを誇りに思う。

自分が「選んだ」この場所を
回さなければならぬ歯車を
ゆっくりにゆっくりに動かします


流れる川の生き物を見守り
土に生きる者の仲間となり
結ばれた縁を大切にします

何時、何処にあっても
人は頑張ります
今を大切に生きていきます

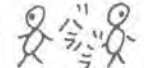

私も手を動かし足を運んで
この地球のこの未来を歩みます

	名前 鬼塚 孝治	No 6
	グループ名 ネットワーク夢想	
	入塾時の想い まちづくりプロデューサーになるための知識とノウハウを身につけたくて	
卒塾にあたって みらい塾の在塾期間に、いろんな経験をし失敗も含めて貴重なきを共有することができました。これからも、ここで得たものを活かして、自分の夢を切り開いていきたいと思います。		



写真 or 似顔絵 	氏名	こうさか 新糸会子 上土反 新糸会子	NO. 7
	グループ名	敬女天愛人 班	
	入塾時の思い	みんなと集まれば何かできるのかなあ くらしやすくなるのかなあ	
	卒塾にあたって	↑ そのためには「一人一人のおもい」 が大切でそれが集まれば「強いんた!!」	

土地域のつながりはいままじ土地域「金一本」をひくくめて見ようとしても「分かんなくいかも」と思いうようになりまして「一人一人が糸をびついて、そのあつまり、というものが「土地域」なのですね。

人と人のつながりは  木葉々なのかな
考えられますが糸は  (→) がいいなあと思えます。



月日の糸まつのは本当に早いんですね。入塾したての頃は2年失なんてまだ「まだ来ない」と思っていました。

入塾式の日、集まった人を見ると大人の方が「おは!! (私も2キぞはありましたか...)」とさうとり帰った方がいいのでは、なんて考えたしまいました。式の夕方に班で集まった日寺にはみなさん話し出すと止まらない... (これは今もですか) しっかりしておられるなあ、なんと「か」近寄りたいいなあと思っていました。

けれど「機会がある」といってお話をしているとみなさんおんおん、鬼気り目的なああと感じるようになりまして。人生糸馬余のまじまじ、少ない私の言語も一生懸命にきこうとして下さったこと、一生懸命 想いを語るして下さったこと、とてもとてもうれしくて、はげみになりました。本当にみなさんありがとうございました。



未来塾の
みなけま

上土反糸少糸会子

敬女天愛人班 大女子会でした。

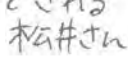

班長としていつも一生懸命ひはら下された班長: 米沼田さん
人をイヤな気持ちにさせず「しっかり反対意見を言う 青木さん」(お目付け役?)
「ただけ言われて...」といふから「言いつくせない 土域への想い」をもち寄りしようとする
きつと敬女天愛人班、K田Jとはちがう面をもつところにいま、おどろきながら  松井さん
学べることをさがし糸をけておられた伊藤さん
去年も今年も同じ班で、そのするどい視点、にはいつもおどろかせてもらった 西田さん
自画自賛中の 私たちをしっかりとみそほが支えて下さった川月券さん
本当に楽しかったですね。ありがとうございました。

写真 or 似顔絵 	氏名	金野弘子 Hiroko Komuro	NO.	8
	グループ名	くいいじ		
	入塾時の思い	地域で活動した経験に基づき ネットワークを広げることが入塾		
	卒業にあたって	くいいじグループ研究に於いて実践継続 ネットワークの大切さ情報の大切さを知る		



2000年6月 塾長の言葉に 学業時代に
戻った様に 希望に胸をくう事と輝いた
気持ちで 活動開始
講義 ワorkshop 県内研修と
いろいろの勉強をさせようとした。
未来望んで得たい情報の
地域に戻り 私たちがつくりたいメンバーの
情報提供 コミュニケーションが重要だった。

2001年 食がはぐくむ 未来の首を絞める 6人の
グループに2くいいじが発足
私は昔からの直会に視点を置き 食の研究、滋養の食の歴史
味噌とのかかわりに対して勉強と興味をいだき出した。
世代を越え 未来可能な伝統食に発展させるグループの研究に
家族の入院手術、いろいろの事情でグループに参画出来た時
グループの皆さんに支えられ 今度は事を断ることに。
このからのくいいじグループの思い、私の思いは
未来望んで経験した事を生かして ネットワークを広げよう
皆さんと直会を大切に
今後 地域活性化に向けて頑張りたい。

写真 or 似顔絵



氏名

高野 吉隆

NO.

9

グループ名

ふれあい ビレッジ 夢番地

入塾時の思い

私の出身地 湖北、びわ湖への思いを滋賀県内各地域の人に伝えたくて

卒業にあたって

早く過ぎてしまった二年間でした。思った事が充分出来なくて残念です。

私、若くは頃、自分の仕事のおかげで、地域での行政、自治会活動に関わっていく内に、政治的な事に関心を持ち、時には、仕事、家庭をも顧みない程に勢いよく走り参りました。しかしある時大変な事があり、挫折を致し、上記の事と決別を致しました。その後神戸の震災があり、人の心に向き合える、社会のため、地域のため、何かしなければという思いが日に強くなってきました。そんな時我が町、びわ湖で21世紀整、募集があり、私が深く関わったものは、これだと思っ、早速参加致しました。その後一年間過ぎ、21世紀整のメンバー3人で「びわ湖」という所づくりグループを作りました。びわ湖の宝島である「竹生島」をキーワードに、いろいろな活動を展開しました。その一環として、未来整に参加しました。県内で私達と、思いを同じとする多くの人々と知り合えたと思っ、ガッツリしました。湖北、湖南、湖東、湖西の地域差、風土差、時には収束された気になります。でも、受け継ぐものは長いので、再度挑戦します。今後共におくお願ひします。



未来の

今迄の双子に


未来の

経済界の青年部より入塾させていた。これは「水」の地域で「株」の活動をさせたい。共に関心を持っていただき、今後、自分の活動に生かして欲しいという想いが「ありました」。商工会青年部を任じ、いっかの団体で、より責任ある役職に就いた事に加えて、仕事の中で「先駆者期」を越え、また家庭に於いては「理想の二世誕生」と共に経済の二年間となりました。その中で「おなか」が出席して下さり、「おなか」は「おなか」が大変「迷惑」を又かけました。今後は「未来塾」で得た経験を生かし、積極的、活動的に取り組んでいきたいと思います。

氏名	富田力孝
カネノナ	カネノナ
入塾時の思い	「おなか」に「おなか」を「おなか」で「おなか」したい
卒業にあたって	新たな挑戦が「ありました」と「おなか」を「おなか」に「おなか」したい



写真 or 似顔絵

写真 or 似顔絵 	氏名	ながの まやこ (永野 麻也子)	NO.	11
	グループ名	くいいいじ		
	入塾時の思い	よぉ〜し.やるぞ! 何を...?		
	卒塾にあたって	はあ...。		

これが 皆さまのお目にとまっている頃、永野は {志賀町町議会議員} です。
 {フツ-の町民}

(不要な方を削除してね。)

せっかくパソコンが
 使えるようになったのに...
 フォリンターのバカ!!!

結局、手插きが
 好きなのです。



注目!!!

- 未来塾に参加して、うれしかった事...
1. 十四代を呑んだ (楠さんサンキュー)
 2. 愛犬ジローの後肢が動く (鬼塚さん感謝)
 3. 中国の餃子を食べた (川勝さん多謝)
 4. 知り合いが急増
 5. ホームページまで作っちゃった!
 6. 家族が「母不在の休日」になれた (あきらめ?)
 7. 父の帽子のもらい手がみつかった
 8. 志賀中でまます有名になった (うれしくねえ...)
 9. 「みそ」に詳しくなった
 10. 町議に立候補する決心がついた (ほんとか?!)

ラジオに出た。新聞に載った。あっちこっちに行った。勉強した。報告書を作
 らされた。泣いて笑ってケンカもした。環境一色の人生が大きく変わろうとして
 います。お世話になりました。& これからもよろしゅう!

ヒトは、満足しちゃうと先には進まない。

そんなふうに思います。

♪あれもしたい、これもしたい、

もっと、もっと、したい...♪

そんな心境です。



♪ハクリだ!
 ドクロだ!...といわれたけれど、
 「くいいいじゅん」です。



PRコーナー

“でいりー麻也子” みてねの
<http://www.cable-net.ne.jp/user/nk115810/mayako/m-index.htm>

写真 or 似顔絵



氏名

中原 由香里

NO.

12

グループ名

ふれあいビレッジ 夢番地

入塾時の思い

地元山で活動できる人になりたい!!!

卒塾にあたって

みほさんに会えたことが一番の収穫でした。

みほ年間を振り返って

滋賀と全く関わりがなく、志望動機も「地元のために」というのがみらい塾に参加出来たことを大変有り難く思っています。

最初は滋賀について何も知らず不安も多かったです。みほさんがフーフウ等に教えて下さり、又琵琶湖一周にも連れて行って下さり、滋賀に対する愛着は日に日に深まりました。

滋賀でがんばっておられるみほさんに接しはから思ったことは「私は自分の地元について何も知らず」ということでした。地元でどのような人が、どんなことに

取り組んでいるのかを知り、その人達と一緒に自分が何か出来るかを、これから地元に戻ってしっかり考えたいと思います。そうした時に初めて、みほさんのお話(特に愚痴)の真意が分かるのでしょうか!?

又みほさんに3Dバイクをいただくようなこともあると思います。関西にもちょくちょく遊びに来ますので、これからもどうぞ仲良くして下さいませ。山口にも遊びに来て下さいね。ありがとうございました。

ちなみに.....

御存知の方も多かったのでは?とてうれしかったのですが、私の生まれ育った柳井はここです。



そしてこれは

郷土民芸品の金魚ちゅうらんです。

おいでませ、白壁のまち柳井人!



	名前	南部 厚志	No 13
	グループ名	ネットワーク夢想	
	入塾時の想い	生活者主体のまちづくりを実現するために、ネットワークづくりの手法を身に付けたいと思った。	
	卒塾にあたって	途中自らの選挙なども有り、参加できない事が多かったが、多くのまちづくりを目指す仲間と知り合い、夢を持ち、夢に向かう事の大切さを再認識できた。	
声も体も態度も大きい南部です。			

こほく夢デザイン

ゆめ

自分たちのまちは 自分たちが自然体でつくる
生活者全員で取り組むまち育てを実現するぞ

写真 or 似顔絵 	氏名 幡 郁枝 (はたいくえ)	NO. 14
	グループ名 くいいじ	
	入塾時の思い 未来塾に参加したとき、どちらかというと傍観者的な感覚でした。ここで知った人や情報を仕事に使ってやろう、ネットワークを広げよう、という色気だけで。	
卒塾にあたって でも、食をテーマに決めた時から、どんどん自分が「くいいじ」の活動に入り込んでいきました。未来塾が「自分化」されていきました。		

「くいいじ」に関わっているうちに自分自身の大きな方向性まで見出すことができました。

これから、**発酵食ライター**として、お酒のこと、味噌のこと、その他の発酵食品や、それを作る人、食べる人、食べさせる人のことなど、面白いことを追求して書いていきたいと思えます。

2002年3月、**利き酒師**の試験を受けます。

食に関するモノを書く仕事 (WEB・チラシ・パンフレット) や企画なら私まで！

私の参加している、情報NPO紹介です。応援よろしく願いいたします。

びいめ〜るの活動

県内全域に在住する20代~40代女性ネットワークで、滋賀の女性がステキにGENKIに暮らすため&一歩を踏み出すきっかけを作るための情報を各種媒体にて発信中。

- ・フリーペーパー「びいめ〜る」発行(無料・隔月B5版12P・県内全域2万部)
- ・インターネットホームページの運営 <http://www.biwako.ne.jp/~bmail/>
- ・週刊メールマガジン&iモードにて地域情報を配信
- ・各種セミナー・イベントの主催 (パソコンセミナー、フリーマーケット等)
- ・『滋賀でステキに暮らす本』1999年9月発行 ※滋賀県書籍売上週間BEST 2
- ・『子どもとでかける滋賀遊び場ガイド』(メイツ出版)2001年4月発行
- ・『水となかよく遊ぶ本』2001年7月発行

びいめ〜る企画室


〒520-3022 滋賀県栗東市上鉤116-2 車整協ビル2F

TEL.077-554-1774 FAX.077-554-1792 URL. <http://www.biwako.ne.jp/~bmail/>

見て聞いて参加する情報発信番組

- ★毎週月曜 18:00~びわこ放送おるるぶびわこ「マンディ・マムディ」★
- ☆毎週火曜日びわこ放送 12:00~「レディースチャンネル [っち。]」☆
- ☆☆☆毎週木曜日 FM滋賀 9:00~「びいめ〜るからの耳寄り情報」☆☆☆

紙面・メルマガ・HPバナーなど 広告募集中！

写真 or 似顔絵 	氏名	馬場 和 一	NO. 15
	グループ名	くいいじ	
	入塾時の思い	市民活動って、なんだろう？ 一体、どんな思いで、なにをやっているのだろう？	
	卒塾にあたって	多くの人に出逢いました。 多くの活動を知りました。 多くの思いを感じました。	

ひょんなことから、市民活動に関わることになりました。

NPO、ミッション、ボランティア、…… たくさんの耳慣れない言葉が、いきかう仕事場です。

未来塾に入れば、そんな話が理解できるかも思っていたのが2年前でした。

2年間活動してきて、その実態はよくわかりませんでした。


しかし、県内で多くの人々が、たくさんの思いを持って、さまざまな活動を行っていることを知りました。

2期生のみんなと「まちづくりって？」、「これから大切にすることは？」

「地域にとって大事なことは？」など、多くの時間をかけて、たくさんのお酒を飲んで語り合いました。貴重な思い出です。

多くの思いをどう形にしていくか、これからです。

草津のバンバもこれからがんばります。

写真 or 似顔絵 	氏名	藤田 眞治	NO. 16
	グループ名	ネットワーク 夢創	
	入塾時の思い	彦根に市民活動センターをつくりたいなー	
	卒塾にあたって	未来塾のみなさんこれからもよろしくお願いします。	

僕にとっての未来塾（この二年を振り返って）

一年目・・・滋賀県内でいろいろなことをしてみたい、自分の住んでいるまちを楽しいものにしたいなどいろいろな思いを持つ人達と出会い、語り、飲み、いろいろな場所に行き楽しく時間が過ぎていった。僕の将来に大きな大きな影響を与えてもらった。

二年目・・・前半は、なかなか一歩目が踏み出せず、模索する時期が続いた。ヴォーリズを調べた。今も強く八幡のまちに残っているまちづくりの痕跡と思いが伝わり、大いに参考になった。

この二年間させてもらったこと・・・彦根エコフェスタ2000と2001、公開討論会（参院選と衆院選）、市民活動屋台村イン彦根、夜楽のお手伝い、首相公選の会 滋賀大会、「芹川 BOOK」の編集、エコエコ自転車まちづくり委員会委員、男女参画広報誌「かけはし」編集委員、ユニバーサル歩道ネットワーク構想検討懇話会委員及びワークショップ委員、2002年度ひこねコミュニティステーション副代表、湖国21紀記念事業クロージング「はじまり宣言」

これから取り組みたいこと・・・いろいろ見させて頂き、会議というものが本当に楽しく有意義に行われているのかと疑問をもっている、まちに関わる人は当然のことながら、仕事を持っている、そして職場での会議の仕方がある、その微妙なずれが原因だと考えている。だから、会議のルールを考え実行していければと考えています。

次に、地域の催物のお手伝いをする学生サークル（若者サークル）を立ち上げたいと考えています。

写真 or 似顔絵



氏名

前田 壯一郎

NO.

17

グループ名

くいいじ

入塾時の思い

滋賀の良いところをさがそう。。。

卒業にあたって

「食」は「人」の下にありました。

「食」は「人」の下に「良」と書きます。屋根の下での営み、すなわち「生活」「家族」などの言葉を内包するのかもしれない。みうい塾後半の一年は「食」に携わった一年でした。この人生のうちに、時にはグレイな一年だったような気がします。と同時にこれほど息苦しい女性に囲まれた年もいままでにはないような気がします。ウブな私にほめてはタジタジしてはなし。先生の数々をお話し下さい。


ともあれ、県外から彦根に居を移してはや7年。だいぶ地理にも詳しくなりましたが、どうやらまだ新です。探すべきもの、場所は山ほどありそう。

まずは自分の足下から、確実な行動を。まず、「自己」を手に入れよう。いずれも「バタフライ効果」のように、大きな動きとなるよう。

この二年間、様々な刺激や笑いを得て、大いに糧を得ました。皆様に出会えたこと、心からの感謝です。

ありがとうございました。

これからもどうぞよろしくお願い致します。

写真 or 似顔絵 	氏名 松井義光	NO. 18
	グループ名 敬天愛人	
	入塾時の思い 下記のとおり	
	卒塾にあたって 下記のとおり	

1 入塾時の思い

自分達のまちは、こんなに素晴らしい地域資源(宝もの)がある。
 そんな自分達のまちを誇りに思う、こんな素晴らしいものを是非自分達の手で
 守り育てたい。自分達でよりいっそう暮らし易くしたい……、
 自分達のまちを見つめ直し、再発見することにより、自分達のまちを
 誇りに思い、愛する気持ちが醸成されます。
 このような思いから宝もの探しや宝もの作りが各地で盛んに行なわ
 れています。


しかし私が住む地域では、この宝ものへの気付きが弱いのが実態です。
 これらの宝ものわかり易い姿で地域の内外の人々に示し、安心して
 誇れる地域づくりへのヒントを探ることを願い入塾しました。

2 卒塾に当って

宝もの探しや宝もの作りに奮闘しておられる多くの人々との出会い
 から「理念と情愛の調和」の大切さを学びました。
 今後は宝ものわかり易い姿で地域の内外の人々に示す努力に
 加え、自治、市民活動、ボランティア等に誰もか用滑に携われる
 サポートシステム作りにも挑戦したいと思います。


PRと少々!!
 北近江の宝もの
 テレビ版です

ワシエ北近江

テレビ版「」
 好評放映中!!

毎週月曜午後6時55分は、
 BBCびわ湖放送。
 ギュ!!とした北近江の魅力を
 おとどけます。



写真 or 似顔絵 	氏名 松田 由枝	NO. 19
	グループ名 ふれあいヴィレジ夢番地	
	入塾時の思い 「未来塾」ってどんな所だろう？ 地元で 何かできるかな…	
	卒塾にあたって アッという間の この1年間でした！！ 素敵な人との出逢いが、私の宝になりました！！	


一年目、面白そうだと申し込んだものの、何をどうしたらいいのか分からず、右往左往
 県下各地から集まった27名の塾生は、ユニークな活動歴を持つ個性派揃い！！
 私にはどんな活動があったかと、少し、かなり 不安が広がる…
 月に1回の集まりでは他の塾生との触れ合いが少なかった、かな…
 研修で聞く講師のお話しは、行政との関わりの中で活動されているようで
 今の自分にとっては、レベルが違いすぎるような…
 「活動の輪が自然に、次から次にと広がっていった」と
 言われた阿部美智子さんの話しが、一番身近に感じられた
 でも普段直接聞くことのできない方たちのお話しを たくさん聞くことができた
 富増さんの工房での作品作りは、とっても楽しかった いい色に仕上がった お世話になりました

2年目、グループ活動が始まる

グループ分け、だれと、どんなテーマで……難しい選択
 「子ども達のために」その視点でいいのか？ 厳しい指摘
 まず、地域で活動されている人たちから直接話しを聞くことに
 カワセミ自然の会、大津ワ-スクール、CASN、子どもネットワーク-天気村…
 たくさんの人に出会い、いろいろな体験をさせてもらった、おもしろかった
 子ども達も いろいろな事を体験して、自分の身体を通して
 自然の素晴らしさや 生きることのおもしろさを 感じてほしい

卒塾までにかたちのあるものをつくることはできなかったけれど
 このグループ研究で培ったものは 広げていきたい
 私も カワセミ自然の会を通して子ども達といっしょに 自然のふしぎを発見していきたい
 そして 子ども達に関わる活動をしているグループのネットワークづくりができればいいな……


最後になりましたが 事務局の皆さん、とくに川勝さん、福田さん、
 わがままな私たちの活動につきあってくださり 本当にありがとうございました！！
 これからも よろしくお祈りします！！

写真 or 似顔絵 	氏名	NO. 20
	宮 本 敏 彦	
	グループ名	ふれあいヴィレッジ夢番地
	入塾時の思い	今考えると、やたらわくわくしていたことが印象に残っている
	卒塾にあたって	入塾からはや2年間が過ぎようとして、あっという間の印象だけれど、楽しく貴重な経験を得られた。

私が未来塾に応募した動機を今から振り返ってみると、地球温暖化やオゾンホールなどにみられる環境破壊の進行と、それに関連して今後の農業に興味があって参加した。その基には、自分達の子どもの世代から孫の世代その先の世代へと繋がっていくのだろうかといった危惧を抱かせる事例があちこちで報告されている現実があつての事でした。そんな気持ちの一方で、新聞やテレビで子どもへの虐待、いじめ、自殺といったニュースを見聞きするたびに、よく言われる言葉で「社会の歪みは、立場の弱い物のところにしわ寄せがくる」とは、由々しい問題だけどこれが現実なのかと。確かに環境破壊も身近で、さし迫った重大な問題として扱われるべきだが、今の子どもたちが大人への発育の過程で、保証され整っているべき環境や条件が、著しく失われつつある現実を感じるにつれ、何かできないだろうかという思いを徐々に、感じるようになっていった。

そんな事もあつてか、子ども達の話や仕草を注意して見ていると、笑いを誘うような事をするかと思えば、大人もびっくりしてしまうような事をいったりと見飽きる事がないくらいであるが、とかく近所でよく見かけるガミガミと子どもを叱りつける母親を見ていると、子どものおもしろさに気づかずに損をしているなあと思えてくる。それと最近気づいたことに、最近の子どもかあ〜と考えていると、いつのまにか今の自分の生活全般から遡って、子どもの頃の出来事などが重なってきて、結局最初の話が何処かに行ってしまうことがある。集中力がないというか、チャランポランというか。いずれにしても、子どもと向き合おうとしてみると、なぜか「今の自分はどうなんだろうか」とか「自分の小さかった頃はどうかだったろう」と自分自身のこれまでの生き方に帰ってくる様な気がする。だからなおさら感じるのかもしれないけれど、子ども達の屈託のない表情と、今の社会が抱える様々な問題を思い比べると、やるせない気分になってしまう。

最後に、この分野では遅れている湖北から参加して、何かにつけて新鮮に感じた2年間で、楽しかったと同時に市民活動を維持運営していく事の大切さと大変さを垣間見ることが出来た。

写真 or 似顔絵 	氏名	森口 和彦	NO.	21
	グループ名	ネットワーク夢創		
	入塾時の思い	入った！これで何もかも夢がかなう！ いつまでも、昨日の私ではない。 こころでひとつやるか！		
	卒塾にあたって	出る？これまでかいな？ これからですか？ まわりには、知恵の輪だけがぼんやり…		

なにかをやる！

何かをやるなんてことは、生きてる私達の持つ古来からの夢です。

いつもやった人のことは、大変な評価をしている私達ですが、いざとなると、私達の周辺には、そんな偉人は皆無であるかのような立ち振る舞いをしでかして、私達自身で夢をぶち壊してはいないだろうかと、ふと、いつも感じているのです。

私達はいつも小さな人間ですが、或る時は雄雄しくなり、又或る時は悲しみに涙を誘うような愛らしい人間です。

そんな私達が何かをやらうとした時に、大きくものをいうのが心と心の繋がりで。

キリストが、12人の弟子を従えていた時に、布教に出掛ける彼らに次の言葉を言って送り出したというのです。

「人の心を打ちなさい。そして、あなた達は、人の見えないところでもいいことをしなさい。」私達は、本当に生きる原点をいつのまにか見失い、心のそこから人を敬い、信じ会い、活かし会う心根を置き去りにはしてきてはいないだろうか？

優越感も、私達がいつも陥りやすい排他的な自我の葛藤ではあるけれど、劣等感も、私達がいつも陥りやすい独善的な自我の葛藤でもあるけれど、私達はいつもそこに迷う人を救う手立てもなく、自立を願うしか手立てが無いのが現実である。


私達は、いったい誰を相手にこの世に生きているのか？

少なくとも自分の周りのお気に入りの相手だけでは無かろうと、思う時、自分の知らない世界の人達がそこにいることを知っているのだろうか？と自問する。

それが自分の活路でもあり、相手の活路でもあることを痛切にわかりかけてきたのだけれど、通じ合うものが無ければ、それはそれまでの世界である。

まさに、ベートーベンが高名なモーツァルトの前でピアノの演奏をしたたった一度の生涯の出会いであっても、何の感動も無くお互い別れあってしまったように。

世の中はまだまだ不条理だし不合理でもあり、およそ人が生きて生活にたゆたかな社会を形成しきれていない以上、私達の夢とする希望やロマンや挑戦の場はまだまだたくさんにある。そして、そんな夢実現に向けてちいさなたった1個の自分達の持てる知恵を遺憾無く発揮して、この世に生まれてきたわたしたちの古来人からの引継ぎの永遠のテーマのちっちゃなカケラにも、ここで習った地域コーディネーターの英知を発揮して行きたい。

写真 or 似顔絵 	氏名	山 元 宏 和	NO. 22
	グループ名	ふれあいビレッジ夢番地	
	入塾時の思い	いろいろな人との出会い	
	卒塾にあたって		

2年間があっという間に過ぎ去った。そんな感じがします。他の塾生も同様に感じる人たちがいるのではないのでしょうか。

卒塾を迎えて考えるのは「入塾時の思いは達成できたのだろうか。」ということ。率直な気持ちとしては、NPOに対する失望感と自分自身の力のなさ、限界を思い知りました。そういう意味では2年間、勉強が出来たかな？と思います。自分自身はここまでの人間、これ以上は何も出来ないということを知っただけでも良かったと感じています。

事務局のみなさんや先生方には本当にお世話になりました。先生方の指導をいただきながら十分な力を発揮できなかったのは私の力不足であり、ご迷惑をおかけしました。事務局の方々にも本当に勝手気ままなことばかり申し上げて反省しております。

最後に未来塾の二期生としていろんな方にめぐり合うことができました。私よりも人間的に大きな人たちばかりでしたが、少しだけでもお話でき、私のようなものを相手していただいたことは感謝以外に何もありません。本当にありがとうございました。

おうみ未来塾二期生研究報告書

2002年5月

編集：おうみ未来塾2期生

発行：(財)淡海文化振興財団

〒520-0801 大津市におの浜1-1-20

印刷：(株)スマイ印刷工業

禁無断掲載

